

川柳塔



No. 840

五月号

麻生 路郎 33回忌・麻生 葭乃 17回忌
中島生々庵 13回忌・西尾 葉 3回忌

追悼川柳大会

と き 6月28日(土) 正午開場・午後5時閉会

ところ たかつガーデン(大阪府教育会館)

大阪市天王寺区東高津町7-11 ☎(06)768-3911

(近鉄上本町から北東徒歩3分、地下鉄谷町九から7分)

回 向 浄福寺住職 西村 哲夫 師

おはなし 日本南画院理事長 直原 玉青氏

兼題と選者(各題2句・午後1時締切)

「松」 川柳塔きやらぼく 八木 千代選

「歩く」 川柳「塾」塾長 寺尾 俊平選

「こども」 時の川柳社主幹 小松原 爽介選

「波」 ふあうすと川柳社主幹 藤本 静港子選

「目」 番傘川柳本社主幹 磯野 いさむ選

「似る」 川柳塔社主幹 橘 高薫風選

会 費 2000円(記念品贈呈) 懇親宴 5000円(同会場で開催)

宿 泊 7000円 アウリーナ大阪(なにわ会館)

(川柳塔社事務所へご連絡ください。申込金5,000円)

主 催 川 柳 塔 社

暑中見舞広告

本誌7月号に掲載する暑中見舞広告を募集します。広告のスペースと掲載料は右記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 1口 2000円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の4種とします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 6000円 ②半頁 9000円

③ $\frac{2}{3}$ 頁 12,000円 ④1頁 18,000円

★原稿締切 5月25日

川 柳 塔 社

中島生々庵先生

橘高 薫風

去る三月十八日、私は岡山県久米南町の「川柳の小径公園」の中島生々庵句碑の前に立った。

うき草は浮きくさなりに花が咲き

昭和五十七年六月十三日の除幕の日も小石夫人とその前に立っていた。つつじの花が美しかった。揮毫の折は脳梗塞の不自由な手に太筆を持ち、難渋の限りを尽くした一字一字だったが、遂に句碑と対面することなくこの世を去られた。

川雑浜寺支部時代から松坂倶楽部時代を経て二十年近く麻生路郎先生に私淑、昭和三十三年一月、福田山雨楼氏逝去のあと空席の川柳雑誌社副主幹に就任。一時は路郎の元を去られたが、路郎の死後昭和四十年十月から新生川柳塔社主幹・理事長に推され、社の礎を築き昭和五十七年西尾某先生に社の代表を譲られた。

生々庵先生を偲ぶに当たり、私の著書『なにわ川柳の一句』に掲載した先生の句の解説を左に記すことにする。

尉は古稀媼は還暦わか緑

作者は日本川柳協合理事長、川柳塔社主幹、昭和三十年の元旦から夫妻で合作の書画作品を残し、今年元日作成の入れると軸の数は二十七点になる。新年の感懷を句と絵にまとめたもので、これは昭和四十二年の作。人生の一里塚的モニュメントである。

表面は茶の会にして両巨頭

どの世界にもボスがいて牛耳る。茶会にかこつけて謀議談合をなすのは戦国武将の昔からのことだ。氏は麻生路郎の死後、同志をまとめて『川柳塔』誌二百号（通算六百六十号）の礎を築いた。今日（昭和五十七年四月四日）阪急グランドビルで記念大会を開く。

可愛らしい目になって来た酔っている

舞妓や半玉の拾元は、固い花の蕾を思わせられるのだが、多少なりと酒が入ると、目もとがほんのりと色めいてくる。すると、座敷の空気までが和むようなのは酒の功德というものであろう。男冥利

に尽きる句だ。「迷子札妻は俺にもつけたがり 生々庵」

表札に書いて我が名に一寸惚れ

表札に中島蓬太郎と書き、雅号も書き添えた。ともに貫禄のある名だと思わず顎を撫でそうになる。日本川柳協会会長で謹厳そのもののお人柄だが、微醺を帯びてタクシーに乗ると、三休橋の蕎麦屋だと言うユーモアも持ち合わせる。

先生は中島蓬太郎としては小児科の泰斗、恩師大坪博士の診療所に勤め、師の死後、同所で医業を引き継いで門前市を成した。先生は恩師思いであり、ご母堂にも思い入れが深かった。診療室には大坪博士の写真を、居間にはご母堂の遺影が掲げられてあった。命日には京都東山の大谷廟への月詣りが欠かさず、墓の小石を一つずつ持ち帰り、机に溜ると今度は参詣時に一つ返すことを繰り返しておられた。鴛鴦句集『生々楽天』の一句。

日に疎くなれそつもなし母恋し

診療所の庭には路郎先生の第一句碑すべりんこ親は涼しいとこで待ちを建てられている。（昭和二十五年）恩義に厚く温情の人であった。

座右の句

最後の最後の味方は妻なりき

私の句

決心した顔を鏡でたしかめる

(栗)

生 嶋 ますみ

川 柳 塔 五 月 号 目 次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 中島生々庵先生

美 人

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 永田帆船

古川柳歳時記『初 鯉』

寄稿 家族から見た路郎と葎乃

エッセイ 脳内革命と川柳

水煙抄

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

大空のころろ (76)

橘 高 薫 風 …… (1)

板 尾 岳 人 …… (2)

橘 高 薫 風 選 …… (4)

東 野 大 八 …… (50)

清 博 美 …… (52)

西 村 梨 里 …… (54)

東 野 大 八 …… (57)

高 杉 鬼 遊 選 …… (60)

宮 口 笛 生 …… (58)

米 田 恭 昌 …… (95)

橘 高 薫 風 …… (87)

美 人

板 尾 岳 人



私たちは、一般に美人のはなしが好きだ。男どうしが集まると、よく誰はきれいだなどとやっている。ブ男岳人が美人論

を論じることはどうだろうか。

わからない、わかることは女性がとり分け好きだから、とくに老婦人の美しいひとがとっても好きだ。でも若い層の美人から、中年層の美人、そして熟年層の美人、それぞれに美しさが違う。僕は美人とすれ違っても、うれしい。でも振り回らない。

乗客数の多い駅構内で商いをしているから美人の基準がよくわかる。

美人が社会から不美人を駆逐することはないだろうけれど、自分を不美人だと演出する林真理子はこう書いている。

「私は働いている女で美人というのを、絶対に割り引いて考えることにしている。『美人で才能がある女』なんていうのを私は絶対に信用しない。美人たちにはいつも、特等席を用意されている。あたかも自分ひとりで見つけたような顔をしている。利口な美人ほど

渺湖抄	八木千代選	(84)
茴香の花	西出楓楽選	(88)
「壺」	富田蘭水選	(90)
一路集「手本」	井上直次選	(90)
「あいにく」	時広一路選	(91)
初歩教室「コース」	吐田公一	(92)
生々庵先生の思ひ出	板尾岳人・岸本豊平次	(94)
四月本社句会		(96)
川柳を愛した人(野村静雄さんを偲ぶ)	瀬戸まさよ	(100)
各地柳壇(佳句地十選/安平次弘道)		(101)
柳界展望		(114)
五月各地句会案内		(115)
■編集後記		(116)

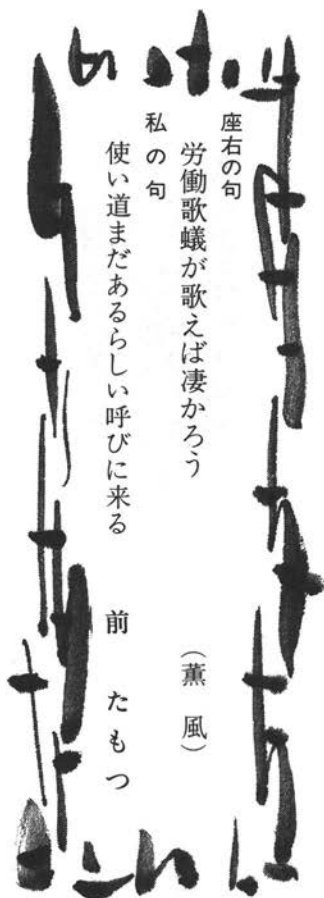
座右の句
私の句

労働歌蟻が歌えば凄かろう

使い道まだあるらしい呼びに来る

前 たもつ

(薰風)



後ろで支えてくれている男を見て見ないふりをしている。私はこういう女性をほとんど憎んでいると言ってもいいだろう。

男が美人を論じることがあっても、残念ながら、美人が不美人を論じる文章は見かけない。岳人から見た美人と不美人の違い、美人はすぐにいい処へ嫁ぐことが出来る、不美人にはあまりいい嫁入り口が期待できない。

美人/そんな言葉を聞くと、古くさい、けげんな顔をされるが、誰でも美人になれる時代になって来た。と言うことは、女も顔じゃない。「きれい」「かわいい」と言われても、現代女性はほめられたことにはならない。美人と言われるよりも、個性的と言われるほうがうれしいのかも知れない。

やはり、賢い女は美しい (落合 恵子)

デパートをうろつくひまがあったら、本を読む方が美しさを増す (羽仁 説子)

書物への恋も女を美しくする (桐島 洋子)

内面的な美しさ、個性美というのが、美人の最低条件 (菊池 綾子)

美人にも性格美人と仕事美人という言い方もある。美人とは女の間義語かも知れない。

昔の新聞に「首無し美人」という見出しの記事があったらしい。首の無い女が美人か醜婦か解ったものではない。

最後に岳人論、美人はマイナスに向かっていくが、不美人はプラスに向かっていく。



橘 高 薫 風 選

大阪市 西 出 楓 楽

鳥取県 土 橋 螢

なにもなし夢をたぐつてみたけれど
わが影をいつも小馬鹿にするわたし
アルバムに張るとやさしい過去になる
姑と母とは違う桐の花

親友は遊び仲間の中に居ず
深い祈りの中で煎じている靈芝

和歌山市 川 上 大 輪

戦争は知らない僕の所為じやない
破裂したのは水道管でよかったね
スキップをしながら春はやって来た
魚屋も八百屋もみんな多国籍
大上段に構えてみたら隙だらけ
日の丸にお辞儀をしてる変な人

父という立派なひとの子にうまれ
女より喜怒哀楽がよく解る
さわやかに金是要らんと断られ
百歳に驚くなかれまだいのち
逢うたびに優しくなつてゆくおんな
てのひらを合わす男の美学とは

竹原市 小 島 蘭 幸

自転車通学ランランランと続くなり
女系家族のパパにホワイトデーが来る
妻の眼鏡がこんなところに置いてある
モノクロの中で笑っている妻よ
猫会議終ると雨が降ってくる
公園にひとりでいると花が咲く

京都市 山海友 熙

大きめの靴履きたがる五月晴れ
五月晴れ重たくなつた泣き黒子
五月晴れ明るい所で手を洗う
五月晴れ出町柳で待ち合せ
五月晴れやさしい鬼と飲む珈琲
折り鶴を一匹逃がす五月晴れ

堺市 近藤 豊子

奈良の春なかなか暮れず鐘の音
公園の椿つややかとお水取り
灯が消され火があらわるる二月堂
籠たいまつ星と火の粉がまざりけり
ペルー事件の無事祈らるる修二月会
試別火 紙衣繕う糊の照り

生駒市 麻生 アート

お早うさん昨日と同じ顔で言う
しまいまで聴けばのろけているの也
今さらに人の情けと土の彩
車座の肴の上へ散る桜
佗び寂びが解らぬままに齢をとり
居酒屋のママの意見も問うて見る

倉吉市 松本 よしえ

引き抜いた白い根はまだ生きている

次の子も遠い所に根を張った
キッチンで煙を出すと叱られる
舞台では師匠の方がよこれ役
爺さまとバラが咲いたを歌います
悲しいね軍歌が好きで大得意

米子市 林 荒介

くらがりて洗った髪が乾かない
風呂敷を解けば前世があばかれる
居酒屋で肴にされているくしやみ
手斧目を残して柱ゆるがない
無位無冠 舌は鋭くなつて来た
遺された茶杓でお湯を汲んでいる

下関市 石川 侃流洞

傘寿祝い寄つてたかつて錆落し
呆けてる母 長男だけはすぐ分かる
夢の中で夢を見ていた笑えない
盲導犬に知らん顔してやる情け
老兵は引つ張り出され楯にされ
傘寿祝う孫が見立てた派手なタイ

鳥取県 乾 隆風

老廃をおだてて花見客にする
C級クラスも同じ消費税か
わたし焼く煙はきつと生臭い

花が散るまでに遺影を撮っておく
うわばみも甘茶いたたく仏生会
腹立ちを入れる仏の火消しつば

八尾市 宮西弥生

病める日のひとりに嬉しい梅茶漬

梅桜 大阪城を和でかこむ

今年から月と祝杯誕生日

輝いて女はあしたへ向きかえる

おぼろ月あしあわせなひとり者

生きてよし死んだとてよし花吹雪

宝塚市 嵯峨根保子

眼鏡にも雪が来るなり草城忌

ぬくもりが欲しくて春の人と会う

影法師欲を背負ってついて来る

切り札をにぎったらしいよく笑う

ああ母性いらぬ手出しをしてしまふ

安心立命雪ふる夜の香華かな (中田純次さんご逝去)

豊中市 安藤寿美子

おくればせながら三月風邪の熱

うつらうつらいねむりしながら大豆炊く

オフレコの会見少し輪をちぢめ

秘密やと言うから一人にだけ話す

八重干瀬にあこがれている風邪の熱

鳥獣戯画の中へ私もまぎれこむ

大阪市 田中節子
母の日に母という字の重さかな

含羞みを包んでくれた母の肩

女の園ざくざく噂掘り出さる

枝交わすしだれ桜の邪恋かな

友情が大人の恋に替る時

今ならばつぐなえるのに母さんよ

八尾市 高橋夕花

三月三日ちちよははよと三姉妹

ちよっとした油断私を蝕んだ

マニキュアして春の痛みを解いている

秘め事をあつけらかと売る本屋

いつのまにか消えてしまった胸の雪

三色のおはぎは母の春彼岸

鳥取市 春木圭一郎

女にも強いが男にも強い

女っ気ない句会なら出かけない

女運ないが子ができ孫ができ

女とは言えず男とも見えぬ

女ぎつねに会いたくなって夜の街

女から男を引くとセピア色

西条市 片上明水

三位以下順はどうでもいいんです

老妻に届かぬ棚が増えてくる

盃もコップも旨い嬉しい日

裏路に裏みちがあるネオン街

足並が揃わず酒の会にする

三人のひとり茶髪の孫がいる

守口市 森川 まさお

四方からよい風の吹く天守閣

梅桜 身軽な花見城へ行く

幼子が啓蟄の土踏み歩く

犬だけが留守番してる森の家

筑さげて漁船の帰りを待つ女

機首下げる海の鯨見え漁船見え

和泉市 岡井 やすお

平和慣れどうやら腰が抜けたらし

インターネット人ばらばらにしてつなぐ

税金を上げても寿命まだのびる

蟻食べて寝ている熊に学びたい

ボランティアするにも授業料が要り

金はもうあきらめ目指すいぶし銀

吹田市 山本 希久子

ゆっくりと春の陽ざしに抱かれよう

たんぽぽの旅少し世間を知りました

喉飴ひとつ約束は果たされぬまま

保護色をまとい世間の中にいる

長電話の癖先方もあるらしい
意外な芽出すかも知れぬ種袋

大阪市 辻川 慶子

くす玉を割る人汗を知らぬ人

シャボン玉みたいに消えるヤング歌手

深ぶかと下げた頭にある打算

タミナルむせ返るほど若い人

色あせた花の過去など聞かぬよう

桃の花早しとしとと菜種梅雨

香川県 池内 かおり

闊ったその後聞きたいカイワレ菜

ずつとずつと女でいたい雛祭り

叱られる声なくなつた隣の子

あんな事ぐらいが笑い飛ばせない

大根の辛さにこだわっている父よ

脳裏からクロン猿が離れない

北九州市 梅田 宣司

荷ぐずれを支えてくれた妻が居る

五臓六腑に感謝したことあるだろうか

灯を消して神も仏も寝てもらい

辻褄が合って疑い深くなり

考える姿で眠る会議室

恩のある人と意見がくい違ふ

弘前市 小寺花峯

浮かんで沈む人生僕の川
一死満塁次の打順を信じきる

春の日差しを浴びるハエ見つけたり
リストラのムチが五十を待ち構え
けの汁の味が染み込む春の酔い

弘前市 岡本花匠

燦燦と夢はずませて子の巢立ち
イヤリング珊瑚と娘の自己主張
散散な昭和史かたる父の背
花暦 苦楽とともに土踏まず
人生の花も咲かせず世迷い事

弘前市 蒔苗果林

りんごの樹を人に見たてて整枝する
葉隠れの諺わかる鋏鋸
この樹には五年も詫びてまだ不足
陽に裸満身見せて樹よ萌えろ
紅い実の傘かむろりんごの樹

弘前市 肥後和香子

喉詰まりする密会に太い雨
みずみずしい男との距離風走る
関西弁津軽の頭にふわっと落つ
雪見酒シルクタッチで夜が開く
更年期障害症状らしき恋

弘前市 相馬銀波

号令を拒んで村の輪を抜ける
一本の藁が欲しくて背伸びする
腹の空く時は煙草の亡父でした
間違いを許すゆるさぬのも親娘
減反の可否の答は秋ですか

弘前市 斉藤 島

甘酒をあがってたんせかまくらよ
マフラーを貰ってからの長い仲
たまごっち連れてきました旅行中
村おこしこれはいけそう柿ワイン
一粒の米も一年がかりです

弘前市 佐治 千加子

天空にチベット仏はひとと炎ゆ
言いたいことねりうねって日本海
ふたごころ血液型のせいにする
檻を出た熊は撃たれる雪の上
肩に来てインコさよならばかり言う

弘前市 浅田隆樹

心経を読んであやまち繰り返す
年月は口あけて寝る妻の顔
少しずつ運の悪さを貯めてます
娘の受験出しそになった雛人形
神田川男も長湯する月夜

弘前市 櫻庭順三

冬晴れて滑るスキーは点となる
樹氷から冬の尻尾が摺めない
えんぶりが舞うと春になる八戸
烏帽子揺れたてがみ揺れる杵舞
納め摺り一斉摺りへ春躍る

弘前市 高瀬霜石

とてもいい一日だった 歯を磨く
絶句する受話器の先の白い闇
誇るべしその皺の数孫の数
生きている 持病ひとつはやむをえぬ
夕焼けや父の背骨が燃えつきる

弘前市 一戸ツネ

岩海苔の青にひかれて潮に濡れ
磯で買う魚はどれも写楽の目
蛸壺の蛸が慌てる章魚帽子
水平線真つ赤に染まる明日の色
三日月に漢詩の如き釣り小舟

弘前市 中山雅城

藤棚の散れば佗しい寺簪(父の五十回忌 5句)
六尺の和尚の輪袈裟細く見え
マント着て和尚は黒い鶴になる
巡り来て父の回忌や五十年
親鸞も蓮如も御座す北の国

弘前市 高橋岳水

久闊も奇遇もあつた花の宴
やり直し利かぬ人生竹の花
少年が少女に贈る花一枝
校歌放吟バンカラもセピア色
ゆずられた席にためらう尾髭骨

弘前市 須郷井蛙

忍者でも現われそうな城下町
デザイナー昆虫展も見て歩き
百点を入れたカバンが跳ねてくる
ローン終えてわが家になった釘を打ち
共稼ぎ子等に酸素が不足する

青森県 西谷大吾

雪解けて森は大きく息を吐く
白鳥を見送る子らの目が潤む
蟹の足ぼきんと折って旅の宿
年金でちびりちびりと地酒酌む
愚かにも造花に登る蟻がいる

青森県 諏訪柳々

月とスッポン二人三脚はじめます
真つ直ぐな道の向こうに老いの坂
白髪染めとれて私も茶髪族
出来心一本橋を渡り出し
茶髪族あれあなたも主義がない

仙台市 川村映輝

静岡県 蘭田 猿 沓

消費税四捨五入するちゃっかり屋
風邪蔓延老いの二人を避けてゆく

この歳で亡母への慕情募るとは

孫結婚つぎは曾孫待つばかり

モンゴル相撲国技館沸かす

東京都 山口新子

花に水 君の回復信じよう

信頼の大きな毬を抱いて待つ

入院をするとい行乱れ文字

笹掻きの不出来逢えない日が続き

信じてや 重いひと言信じている

町田市 竹内紫 靖

ふしは短調 天皇陛下万歳と（露宮の歌）

宗教誌に詠みおり亡母の作歌歴

亡父よりのデータ五尺二寸のみ

携帯電話 病院を出てまた励む

万歩のほか尿測定もする自愛

横浜市 菱田満秋

花だより誰かに何か贈りたい

ロケットの尻へ血税噴き出され

握るものさえなくなつて懷手

火葬場で骨の講義を聞いてくる

歯の磨き方も習っている余生

つつ張った奴も人の子涙する

極楽も地獄も厭で散骨葬

タバコから得るもの名案ふと浮かぶ

野仏の半身に木洩れ月明り

友が逝くその夜の枕走馬灯

羽咋市 三宅ろ亭

文春記事みなまで読まぬに次号くる

脳治療できぬに脳がためされて

大栗と大樺枝うちこれで一安堵

川柳観妻には妻のみちがある

三姉妹の登校村人愛想よし

富山市 舟渡杏花

飾りことばをたつぷり舌に塗つて出る

切り抜ける術をおぼえたまだらボケ

七十年ちんたら生きて思うこと

贅沢な顔です菩薩にたとえられ

つつましくもうひと花と思う日も

富山市 酒井輝

一芸にさえも欠かせぬ広い視野

パソコンに診察をされ見放され

椅子だけが出世して行く世が怖い

どん底で触れ合う人の温かさ

歳の差でパントマイムが読みきれぬ

富山市 島 ひかる

朝焼けに白衣がそつと背伸びする
母になる兆し歩幅を整える

一つ灯がついて一つの灯が消える（長男誕生、父死亡）

行商に通つた父の山歩く

平凡な今日をよろこぶ目玉焼き

富山県 増田 紗弓

越中に育ちルーツは伊賀の風

断わりのための用事を作つて

挑戦状くるまに残る紅ひとつ

ライバルになる筈のなにかたつむり

ガラスの靴わたしには寝る時間です

大阪市 松尾 柳右子

春うらら歓迎に多忙中

瀬峡の虹見せながらジェット船

雪解けの山道闊歩鳥の声

薫風に乗って二人は新世帯

紅潮の頬が語るよ大勝利

大阪市 津守 柳伸

お札所へ三筋の滝の音厳し

志古異聞エスカレーターでジェット船

恙無い日記感謝の文字増える

旅土産 招福狸サクラ咲く

思惑があつて四月が騒がしい

大阪市 稲本 凡子

頼まれたことではないが五十回忌（夫S23年8月没）

仕事と育児涙している暇はなし

娘さえ父を知らないまま育つ

夫に勝る人は無かつた五十年

迎へには来なくていいよ趣味に夢中

大阪市 福岡 雅楓

金のため国も苦勞をしています

清貧の君子の世遠く遠くなり

句三昧さがし続ける旅に発つ

氣付いたら神の描いた絵を生きて

凡庸の絵に朱の色少し足し

大阪市 渡部 さと美

男女平等いえいえ春のイヤリング

赴任の息子送る関空あつけない

自動ドア御殿襖のように開き

女三人あげ足とっているいじめ

先頭ゆれ後尾へ太くなる乱れ

大阪市 奥田 良子

わがぐらし全部知つてゐる洗濯機

ままならぬ心のまどい髪洗う

露の葉の広々として山の寺

叱る人なきままにまた一人酒

病癒え踏み出す一歩大地萌え

大阪市 大塚節子

振り袖でうつまねいとし成駒屋
瞳孔が開いて父は何見てた
骨折の脚全快へまず一步

大阪市 川端一步

御先祖に似ぬ子で下戸の三代目
ホーム走る五人抜かれて乗りおくれ

尖らない鉛筆削りそのままに
近道はないと自分に言い聞かす
この月に友二人逝く西行忌
周平が図書館から消えた早春
お仕事が溜まりだすので呆けられぬ

大阪市 板東倫子

破戒僧の手がクローン人間をつくる
コーラスとダンスでぼっくり寺忘れ
節分の鬼が見ているお水取り
春愁ははぐれおしどりだけでない
雛壇へ宝のようにタマゴツチ

大阪市 井上白峰

大阪市 神夏磯典子

鯉のぼりよ大学生になりました
法話聞く耳もゆったり春の午後
母さんがジョーカー持てばすぐ分かる
いつからか人形の顔孫に似る
平均寿命言いつつうまいもん食べる

大阪市 玉置英子

大阪市 北勝美

紫を蝶々むすびに雛の客
三山を眠くさせてる春かすみ
年度末余る予算にフルコース
口下手の話の接ぎ穂もない揉み手
芦の角伸びて隠すか標

ころろ揺れ芽吹柳は緑増す
たかが粕されど違いの大吟醸
これからは曲りくねった道ばかり
群れて来てみな笹鳴きの出し惜しみ
先恐ろしくローンが育つ羊猿

大阪市 河井庸佑

つまずきの元は目先の私利私欲
自信ある仕事へ肩の力抜く
左遷して納得させる役回り
辞令受け今日のコーヒー苦過ぎる
辞退ともいかず左遷に甘んじる

大阪市 榎本 落児

女房に定年のない有難さ

赤にする八十歳の服の裏

歎喜仏これも教えの一つです

友が死ぬそこに自分の死が見える

あきらめて夫婦喧嘩をしないだけ

堺市 板尾 岳人

御近所の美人がくれたバラの棘

美人には必ず声をかけてみる

伴せはいつも美人に囲まれて

お多福の面をかぶっている美人

八十になっても美人というおひと

堺市 柿花 紀美女

居心地がよいので冬眠出られない

二十一世紀へ二歳の曾孫と頑張ろう

外は風子がいて孫いて温い部屋

老いの手に仲々弾まぬ毛糸玉

青春のときめきはるか日向ほこ

堺市 桑原 道夫

鉄棒がなまの少年垂らしおり

じゃらじゃらと鳴らせば袋いやらしき

ドラマーの派手ではるかな無言劇

中年や胸びれが痒くてならぬ

さくら散りつくして残る春の門

堺市 中野 櫨子

冬の風邪引かぬ自慢が春風邪に

夏のようまた冬のように春気儘

あこがれは年重ねても旬の人

しっかりと破れ繕う知恵袋

ゆっくり散歩季節の風の彩さやか

堺市 山本 半銭

計報続く春の暦は開かれず

ホワイトデー男は値踏みされている

末吉は恋の占い固いバラ

見慣れない小鳥よ山を追われたか

アラームを叩いて春の朝を寝る

堺市 志田 千代

わが家にも金屏風あり雛の壇

フンドシに一点豪華鬼の粹

ごもつともはいごもつとも生きるすべ

友達にお金持ちいて疲れます

お友達より友達とよべる人

豊中市 田中正 坊

梅の花 浪人という女の子

武者人形むかし雑兵だった僕

余生なら人と争うことはない

孫たちとピザについてる平和

火の饗宴ひかえ静まる二月堂(修二会)

豊中市 吉田 あずき

芹土筆 見つけてからは歩の遅し
七段の雛へみんなが正座する
春愁の一つに消費税上がる

二人だけの思い出ありし計報来る
父知らぬ子が父となり子に厳し

豊中市 前田 昭子

黄昏れてふと顧みることも多く
二番目に生まれ家紋に遠く居る

輪の中に相槌を打つだけの顔
喜ばす為には嘘も一寸混ぜ
振り切れぬ過去道連れに生きている

豊中市 稲葉 眞郎

ちらりほろり名残り惜し気に春の雪
梅嗅いで道真の気を納得し

新妻は花粉症付きティッシュ付き
パソコンよワープロよとて仮名だらけ
足許を言いつつ転ぶ詮の無さ

豊中市 江口 明光

お茶一杯の再会へ孫を連れ
妻の留守尾髭骨まで滲みる酒
取調べ埋めたナイフが芽を出した
犬よりもルーズな妻が僕を待つ
賢いと馬鹿は本音を喋らない

豊中市 滝 北博史

余呉湖きみは天女でばくは漁夫
就職は牛尾がいいと甲斐性なし
リフレッシュの松竹座とは同い歳

北新地ここが元祖の河童ずし
お水取り火の粉へ走る古希の妻

箕面市 椎江 清芳

まだ青い僕で二代目荷が重い
薬屋は主治医のような口をきき
味はさて器に惚れる能登の宿

代々にまだ生きている実家の井戸
金婚へ亀の歩幅で辿りつき

箕面市 岩津 ようじ

曼荼羅の仏さまにもある序列
慰めが一番辛い失意の日
事務的な報告生臭い中身

強すぎる信念という困りもの
春ひと日ちゃんは帰らず大五郎

吹田市 茂見 よ志子

梅も善し甘酒も善し大阪城
若い木は願う型に納まらず
長じても子の面影は幼くて
背番号やがて張られる来世紀
髪カット首かるくして春野行く

吹田市 古川 喜美子

茨木市 藤井 正雄

いい友でいようと別れそれっきり
壁などぶつからないで終りそう
花嫁の方が肝玉上らしい

お祝いは現金でねという電話
酔い醒めて金貸す約束したらしい

吹田市 瀬戸 まさよ

信仰はしても馴染めぬ宗教画

ふり向けばふたつみつつの不誠実

髪染めてさあ賑やかな街へ出る

イブセンの男はかくも弱き者

頼もしいオンブズマンに喝采す

茨木市 井上 森生

大阪にむくむくでかく夢ドーム

春を待つところを焦がす二月堂

手と足を鍛えて目指せ新世紀

週四日サンデー続くこのリッチ

もう一つの旅路の朋友は路の臺

茨木市 堀 良江

あの人も電話女の旅の宿

女旅みやげは一つ土の雛

手間暇をかけたセーター着てくれぬ

公然の秘密になっている話

母さんと女同士のかくしごと

価値観の違い古本捨てられる

反逆もきれいに綴る回顧録

そろそろと切り札出すか拭く眼鏡

盛り場へ誘って鬼の牙を抜く

都合よく歯医者に友が一人いる

高槻市 川島 諷云児

清貧をモットーにして無位無冠

手折られた花の鳴咽を聴き漏らす

空気よりときどき軽くなる頭

矢印のとおり行くしかない余生

世も末か男がマニキュアイヤリング

東大阪市 安永 暁子

へその緒に記した文字の若わかし

好意にもNOが言えます孫むすめ

就職戦に流水を見る旅便り

暁のみわくの星に誘われる(ヘール・ポップすい星)

一期一会笑顔さわやか友は逝く

東大阪市 森下 愛論

嘘一つ言って二三歩つんのめり

酔いめいて舞妓も寸時少女めく

鬱憤の落ち着く先の赤のれん

昼酒のひとりで飲んで静かだなあ

明日の幸求めて気楽な老いの旅

東大阪市 指宿 千枝子

乱れ咲く花になりたや春うらら
春うらら仏と話す桃の花

仏にも聞かせる友のありがた味
一人消し一人増やして住所録
無造作に数えてお札本物なり

守口市 結城 君子

雛まつり下戸が白酒買うて来た
雄高の死「死霊」借本返さねば

お相手は見つかりましたか恋の猫
菜種畑に司馬遼太郎の蜃気楼
おののくな何があろうと七十五

寝屋川市 北岡 波留吉

妻に誤解されて品行改める
評判の味は企業の秘密です
運を天に任せ危ない橋渡る
知らぬ顔で耳傾けているスパイ
運が向くと信じて靴を履き替える

寝屋川市 森 茜

ちぎり絵の水車小屋から春のおと
老人になる手続きへ小半日
ごめいわくでしよつか心裸です
許すとか許せないとか遠い景
歩道橋わざわざ渡る万歩計

寝屋川市 柴田 英壬子

あけ方の思索ふと出た深呼吸
黙々とさくら伐るひと眠んでも

公民館の花見ことしはどうします
すみれの花素焼きの鉢で愛おしむ
文化と名のつくグループの旅らしい

寝屋川市 江口 度

ダイエットしなさい梯子から言われ
梅花祭冬の結び目ゆるみだす

沈丁花匂う金魚も動き出す
水面を平らにしたいあめんぼう
ビリケンの足を力士もさする春

寝屋川市 岸野 あやめ

冬苺つやつや嘘は美しい
人嫌い駅のベンチに目を向けず
泣きに来た花壇でひよいと気が変わり
はっとした空気家元御退席
御法礼 無理なさるなと御住職

寝屋川市 籠島 恵子

方円の水にも四季があるように
涙腺がとても弱いのも難儀
懲りもせず四月はいいな春の夢
ドラマ一つつくる包丁研ぎながら
好きですとぅっかり言えぬ土産もの

寝屋川市 堀江光子

夢一つそれは私の秘密です
今はなき友の秘密を守り抜く
出生の秘密明るく抱いて生き
迷い道こんなところに藪椿
母からの習うた歌の皆やさし

寝屋川市 富山ルイ子

所詮一人 悟ったような事を言い
生と死の狭間で何の策もない
非常識が常識になる変な世だ
不本意に今日まで生きてきたようだ
二十四時母頭から離れない

枚方市 前 たもつ

一億総オンブズマンになる浮世
稼いだ金あんな風には使えない
真の友ばくにいるかとする自省
呑み仲間阿吽の息で途中下車
逃げ出せぬ地球きれいに掃いている

枚方市 八田 敏

春が来る元気を出せと路の臺
白木蓮 都会の空に汚されず
古希過ぎて十年日記つけ始め
県や市が億のへそくり税で貯め
物忘れ競い合ってる老いふたり

交野市 福崎 しげお

ひな祭り孫はゲームのほうが好き
翔んだ子へまだ欲かけるブーメラ
ほんとうの飢餓救いたい余剰米
パソコンに興味津々まだ七十
増税へ買いだめ佗しわれ庶民

松原市 小池 しげお

先の先読んだ梯子が立ててある
叱られぬように戻った川伝い
一人娘を正攻法で取りに来る
三流に甘んじながら胃の薬
躓いた石をたびたび振りかえる

藤井寺市 吉岡 美房

気の早い土筆他人と思えない
散るために命の限り咲くさくら
人間の重さ軽さよ花吹雪
散る時に残る桜もまた定め
天地皆春爛漫の旅に居る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

彼岸花恋の虜になった色
失恋の空洞うめる花がない
咲く時に痛み耐えてる花畑
人形が拒絶はじめた憎らしさ
鮮やかに人も金魚も翻る

羽曳野市 吉川寿美

賞味期限切れて夫婦の味になり

一枚の葉書が乱をつれて来る

春寒や残尿感がまだ続く

物干竿に家族の絆ゆれている

針山が眠ったままの姑亡き後

羽曳野市 酒井一壺

欲捨てた途端に物がよく見える

ロボットもそろそろ欲を出しそうだ

ご破算で願いましては食欲で

欲望が掘った墓穴で深すぎる

雪解けを待つ分校のスベリ台

八尾市 生嶋ますみ

出不精の夫を誘うお花見へ

もう帰ろうもう帰ろうと蓬つむ

のど飴を舌で遊ばせ日向ぼこ

富士見えるまでは眠ってばかりいる

母が逝き急にさびしくなる炬燵

岸和田市 井齋一齋

弁解をしない男の瘦せ我慢

咲く気配月下美人と徹夜する

言い訳がくどくなるだけ疑われ

正直に生きてみんなに追い抜かれ

定年がとうに過ぎてる部長面

岸和田市 高須賀金太

突然の春狂い咲きするわたし

三寒四温だ咲こうか咲くまいか

アスファルト 土筆 蒲公英みな消して

飲ましてくれたら何でもばらしたる

たまごっち幼稚な遊びだと思ふ

岸和田市 島崎富志子

冬囲いはずせば虫の寝惚け顔

えも言えぬ香りの石鹼 虹の泡

スクープを取りたい記者の勇み足

喜寿祝い夫と一夜の旅に出る

叱ってもほめても孫は娘の子

岸和田市 芳地理村

欧州へ金婚旅の贈りもの

ロンドンの夢がひろがる旅支度

ミュンヘンのビールの泡を夢に見る

ジュネーブで夢のGTVに乗るプラン

ワイン抜く音がたのしい風呂上がり

岸和田市 岩佐ダン吉

二ことめそれは理想と君はいう

洪面のままに地球が核を持つ

旧友と話題頭の傷のこと

意外性だけが取り柄の僕だろう

気がつけば母さんはしご持っていた

岸和田市 寺田 甚一

昔話に花を咲かせる日の平和
雛まつり孫より祖父が嬉しそう
口こみでよく診る医者をはしごする
パツと使えず貧乏癖は治らない
消費税アツプをだしに買わせてる

岸和田市 古野 ひで

過去と言う荷物背中から離れない
直ぐ怒る悪玉胸にとじこめる
老いてなおロマン夢見て旅に出る
春の雲綿飴の如溶けてゆく
辛抱をする大切さ嫁ぐ娘へ

岸和田市 原 さよ子

あわて者で裏も表もない私
要領の悪さに触れず根気ほめ
忍び足で貧乏神がくる四月
値上げ値上げ四月がこわい年金者
畦道で春の気配を楽しんで

岸和田市 田 中 文 時

行楽の春に水差す消費税
行革を遣る気は無くてポーズだけ
夫よりシヨック大きいペットの死
歴代の浮沈見て来た鯉のぼり
落ちつかず挙動不審の休肝日

八尾市 宮崎 シマ子

あの秘密花の帽子をかぶせとく
恋泥棒こんな私たちの愛もある
表には甘い砂糖が見えかくれ
夜の間に夫の知らぬ文を書く
子が築く父が隙間を埋めてゆく

八尾市 吉村 一風

はぐくんだ庭にこの頃育くまれ
失敗談みんな笑顔で聞いてくれ
美しく歳とる笑みを忘れない
金魚体操妻は何かに挑み出す
峠越し息つぐ汗へ雉子がとぶ

八尾市 大内 朝子

ひとり居へバラを弾んだ誕生日
アルバムへ母のおっぱいのわたし
へその緒の箱にわたしと亡母が棲む
さわやかな風に亡父いる亡母がいる
誕生日くるたび亡父母に深く礼

富田林市 池 森 子

冬薔薇の棘は哀しいほど痛い
歳月の節目をしなやかに曲る
母はもう逝ったのに移り香をさがす
亡母の手を引いて初節句の席に
岬から泣いて帰ってきたカモメ

富田林市 片岡 智恵子

咲ききつた椿の芯が飢えている
葉の振れ誤魔化さず画く蘭の花
夢と欲の深さへむせる粉薬
花の芽に呼び止められる散歩道
したたかに渡る女の丸木橋

河内長野市 井上 喜 酔

嘘に色ないから困るコンピュター
脱サラへ賭けた息子の夢走る
美学です茶髪無言の自己主張
ゆさぶりに強い六十路の生き残り
別世界あるから森へ足が向く

和泉市 西岡 洛 酔

ホップ ステップ ジャンプ 酒のうまさ駆ける
精いっぱい生きて凡夫の二十四時
午前五時働き蜂で起き上がる
四畳半詩を綴るに狭過ぎる
足音にリズムを踏んで古希の春

大阪府 八十田 洞 庵

役得に慣れると法に触れてくる
あれからの音沙汰風が持つてくる
時化の日は遊ぶしかないコップ酒
はしゃいでるピエロの胸に入試の子
りんごむく男に嘘を言い出せぬ

大阪府 榎山 隆 盛

正起屋で再起の杯誓つたに(美津留さんを悼む)
診察券投じゆつくりモーニング
本命の花束だけが壺に生き
割り勘の損得誰も気に止めず
銭別におはこの咽を聴かされる

京都市 都倉 求 芽

どの辺まで春は来てるか雲に聞く
やさしさを求めて鬼も旅に出る
粗大ゴミ家が広けりや捨てまいに
ゴミ袋地球の未来も捨てている
防波堤築いて観光客が減り

尼崎市 春 城 年 代

花を咲かせてのちの命をいとおしむ
日除け風よけ夫のうしろについてゆく
煮て炊いておふくろの味今も無事
花にらのうす紫の片おもい
遠い日の娘の誕生日祝いおり

西宮市 門谷 たず子

残り火をあたためたくて旅に出る
昨日より今日の歩幅がせまくなる
秒刻む音胸に沁む春の闇
病む友に明るい文字を撰る手紙
悲喜交々生きる証と思わねば

西宮市 林 はつ 絵

人に皆やさしくされて病んでいる
出し抜けにカラダ組合ストライキ
オベ中に死ねたらと医者ビビらせる
達観の鯉の血圧跳ねあがる
お医者には腫れもののよう扱われ

西宮市 奥 田 みつ子

病む窓にみどりの風よ そよと吹け
わたしにも時々欲しい牛の角
花束を持つ青年の恵びれず
一言が奈落の底へ突きおとす
一言に虹の翼が生えました

西宮市 亀 岡 哲 子

むし寿司のほっこり京は春近し
折雛のべべ選る京の千代紙屋
赤いセーター豆腐を掬う腕まくり
占いの答まともでつまらない
ほんの軽い気持で開けた玉手箱

西宮市 山 本 義 子

笑う絵馬ばかりでないが風は春
春いっぱい詰め冷蔵庫ハミングし
可愛らしいレンゲ咲けども休耕田
少々のひんしゆく無視し春を着る
矢面に立つと不器用ばかりでる

西宮市 牧 淵 富喜子

ちぎれ雲ジグソーパズル埋まらない
贈呈の本にいささか抵抗す
持て余すものを抱えて春になる
夫婦別姓チャンネルついと変えられる
手強さは自律神経失調症

西宮市 西 口 いわゑ

鶴を折る自分自身のために折る
赤いばら記憶喪失したい日も
風邪引きへストック程よく匂うなり
啓蟄やてんとう虫も羽根ひろげ
満月も何か待ちつつ欠けてゆく

西宮市 秋 元 て る

只管打坐わたしは歩く方をとる
願い事なく流れ星美しい
老いの身を流れる北の血がさわぐ
ブランコの無限の空を信じてた
黒豆パン結婚しない甥が提げ

西宮市 久 保 まさお

一直線男の美学飛行雲
啓蟄ぞ塞ぎの虫も出ておいで
椿円球好きに転ぼう蹴られても
日向ぼこ明日がまだある落ち椿
女には勝てぬいくさを今気付く

一歳の脳細胞に脱帽す

芦屋市 黒田能子

片方が折れて春風吹いてくる

はじめのはじめ人間もやわらかい

話聞くだけで満足してくれる

バーゲンの袋満足して帰る

伊丹市 山崎君子

小雨降るはぐれ小鳥のチチと鳴く

待たせたな心を拭う大きな手

駅おりて素通り出来ぬタコ焼屋

竹トンボ小さくなって菜の花に

春の彼岸亡夫も髭を剃ってくる

川西市 松本ただし

はしくれははしくれなりの屋台酒

ほんのりと地酒に酔うて眠るだけ

あぐらかく膝が冷たいひとり酒

人生のふしめ節目の酒の味

毒に毒効くと決めてる迎え酒

宝塚市 黒台伊佐武

雪化粧して紅梅の香も凍え

鴛鴦も妻先導のルビー婚

春爛漫ミニノブラの青林檎

胸張って生きることなど何もない

無理すんな笑い顔して泣くなんて

街中が釘煮の匂い春はそこ

三浪のうなだれている鯉のぼり

新入社員夢もはかない五月病

天長の樹々青々とみどりの日

定石の通りで個性見えぬ囲碁

加古川市 吐田公一

モンマルトル ベレーが似合う丘でした

草の芽が路傍の石に春添える

二世帯の自慢が涙話する

仕付糸抜いて家内と真珠婚

いかなこの小舟に瀬戸の春が来る

相生市 中塚礎石

ふみしめる一步を今日も踏みしめる

一家団欒 寡黙の母が口を聞く

回覧板ひと回りしてみんな無事

腐葉土に会話を入れて春を待つ

石臼の無口が語る亡母のこと

奈良市 宮口笛生

ネギ坊主菜の花春の急ピッチ

小春日の縁に妊娠してる猫

寂しさをふつつつ白い髭を剃る

子を二人連れて娘が舞い戻り

最高の人生酒がまだうまい

奈良市 米田恭昌

大和高田市 岸本豊平次

リストラの切り口訝えて容赦なし

村起こし俺さ村にもある民話

目を覚ますと晴着があつた枕元

ばあちゃんの波風たてた地獄耳

ままごとのよう釜めしをよそう女

奈良市 天正千梢

薄氷の下に金魚に気をつかい

裸木のその正直に脱帽し

砂煙あげてはしつて来る女

ふりむけばいつもうしろに居る母で

不機嫌は髪の不出来とは言わず

奈良市 吉田笑女

今年こそつづけて書こう初日記

一本の紅梅奈良に春を告げ

年頃の孫の帰りが遅くなり

言うなりに育てた孫の好き嫌い

同居して一人ぼっちの部屋住まい

生駒市 北山悟郎

戦争は悲しい僕の白昼夢

必殺の剣胸に秘め抱いたまま

戦争ごっこ僕はこりごりして居ます

ギシギシと義肢悲鳴あげ酷使する

首洗い何日でも襟を白くする

春を呼ぶ雨音聞いて仕舞風呂

娘ら嫁ぎ妻がつぶやきこけし雛

春休み孫を待つてる布団干す

一年中あるが大根の寒の味

偕老同穴誓つた墓は別姓か

大和郡山市 坊農柳弘

初孫に笑顔を添えて鯉のぼり

畳替えしまひよ銀婚過ぎたから

インターネット スキンシップが欲しくなり

ソメイヨシノ春有終の吉野山

イカ焼きの煙も旨い通り抜け

和歌山市 堀端三男

ライバル意識生きる支えに持ち続け

翔んでいるおんなにもある泣きどころ

でこいと煽てに乗って突っ走り

あの日から互いに意識する仲に

オーシャンアロー走る紀州路春爛漫

和歌山市 桜井千秀

雑草の芽生え指先ほどの穴

烙印を押す人間の傲慢さ

ドッコイシヨで担いでおろす折りがない

若者に迫い越されつつ御堂筋

危ない橋も避けて通れぬ一本気

和歌山市 青枝鉄治

王様のメニューへ加えたい鯛
素うどんを食べてみたいと思う王

送料で買える故郷の旬が着く
栗田へ胸のバツジが虚勢張る
自転車に乗れぬ男のライセンズ

和歌山市 池永正匍

再会の駅に近づくときめきよ
逃げた鬼 七福神の陰に居る
待合室 喜怒哀楽がすれ違う
品書きを何べんも読む独り酒
競馬より観客席が面白い

和歌山市 川上富湖

腐食する時も愛されたい林檎
リセットボタン笑って押せるのは女
大切な人を連れてく春嵐
水てつぼうが一番恐い火縄銃
引力の存在思うおんな坂

和歌山市 山口三千子

恩を仇で返される事予測せず
言えば楽だろうが嵐吹き抜ける
悪妻になろう夫の惚け防止
神さまに祈り通じた千羽鶴 (甥の心臓大手術)
三寒四温心の春はまだ遠い

和歌山市 福本英子

お松明いやがうえにも二月堂
戻り寒鳥も迷った北帰行

伸びる芽を摘んで上司が生き延びる
キャベツ一個もう何日も割いている
国会の審議 失言 詐欺 賄賂

和歌山市 細川稚代

フルーツ籠見栄も虚勢も盛り上げる
自動ドアためらい癖が直らない
問答無用ブツツリ切れた電話線
うたたねの伴奏に聞く株下落
老兵は死なず古戦場への旅

和歌山市 田中輝子

多数決へ黙るほかないバラの刺
男とは深いところで妥協する
結論を出して転がる春の毬
聞き手に回り木枯しばかり聞いていた
取り扱い注意よ姉が病んでいる

和歌山市 宮口克子

春や春 心ときめく人もいて
表情がイキイキとてもステキな歯
おばちゃんは企業戦士を慈しむ
愛おしくおもう男の背なの隙
何が世さ そこであたしは酒を吞む

和歌山市 木本朱夏

潮騒が春の三半規管から
擦り切れた古い思想が鳩尾に
わたくしの胸飾るなら落椿
想い出という美しい刑罰だ
ファンファーレ鳴って卵の割れる音

和歌山市 榎原公子

もういいかい孫もつくしもあわてんば
子よ孫よ君は祖先のモニュメント
柿八年人はいくつで実を結ぶ
愛夢 真 氣恥ずかしいが捨てられぬ
厨房に夫権及んで狭くなる

和歌山市 岩本美智子

温室の慈雨が欲しかる椿園
薔薇と見まがう椿悲しき硝子箱
離流し離の行方は普陀落か
離累々船出の離の怨嗟の瞳
笛吹童子彗星の尾に跨って

海南市 三宅保州

ライバルもやがては同じ灰になる
他人のことなら冷静になれるのに
マンネリを防いでいます好奇心
その筋の情報という隠れ蓑
少年に荷が重すぎる喉仏

岡山市 時末一灯

続けよな孫の笑顔の先の先
裏の貌あってカリスマらしくなり
晩節を全うできぬ記事づく
こちらから電話それから負けになる
変哲もないこの風景いつか見た

倉敷市 田辺灸六

償いの道をひっそり行くひとり
この坂はひとりで越せぬ夫婦坂
煮えきらぬ返事に箸がつけられぬ
亀と遊べば欲を忘れるかもしれぬ
披露宴二人の新しい笑顔

倉敷市 小野克枝

生かされて一期一会の花に酔う
火も風も胸にしまっているひとり
千匹の螢住みつゝ宴のあと
孤を守りとおして寒い父の部屋
欲得ずくで最敬礼をくり返す

倉敷市 井上富子

ほろ苦い条件を呑むタキシード
案内を買ってまごつく英会話
羽繕い間もなく鶴の北帰行
愚痴一つ言わず古びたコンセント
頼りない柱で支え合う家族

岡山県 江口 有一朗

もう死んでよいかと露伴死のゆとり

美しい空の季節と詩人の目

もう少し馬鹿になれよと言う自戒

スパゲッティ延命治療のことだった

初蝶にまつわれ老いの散歩道

岡山県 山本 玉恵

頂点に立つ背に渦を巻く懺悔

美しいと思う私にまだ逢えぬ

八起き目に人間らしい夢に逢う

相打ちの痛みを知った椿の朱

魂に逢いたく白いべを着て

岡山県 大石 あすなろ

手鏡の視野にあなたを置いておく

限界へ挑むパワーを貯めている

風は春しやれた帽子に夢走る

未消化のままで終った流行語

任期満了手かせ足かせ解けてゆく

岡山県 荻野 鮫虎狼

本年も乗り遅れたい霊柩車

西方の浄土信じて車椅子

下町の言葉同士で馬が合い

直線の矢印やがて行詰り

売店をさがすホームのベル無情

岡山県 矢内 寿恵子

仮の世を生きる鬼にも面が要る

古老またカラスを白くしてしまふ

円満を守るドラマの泣き笑い

かたくなに春を拒んでいる扉

枯葉一枚舞うて踊った尊厳死

岡山県 二宗 吟平

大雪をセンチで聞いて尺で知り

着膨れの重さを計る風呂上がり

春ですと杖を休ます梅の土手

四海波一席吟じ祝辞とす

片付けて探し諦め繰り返し

広島市 森田 文

思ひ出をあなたため合いて三姉妹

新しい出会いの子感衣替え

友だちを誘って見よう風やさし

非を認めながら討論つづいてる

支配してされて夫婦の満足度

呉市 楨田 英詩

荒れる海和める海よ老いの日々

忍の糸切つては負けだ水を飲む

母の日も父はお酒を飲んでいた

放浪の明日行く地図はなくてよし

一豊の妻お誘いへ足してくれ

竹原市 岩本笑子

竹原市 古谷節夫

アップアップこの水にさえ消費税
カーテンを開けよう彗星来るらしい
確実にゆっくり老いという魔物

今日は雨夫婦いそいそパチンコへ

白磁抱く女を愛したベレー帽

竹原市 森井菁居

ボスが逝っても体制は出来ている

人生は運なり運のいい男

ブラリブラリの散策も疲れるね

ペンツでも日本車仕様なら要らぬ

猿真似に甘んじ二流のままで老い

竹原市 時広一路

息災となる一病を持っている

足跡の消えた渚に朝の陽よ

淋しいと呟く海よ月も出ず

爛は良し肴また良し外は雨

かたつむり誰も知らない夢を持つ

竹原市 石原淑子

ときめいて薄紫の山動く

お喋りのインコを悼む菜種梅雨

好物のおはぎを姑に彼岸入り

5%自衛策ですティッシュ買う

花ぐもり親の期待の重さかな

春眠を許してくれぬ妻の鈴

花道は妻と引つ張る縄電車

初節句主役の孫がでんといふ

僕の辞書少し時代がずれている

クレヨンのは白は大事に取つてある

広島県 藤解静風

茶髪では様にならないお嬢さま

間髪を入れずに妻が言い返す

他人には言えても妻に言えぬこと

見ていない振りをしている昼の月

過疎の休日動くもの何ものなし

宇部市 平田実男

飼いたに噛まれた傷は伏せておく

一言を減らせば満点近い妻

風見鶏自分の城をよう持たず

赤札で買い正札の値でしゃべり

川柳のお陰まだまだ響く僕

美禰市 安平次弘道

人生の岐路で賽の目信じるか

沈黙を破ると傷が深くなる

偽善者が帰る息抜きしたくなる

禁酒禁煙やはり死ぬのはいやだった

未来図なんて縁なきものよ無精卵

鳥取市 前田 一枝

あや取りのもつれ母子の和でとける

やはり女退院近く紅もひく

厚くぬり素顔隠して逢いに行く

灯のついた台所見てホッとする

わたしにも隠し通したうそ一つ

鳥取市 両川 洋々

働いた靴は明日へ向けて脱ぐ

正体は見せぬ人です猫と棲む

それからのドラマは君と僕で書く

サラエボの神もいくさへきつと泣く

札束で撫でると肩のこりが取れ

鳥取市 西村 黙光

ペンの先今も一揆の血が騒ぐ

丁寧に見盛りをつける酒の量

鉢巻きを締めて空気を入れ替える

ペン執って性懲りもなく恥曝す

金儲け良心までも叩き売り

鳥取市 岩原 喬水

癌告知五千ボルトのパンチ受け

満点の嫁がそろそろ馬脚だす

寒椿下で燃えてる猫の恋

金婚の妻のパンチが効き過ぎる

年輪を積むと額が光りだす

鳥取市 小谷 美ツ千

雪ずりの激しき音よ愛を告ぐ

花の下心分け合うひとといる

青麦が匂う貴男とのスタート

月の子が月からこぼれ濡れている

目の中のナイフをやっと捨てられる

鳥取市 坂田 和歌子

満開の根っこで蛇が深呼吸

不夜城の門を開けば黄泉の国

桜花爛漫油断めさるな春の夢

人間の匂ほど恐いものはない

神様は北の陽だまり好きらしい

鳥取市 倉益 一瑤

無学な母に子は抜群の傑作だ

忘れよう刻があしたをつれて来る

ライバルのセンスちよっぴりセクシーだ

ピアスしたきれいな耳が嘘を聞く

花吹雪 先生も一年生だ

倉吉市 野口 節子

葬列に本音隠したのが一人

金も無い知恵もないのに頼られる

納得がいつてプランコ軽くこぐ

お互いに留守を責め合う一人者

時として杖が他人の顔をする

倉吉市 淡路 ゆり子

人間も退化をたどる土踏まず
永らえて年の数ほど闇を知る
ゴンドラでまだ登り行く夫婦です
振りかかる火の粉わたしを創り出す
隣の猫が恋に溺れて寝られない

倉吉市 山本 玲子

着ぶくれて疎遠になった万歩計
人間が丸くなるころ背も丸い
傾いた身代だっておれのもの
ツゲの櫛 椿油と手をつなぐ
小川に吸い込まれていく牡丹雪

倉吉市 米田 幸子

冷や飯を食べて男になりました
雲つかむような話を期待した
渇水の海に漂う父の船
面接で値踏みをされた東大出
近頃はあだ名で呼ぶと返事する

米子市 野坂 なみ

新舗装 犬の通った跡がある
難関を通った後にある峠
気がつくとも誰が通る道に佇つ
生真面目な芯をときどき揉みほぐす
善人でまだ釣針と気づかない

米子市 青戸 田鶴

芒々と私も甲羅厚くする
明け方の夢で痛みが薄らいだ
髪切ってこころみすかれそうになる
姉の姿見て私を思うなり
軽薄なテレビに慣れてから久しい

米子市 澤田 千春

おもいきり落書きしたい青い空
ふところに再挑戦の火種もつ
再建を祈る杭打つ深く打つ
欲望の貨車にまたもやひきずられ
赤ちゃんが笑えばみんな笑いだす

米子市 林 瑞枝

音楽好きを招いた海のハーモニ
美女と言うキリンの首で風邪を召し
人生を愉しむ種を播きに行く
流木は潮のなさを識っている
手すさびの雛でベッドの友を訪う

米子市 光井 玲子

花暦四季の手帳をふところに
子らの声聞けず原っぱ泣いている
雑草の中で光っているよもぎ
その先はジョークだなあと聞いておく
叩きあげの腕は妥協をゆるさない

米子市 中井 ゆき

雪像が少しよごれてフィナーレ

谷底の小石ころころ海を見た

打つよりもきつい言葉が降って来る

石だたみ くぼみにたまる春のウツ

春彼岸花を抱えて逢いにゆく

米子市 鷺見 正子

良心が足らぬ千代田区永田町

毎日がまつり五歳のおもちゃ箱

背景があつて強気な番犬だ

損得でゆれる愛情物語

結婚は面倒と言う娘がひとり

鳥取県 西原 艶子

春の陽をいただき蝶も畑へ出る

縫い物が上手な母へ既製品

合掌をしても祈りは届かない

ひとり居の部屋が寒くて演歌聴く

あふれ出る涙あなたの贈り物

鳥取県 津村 八重子

湯の中でやせた肥えたとかましい

元気です幸せですと娘の便り

うれしいな曾孫も胸にとんでくる

あははと笑ってことを荒だてぬ

川柳を友に八十路の坂のぼる

鳥取県 黒田 くに子

ついてくる荷も重からう影法師

女ひとり荷がおろせない肩パット

花に水わたしドリンク飲んでいる

鍬の柄にわたしの指紋おぼえられ

頂上の気分いい人とお手をつなぐ

鳥取県 土橋 はるお

隣から金庫を開ける音がする

あれほどの二人に別れ話とは

二階からりんごの歌が降りてくる

通知表またあがったね良かったね

神さんが笑ってくれるまで拝む

鳥取県 岩崎 みさ江

仰向けに寝ころんで見る大きなさくら

ためらいに跨ぎそこねた水たまり

埋めた実を忘れたリスを囁わない

まなぎしの挨拶もらう日の至福

ばたん雪 母に手紙を書いている

鳥取県 谷口 次男

肩書はたいてい金で手に入る

カラオケはビール二本がちょうどよい

重油とれ海が楽しくハミングし

新入りに変な味つけ部下にする

山が消え歌を忘れた鳥ばかり

鳥取県 新家 完司

誰の葬儀かみんな陽気に酒を飲み
臥してみる壁は果てしもなく高し
仁王様を見上げていると稲光
赫々と我が遺伝子に潜む毒
新しい手口でまたも騙される

鳥取県 土橋 睦子

根回しのよい花束を抱かされる
辛夷咲くふる里の山絵に残す
無器用に傾いているカレンダー
猫抱いておくやみ欄に目をとおす
馬鹿なりに母性を武器にして生きる

鳥取県 田村 きみ子

神さまの足音を聞く村祭り
人間の都合で犬を捨てに行く
厄介な服だボタンが七つある
水族館で会う約束は娘なり
疲れ気味の母をねぎらう花の雨

鳥取県 橋本 多哥由

気の弱い鬼でたまには経をよむ
冬ひとり生活の音静かなり
思い出が思い出を呼ぶ雪中花
福耳も金と美人にや見放され
退職し破れ靴下はいている

鳥取県 石尾 かつ乃

先祖代々この井戸水に恩がある
なれそめは一杯の水あげてから
少年を叱る言葉が出て来ない
運のない靴でとぼとぼ来た道を
杖のいる年ではないがよく転ぶ

鳥取県 羽津川 公乃

申告を済ましゆつくり雛飾る
たまに来てあちらの祖母は点稼ぐ
メニュー選る孫は三人個性だす
どうしよう妻のおみやげ忘れてた
そつのない挨拶おじぎばかりする

鳥取県 林 露杖

白菜も蕪も咲かせて花菜漬け
露のとう亡母への想いほろ苦く
肩と膝老いの試練と識る痛み
焦心の日々に春光眩し過ぎ
アンケート八十代の欄がない

松江市 舟木 与根一

億単位のお伽噺と春の鬱
大学出た法話浄土はまだ遠い
呆けぬよう時々届く果し状
味方にも隠しておこう縄梯子
芸もなく田圃まわって日が暮れて

出雲市 久谷 まこと

三日目で舵が曲がった予定表
どう変わる平均寿命までの夢

冬ごもり目ざめた時の服を選ぶ

艶やかに残り香さらす落ち椿

五百羅漢似た者同士隣り合い

出雲市 園山 多賀子

紫蘇酒なる曖昧な酒飲んでいる

親切ごっこ少し疲れた夫婦独楽

穏やかに自己評価する福寿草

成り行きで疑心暗鬼の橋渡る

人生の縮図の皺がよく目立つ

出雲市 吉岡 きみえ

冬眠をさめてひとりのとぐろ解く

他愛ない夫婦炬燵の花賭博

春かすみ遠い遠い人想う

春だものみんな忘れて唄おうよ

なにもかも春のせいにしておこう

出雲市 板垣 夢 醉

夕陽食べ静かに海は眠りだす

なぜここにきたのか神に聞いてみる

覗くなど書いてあるので好奇心

潮時とみたかハラハラ散る桜

帽子から出てこぬ鳩に知恵がつき

出雲市 小玉 満 江

残された時間に夢は食べ切れず

海老せんをパラパラ鳩と遊ぶ午後

二の足を踏む癖老いの悲しさか

春一番出雲なまりが弾み出す

カラオケとオンザロックで夜が更ける

出雲市 竹治 ちかし

起きて寝て子の居ぬ家はすぐ暮れる

天才でないから五十までも生き

母二人生みも育ても僕の母

齢五十 五十回忌の母想う

線一つ引けば分かれる右左

出雲市 岸 桂子

喝采の中に嫉妬の音もある

長話テレホンカードから切られ

誘惑にいつも脅えるダイエット

ためらった分だけいつも負けている

人憎むことは書かずに済む日記

出雲市 石倉 芙佐子

最果ての旅白々と波の音

母の手にもう届かない花筏

さよならは風の合間を縫って言う

だんだんと解けなくなっていくパズル

満月に弓を番えた父愚か

出雲市 伊藤寿美

別れた人の美味いコーヒーふと思う
夫の食卓に降圧剤を今朝も置く

暇らしい老夫がチラシ読んでいる

古里のむかご喜ぶ老姉が居る

直会おとこと遊ぶアッチムイテホイ

島根県 佐々木 鳳笙

倅還暦親爺ゆずりの頬かむり

念仏も称えられない弟よ(弟、言語障害)

姿見に立つと輝く妻になり

見えぬ手に赤い苺を乗せてあげ(盲老人ホームにて)

抱き上げた孫の彼方の普賢岳(雲仙に遊ぶ)

島根県 小砂 白汀

クスリまだ飲ませますかと反逆者

来年の花を見とどけ椿落つ

スイッチも草臥れたのか点らない

ブレンドを忘れた米屋店を閉め

雪解けて針がむずむず花とけい

島根県 松本文子

捨て石もときどき汗をかいている

今だから言えるふるさと捨てた訳

弱音吐くまい鶯の谷渡り

泣く暇もなかった寒椿ぼとり

私を守ればつむじ風になり

島根県 榎原秀子

人形もほえむとていい報せ
旅立ちの春へ布団の大バーゲン

私でもお役に立てばありがたい

鶯の初音をきいた墓まいり

梅日和ひとりゆっくり点てるお茶

島根県 堀江正朗

半世紀前に見えてた桜恋つ

戦盲の拳骨知っている涙

寂しさに妻の笑顔を描く瞼

振り返る足跡眠れないままに

怒りとも諭しとも聞く風の声

島根県 堀江芳子

戦盲を静かに酔わせた桜

夢のまた夢と太閤さんでさえ

年寄りにテレビ料理は合いません

いっせいに山駆けおる春の色

お茶入れる潮時 夫に負けておく

島根県 西村早苗

忙しくなり雨読とはいかぬ

敵ながらあっぱれ うかと四月馬鹿

母の味沢庵漬を日に三度

腕組んでさも考えて居るように

久し振り菜の花畑あるお家

鳥取県 幸家單車

世の中に赤信号が多過ぎる
早とちり他人の顔を見て走る
ライバルのシッポ掴んで引き落とす
聞かれては困る話を聞きたがる
一人居て猫と対話の日が続く

鳥取市 杉本孝男

葬の列雪ちらちらと舞う別れ
処世術賀状の丑に諭される
ライバルが光ると俺に影がさす
新春の雪は地酒とよく馴染む
乗心地満点馬も嘶くよ

鳥取県 乾喜与志

交流の餅搗き会で豚汁も
三日寝てホンコン風を飼い殺す
膝痛む老いはそろそろ歩めとや
干涸らびる手からやんわり出る母性
凝る肩をたたいてくれる者がいる

鳥取県 さえきやえ

あれやえさん鉄砲百合が咲いたかえ
まだ乗れる自転車雪に哭いている
天狗になった針へ魚がよって来ぬ
冗談の分からね人と碁は打たぬ
木の橋でいいよ平和が続くなら

(秋女さん・夕子さんと
夢で逢う)

香川県 川崎ひかり

水ぬるみオツセおっせと芽ぶく草
正論をお茶にうすめている議會
一本のマツチが油断に火をつけた
山だっておければ自然発火する
見栄三分よろこび七分段かざり

香川県 木村あきら

大脳は眠り痴呆が眼を覚ます
狸寝入りして方策を練っている
ふる里の温み忘れぬ影法師
檜山の登山口にも桜咲く
札東で開けてはならぬ登竜門

香川県 工藤吟笑

死ぬまいと思つて今日も薬飲む
眠つては居れぬ今年は文化祭
バアさんに凭れ掛かつて生きてゆく
短気者眠り薬を嚙んで飲む
眠りからさめた埴輪にある笑顔

香川県 成重放任

計算が狂つてもうけた三人目
一桁の計算違いで狼狽える
大木の椿一輪しか咲かず
茶漬でもやっぱり家が一番だ
山火事も三日に雨が仕舞つて

香川県 堤 くに子

トキメキを靴にも詰めて旅仕度
ケーキカット夫婦の夢は無量大
日本の重さを計るドルと円
腹心の野望升から溢れそう
本題からそれた話で輪が和む

松山市 宮尾 みのり

愛一途 袋小路があるばかり
ふるさとは不便なままが良いとエゴ
過疎進む中で苛酷になる自然
こんなにも暮らしが顔に出た月日
ライバルをすぐに見つけた春四月

松山市 丹下 美津子

一姫へ里が張り切る座敷離
歩いて乗って夫婦気ままな春遍路
別れと出会い悲喜こもごもの春の駅
女です甘い話に乗りたがる
春風に妻の財布もうかれだす

今治市 越智 一水

悪口も愚痴も秋晴れ言わせない
早春の車窓カーブへ海光る
早春の光へ前向きに歩む
外庄に屈し焼酎覚いじめ
議員バッジ詐欺の道具として使い

今治市 野村 京子

春の誤算おとこがひとりパンを焼く
切手貼りあとは流れにまかせよう
なにもかも許してしまう昼の月
春うららうららと妻に出るあくび
妻や子があつて跳べない水たまり

高知県 赤川 菊野

沖繩の知事に男の顔を見る
お隣が此の頃やけに親切で
イゴツソオもものの道理は心得る
献体かドナーか本気で考える
言いにくい事はオウムに聞かせとく

高知県 小澤 幸泉

善行のウラにかくした人生譜
寄り添うて初対面なり茶髪の娘
切ることを忘れた若い台所
フレームが手塚治虫に似せられる
騒ぐほどに血税だけが消えてゆく

唐津市 久保 正剣

オウムより解脱しているホームレス
きな臭い殿様も居る永田町
鑑定団に出したらゴミに値がついた
浮気癖譲らないでと嫁が言う
名刹を拾い食いして京の旅

唐津市 山門幸夫

古唐津に一輪優し野辺の春

啓蟄だ蛙よ眼薬つけて出よ

点滴をこんなにしても血は紅い

仲間たち先に逝くなど勝手言う

ああ桜今年も競い咲いて泣く

唐津市 山門タミ

雛ずしに孫を重ねて嬉しがり

古雛を語り部にして飾りつけ

母の味その仕草までつく娘

忙しい忙しい人に世話になり

退院が間近で歩幅広くなり

熊本市 永田俊子

天下国家論じる八十路のクラス会

喇叭水仙が喇叭吹いてる兵の墓地

主婦という名もない人生冬すみれ

握りこぶし作らぬ男の指環の手

塩味がひきたてている人生譜

熊本県 高野宵草

お互いにやさしくなつてご同病

悪友が笑いとばしにくる見舞

断れば恥をかかせるから座る

春風駘蕩として電話留守

読書してさばる日課が二つ三つ

砂川市 大橋政良

分校を一つ呑み込む過疎の風

見て食べてただ忙しい旅でした

定年で自分の歩幅とり戻す

鼻先で世間話を聞いている

黒石市 相馬一花

都会から帰るとゆつくり歩く癖

うま過ぎる話に乗ったコガネムシ

ご自分の歳を忘れて美女探す

定員は一名ですよ四畳半

弘前市 今生恵子

春一番水子のかなし風車

弥生の風と卯月の雨で萌ゆる若芽

国内の名所はあとに空を飛び

香港からコピ―のみやげ買ってきた

十和田市 阿部進

宝石はないけど心エメラルド

追伸で本音吐いてる娘の手紙

あの頃をよみがえらせるジャツパ汁

立ち上がるきつかけくれた孫の顔
十和田市 小笠原敏人

イヤホーンに一人笑いの種がある

冬道は寒いが猫は散歩する

披露宴泣かせる祝辞花を添え

ドック部屋無口で通る三日間

八戸市 島田昭治

亡妻よ見よ炊事洗濯お手のもの
年金に励まされてる死なれない
恋しくて墓石抱いて泣いてくる
孝行の次男大相撲に招待す

横浜市 清水潮華

吊革に肩こりの腕上がらない
五十万控除に寡婦を生かされる
新築の祝 置場所指定され
時たまに渡る人あり歩道橋

富士宮市 渥美弧秀

お早うの体操富士は五月晴れ
リハビリの友の便りに身を切られ
挫折した友の書状に励まされ
雪霽れて富士は再び視野に生き

京都府 稲葉冬葉

ふみカード贈って豊かになっている
ひとりになると口ずさむ唄があり
手懷けたつもりが言うままになる
惚気から惚気におわる電話口

大阪市 小林周信

調律師 仕上げにシヨパン弾いてみせ
銀行カード僕の名前で妻が持ち

満たされぬ願いも生きる糧にする
名が売れて取り巻きが増え友が減り

大阪市 川原章久

闇の中奈良は火の波人の山（お水取り）
焙烙に厄託し割る壬生の春
川柳を枕に法話する和尚
耳の穴掘って貰うて聞く小言

大阪市 本間満津子

無菌室でも騒がしい世に胸疼く
共通の痛み持つてる祝傘寿
可能性無限の未来へ呱呱の声
里帰り匂いの土産沈丁花

大阪市 清水利武

また一人孫が増えたよ鯉のぼり
新緑を満喫してる鳥の声
国民の怒り尻目に消費税
カラオケで生命が伸びて古稀祝う

大阪市 藤田頂留子

やましさない小母さんのかい声
コンパクト開いて気分おちつかせ
殻をぬぐより逃げ道はないらしい
草の芽がアロエの鉢に居候

大阪市 町田達子

春の噂は少うし濾して聞いている
会い別れ重ねドラマチックに花の下
友の訃が悲し寒の戻りを尚更に（今西静子さん追悼）
内乱の惨さユリシーズの瞳観る（旧ユーゴー）

大阪市 中田 あい子

被災地に残した桜に春めぐる
涙した美談に裏があつたとは
平和主義つらぬく友の妥協ぐせ
いじめには強く痛みに弱い老い

大阪市 寺井 東雲

観光地公衆トイレホテル風
流水が消えやがて昆布のオビ並ぶ
新幹線新設までも赤字ふえ
今時に財布届けてくれた人

大阪市 小糸 昭子

香りなきときめき昼のお月様
手短にアレとコレとで通じてる
布石した中へ面影隠してる
産科病棟未来背負った子が並び

大阪市 川内 叭笑

強がり己が弱さの裏返し
ハイテクも不意の客には役立たず
（ナホトカ号事件）
楽しみは貴方がくれるラブコール
気配りは酒の席でも仕事でも

大阪市 清水 絹子

神秘の幕こもあすこも考古学
目覚しの亡夫の六時が鳴っている
海王丸明日は船出だきつと晴れ
夫婦別姓枕カバーはペアルック

大阪市 黒崎 恭子

ときめきを忘れた春がやってくる
さわがせてちよつと気になるタマゴツチ
老い二人もくもくカレー食べている
春の音青い青い菜きざむ音

堺市 黒田 真砂

春芽吹く孫の巣立ちと時同じ
点滴に夢の中なる亡母の顔
身体ふらふらして虹の橋乗りおくれ
床につけば夫がコーヒーいれてくれ

堺市 吉本 菁風

目立たずに酒場に愚痴を置いて来る
曲がるだけ曲げて盆梅育てられ
商いに格差が見える屋台村
十違い父より怖い兄であり

高石市 浅野 房子

感情の起伏が波を打つ日記
かすみ草主役のバラを食いつづけ
風邪三日やつと在り付くぶぶあられ
単身赴任地酒地ビール事欠かぬ

豊中市 井上 直次

華やかな昨日が險離れない
二次会へ鬼がこっそり見る財布
長電話切って笑顔となる悩み
投書欄理論整然ぐちってる

豊中市 湯浅馬洗

迷い札持っているかと質す友
五十音順あの世への順別らしい
受験首尾聞くを憚る二浪の子
校庭の子どもの声も日脚伸び

豊中市 松岡久留美

欲にぼけ己が頭の蠅追えず
胸襟を開いて語る無二の友
水温み春が私を誘い出す
功成つて他人の労苦解る人

池田市 岡本吉太郎

エリートは只酒飲んで墓穴掘る
鄧小平五尺の身体世にひびく
しゃべくりの相手をさがす定年後
ずるいなあ運命ですと何時も逃げ

池田市 藤井計光

鼻水をすすり悪態ついている
スノーフレークひっそり優しく春を告げ
政治家が減って政治屋のさばらす
ゴミの日は目覚し代りにカラス鳴く

池田市 栗田久子

まんさくの花 手踊りのように咲き
ぶちまけた心のひだを調える
やぶ椿音もなく落ち天に向く
筈はただひたすらに天を指す

吹田市 栗谷春子

菜の花とひびきやさしく旅さそつ
春近き月の居どころたしかめる
卒業式すまぬうちからアルバイト
インテリアためいきばかりうそばかり

茨木市 島元ふみ

友達のような夫婦の差し向い
金さえあれば美人になれる気にさせる
まあまあも出来のいいのも皆わが子
子供の私ひよつと居そうな好きな町

高槻市 井上照子

風媒花不本意ながら根を下ろす
梅が香に誘われ軽い靴を履く
来し方にこぼす涙は振り切ろう
彼の目に麻薬の如き魅力みる

高槻市 芦田静江

芸術家神の雫にあやめ咲く
シオカラとんばあやめの風に酔うてくる
ポールきらめくりゾートの町明日の歌
流鏑馬の童子まぶしい青炎える

寝屋川市 平松かすみ

ここに幸あり歌った姿とこしえに（太田藍子さんを偲び 四句）
賀状当選福ありがとうとあなたから
花の輪の花のつぼみの頃でした
ありがとう十六年の友情を

寝屋川市 酒井 勇太郎

美しい笑顔残して藍子近く（太田藍子さんを偲んで 四句）

主婦 F A 宣言 藍子 黄泉の国

多芸多才花輪で故人偲ばれる

子の開花きつとあの世で見えますよ

寝屋川市 太田 とし子

二十五文の靴と豆靴鳥の籠

ききすてにならぬ話をききすてる

医療費が上がるとあわてる不整脈

知らぬこと知った娘の十三夜

寝屋川市 坂上 高栄

先生に聞いても知らぬ御名御璽

痛いことばかり言うけど温い友

履歴書に恥ずかしそうに元教師

ゆずられた席ためらいの礼を言う

寝屋川市 後藤 黎之助

丑年もゆつくり出来ぬ早五月

温室で育てたイチゴ甘いこと

雪国の生れがころぶアスファルト

そっと拾う嫁ぐ娘の長い髪

枚方市 海老池 洋

福は内 鬼もティッシュを撒いている

友達と言われたくない人もいる

歳月に遠き友より近き友

暇かけて孫が一つを選ぶ夜店

枚方市 二宮 山久

嫁がせた娘と妻の長電話

春はそこ夫婦で見つけたつくしんぼ

今日生きたための靴を磨く妻

たまに帰る我がふる里は過疎でなし

藤井寺市 高田 美代子

猿の子でもものの見事に樹に登る

投票所へ行くむなしさはもう何度

爆弾を抱えて我慢しています

親切な紳士に席をゆずられる

藤井寺市 中島 志洋

風かおる緑に弾む万歩計

二日酔い燃える緑が目にも痛い

似合う娘も似合わないのもニューモード

妻にさえ言えぬ不思議な夢を見る

藤井寺市 福元 みのる

記念切手喜びそうな孫へ貼る

河内弁出て盛り上がる歓迎宴

自分にもある癖だからなお嫌い

カルテ見る医者之眼を見てあきらめる

松原市 玉置 重人

何よりのクスリ年金振り込まれ

診察券ひたすら順を待っている

ストレスが溜まるとケンカすることに

黒パンの味を忘れたことがない

羽曳野市 田 中 透 太

二つ目のカーブで油断してしまふ
先頭に立つと蹟く癖がある
まだ語り継ぐことありさくら咲く
借景に生駒二上に見える家（転居して）

八尾市 高 杉 千 歩

恐いほど生母に似てくる杜若
一件落着さくら吹雪を見て飽かず
スーパールのカード改札でひっかかり
母さんの知恵借る電話へ靴をはく

岸和田市 長谷川 呂 万

美人から夜明けのコーヒー誘われる
残ったら一緒にになれる人がいる
雪しんしん恋忘れず北の宿
金色の恋輝やいて我が余生

岸和田市 藪 野 けい子

お土産に円が顔きくハワイ旅
本命をかくす義理チョコラッピング
風邪熱がきれいにとれた置き薬
動燃の爆発事故にまたミスか

貝塚市 池 田 寿美子

春を呼ぶ大人の味に箸休め
逢うて来た花の疲れをハンガーに
窓拭いて春の陽ざしを誘い込む
ショーウィンドーにゼロを数えて仕方なし

富田林市 松 本 今日子

誤算勝算まだまだ若い小さい鼻
泣きじやくる孫と一緒に泣いてやる
入社式茶髪も真直ぐ前見すえ
一服の居場所を探す春の風

河内長野市 植 村 喜 代

二人の娘会ってほしいと慌てさせ
めがねばかり曇らせている入院患者
手入れせぬ梅が庭で笑つてる
怖いほど星降る夜を思い出し

神戸市 山 口 美 穂

消費税 医療費アップに怯えてる
主役脇役それぞれの持つ悩み
今日もまたあつという間の一日で
追伸に足す庭の花草のこと

尼崎市 田 中 薫

老眼鏡が曇る 贗札作り
新聞に殺人のない朝のすがしき
雨に飽きよろよろ辿る芭蕉真筆
泣き虫の長男人前結婚式

尼崎市 春 城 武庫坊

被災三年仮設の桜何思う
仮設にも同じ朝陽がさしている
未だ負けと言わずにおこう落椿
バックストレッチ既に勝負は見えている

西宮市 菊池 トミエ

セーターを娘とママが交互に着

ストレスもほどほどにあり頑張れる

前向きに肩の力を抜いている

紅椿 手折りたくなる備前壺

西宮市 刈田 泰司

手のひらを返したように離党する

林間に潮騒を聞く隠れ宿

社外秘と押すと社外に洩れ易い

足裏に砂の余韻の残る旅

西宮市 池田 善守

定年後本音で妻と生きている

酔うほどに酔ってないぞとどなる癖

サイン会一度は書く方してみたい

悩みなど無縁な顔も悩みもち

伊丹市 小熊 江美

痴呆でも老父に戦地はある記憶

愛し過ぎ孫の気持をきずつける

亡夫の香のするセーターが捨て切れず

こだわりの気持も折れて朝が来た

宝塚市 上田 佳秋

札束の罪がこんなに軽い国

病人に煙草の害を論される

乱視メガネの故だけなのか世の歪み

涙腺の脆い男で寂しがり

川西市 氏林 洋敏

春雪の地に触れなんとして消える

両隣意識したことないお墓

補助席に大事な人を乗せている

どう見ても仁王の顔は怒ってる

大和都山市 榊原 慧心

花よ蝶よと育ててもよその嫁

現実と夢の狭間の二十代

仲裁に口べた入り火に油

聴診器地球の鼓動聞いてみる

奈良県 長谷川 春蘭

肩寄せて春待つ石の仏たち

宝塔の影に憩いて春惜しむ

君の嘘みんな知ってる僕の勘

ウソ ホンマ 真偽わからずする会話

和歌山市 玉井 豊太

晩鐘へまだ最中の花見ごぎ

帰りつく港へのろし聞かせよう

デモの列鳥合の衆で参加する

やじ馬が邪魔で消火に走れない

和歌山市 山田 高夫

青天の霹靂孫を抱いて来た

三寒四温そんな女は大嫌い

こけおどし張り子の虎は首を振る

赤信号だあれもない交差点

和歌山市 福井桂香

春風と聴くフルートのやわらかく
潮騒がきこえますかルーズソックス
赤い靴れんげ畠に紛れ込む
桃源で遊び疲れた男たち

和歌山市 玉置当代

待ちきれぬ宴に花は三分咲き
頬染めた頃もあったね竹とんぼ
仮名文字のまるさに女ごころかも
あいいうえお詰めて翺びたつランドセル

和歌山市 古久保和子

膏藥の匂い颯爽春の街
背鰭立て会社訪問するスーツ
学歴はないがうちの子無農薬
右向いたままでゆるゆる生きている

岡山市 井上柳五郎

腹立ててばやく世間も春の鬱
折に触れ己を飾る嘘で逃げ
老残の生き甲斐持続五七五
大切なきょう一日も無為に消え

岡山市 岩道博友

勿体無い言えば老齡と叱られる
分け前の話で希望の夢が消え
車椅子いつかは枯れた花になる
道の駅素朴な店で町史聞く

岡山市 福原辰江

頂上ででっかい母の握り飯
ボタン押すだけの生活が戸惑わせ
大根が煮えてささやか老母の笑み
屈折の中で味わいふと見つけ

岡山市 福原悦子

一人旅愚痴を捨てたり拾ったり
熟年の良薬歩くだけ歩く
母が聞く返事できない事ばかり
花活けて花より好きな人待つ

廿日市市 林野甦光

大杉の樹齡搦めた村起し
垣根越し話が見える夫婦仲
茶に誘う何か一物ありそうで
消費税に慣れた文句も口の中

柳井市 弘津柳慶

子も孫も私のボケを気にしてる
大人達をあざ笑ってる女子中高生
責任を役職辞任でのがれ去り
官主導哀れ大臣の影うすく

鳥取市 武田帆雀

妥協などしてないセロリがぶり噛む
倒産の新聞ホットモーニング
ジョギングのコースに渡る橋二本
椎茸山 三日見ぬ間の春の彩

鳥取市 美田旋風

ときどきは若さが欲しい途中下車
喪服着た女にもてる友の通夜

いつの世も民は年貢に泣かされる
童謡のチャイムが昼を告げる過疎

鳥取市 植田一京

スタートへ無心になれと他人は言い
両手に余る欲を抱えてよく転ぶ

過去みんな消すには明るすぎる女
首つなぐために走っている父だ

倉吉市 野中御前

仲たがいのしたの下手なアドバイス
追伸に優しいことがかいてある

山紫水明いまに山賊でてくるぞ
立ち読みの本にアイデアもらってき

倉吉市 最上和枝

風邪引かぬかと離れ住む娘の電話
すれ違う夫婦で絆ゆるぎない

筋通す男に強い向い風
沈黙の木立起こしに春一番

米子市 石垣花子

タンポポは正しい風と知って乗る
エネルギーのかけらも見せぬ軽石よ

スタートまでに正しい位置を探さねば
二重窓しめて世間へうとくなる

米子市 政岡日枝子

遠吠えのあとの寂寥感こわい
花明り大人も少し昂って

春というのに大人は暗い話する
花吹雪 落度わたしにあるらしい

米子市 木村富美子

原人にそっくりだつて言われます
届いても届かなくても手を合わす

此の頃の夢は何だか後を引く
天と地のパワ―をくれたにぎり飯

米子市 白根ふみ

二月堂寒さ動かす火の粉たち
啄んで鳥さかさまに別れつけ

灯心をしぼり女雛と闇に臥す
聖護院炊いてふくら春をまつ

米子市 木村春枝

仏膳へふんだんに盛る木の芽あえ
石仏は笑顔で答え出している

島から島夢の架け橋継ぎ足して
春の陽にいつも大きな夢を抱く

米子市 茂理高代

鳥の声心の刃捨てさせる
この道を通れば何故か落ち着ける

亡母に似た雲と歩いて生かされる
お隣と浅く離れぬお付合い

米子市 永井三津子

恋の芽が春と言うのにまだ出ない
悪人へ神は天罰お忘れか
出来るなら春の陽浴びて死にたいな
春うらら男探しに行こうかな

鳥取県 鈴木公弘

まだ欲があるから花の下にいる
目が覚めてみれば何でもない事だ
泣いて済む話の好きな女性たち
着陸を忘れて自我に酔っている

鳥取県 太田幸枝

食べ物が人の心を変えさせる
ストーカー無い世で夫を一人じめ
不景気で大樹の陰も落ちつかず
貯えが増えて失う物多く

鳥取県 上田俊路

乾燥地農 脱塩の夢賭ける
きりつめた予算浮かして花を買う
教え子に世渡りのコッ学ばされ
ペテン師が議員になれる世紀末

鳥取県 西川和子

風薫るはしゃいでおれぬパーセント
その粋を取れば大波打ち寄せる
一言が尾を引き味気ないサラダ
何事も人の後ろが性に合い

鳥取県 石谷美恵子

困ったらいつでも来いと言うけれど
妻病んで買物かごも様になり
一輪で締める備前のやぶ椿
春風へ翔べぬ女の木の芽和え

松江市 柳楽鶴丸

義理チョコが今年もふえた有難や
何時もニコニコ幸せのパスポート
我が道をゆく古い頑固と言われても
妻のうたた寝可愛い顔をして

出雲市 小白金房子

鉄洗う手に温かき春を知る
忘れもの誰に似たやら子の遅刻
春耕へ水満々と春を吞む
生かされて暗い世相も見て老いる

出雲市 富田蘭水

野仏がしきりに蝶の夢をみる
別荘で書く原稿のなめらかさ
花前線合否をよそに攻めて来る
小糠雨新芽が踊り出そうとする

鳥根県 藤原鈴江

春一番巡りあえたる病みあがり
温泉に浸り生命の尊さふき返す
花替えて亡き人偲ぶ眠れぬ夜
古手紙どれも思い出捨てがたし

島根県 森 茂美

啓蟄に子猫も炬燵そつと出る

特価品買って来季の備えする

臍の緒を切ればいのちが一つ増え

嗚呼青春茶髪のなびく春の空

香川県 山地 マツエ

初孫を抱く温もりも浅き春

父よりも母が強く平和です

岡の樹をゆすると亡父の声がする

孫の絵のばあちゃん若く若く画く

香川県 永峰 伽名子

風吹けばふき寄せられる姥桜

病院を駆けまわりして眼が回る(二人の姉の入院)

親は塾 孫は空腹でSOS

スラックスとステッキで靴もつたい出す

今治市 矢野 佳雲

ご使用は自由 紐つきボールペン

何ということなく父と距離ができ

曇りのち晴れと神様味なこと

まっすぐに生きて余生は曲つてみ

高知市 北川 竹萌

今立てる川辺遊歩の道標

安政の祖母説き給う男意気

煮ころがし母思い出す母の味

寄り添うて痛み分けあう八十路坂

唐津市 田口 虹汀

習うこと多々あり米寿過ぎてから

皇后の遺徳か玉島川の鮎

春運ぶ明り窓からヘリの音

一日一回イロハかるたを熟読す

唐津市 仁部 四郎

むしろ旗都道府県に一二枚

節税の企みもなく鯛焼く

ネクタイに品位しばらく借りて

自尊心のこよりで背骨繋いで

唐津市 山口 高明

先輩の貌すりややはり銭が要り

旦那には悪いが一寸目の浮気

勲章を貰うお貌が稚児になる

子育てに追われ忘れる身嗜み

唐津市 浜本 ちよ

亡父に酒供えわが家のひな祭り

日本の着物としよう油世界馳せ

水仙の仏間に香り老い一人

寒椿凜と咲けどもはかな過ぎ

熊本県 岩切 康子

雨予報 庭の枯葉を焼き急ぐ

シルバースhirt疲れが取れて交替す

予定表こなしして今日の旨い膳

六十路坂 鏡の小道具増えました

自選集

遠山可住

八木千代

飽食が水の旨さへたどりつく
譲られたシルバー席で眼を伏せる
ぎりぎりでもし合格へ掌を合わせる
途中下車出来ず古希まで来てしまふ
いろいろとあつたがお水取りも過ぎ

藤村ノ女

正本水客

席ゆずる少女へ目礼して応え
春の出会い焼け棒杭が炎えはじめ
沈丁花匂う部屋なり春彼岸
春風に乗って流れて来た噂
自在鉤民話も吊るす故郷の鍋

月原宵明

奥谷弘朗

犬と猫だけに会った漁師町
思春期の小箱はどれも鍵をかけ
背なを搔くだけに用ある鯨尺
へんろ道草履売の店まだ残り
マンションの灯が一つ消えまた一つ

相統人として宿題を解いている
残そうと書く水性のボールペン
風車 残したきものさらに無し
わたくしの代りに朱い実をひとつ
雪を防げる大屋根残すのがやつと

いつまでもいつまでも影が私についてくる

ひとことがいつも心をはなれない
無理してもまっすぐな道まがらない
素晴らしい日の出に会いたくて山へくる
めったに無いことだと自分に言いきかせ

血の通う言葉一つに心満つ

素直には満足をせぬ腹の虫

手作りでないとやっぱり味が無い

執念が路傍の石にしておかず

メンバーに利口も馬鹿もいて楽し

金井文秋

生き残りゲーム続いている八十路
懷妒に愛されて足腰元氣です
肝臓はいつも休んでいる暮し
失業者溢れ後継者は居らず
いずれ死ぬ急きも怠けもしてません

藤井明朗

少し位貯まってほしいと小さい欲
二十一世紀へよい芽を残したい政治
悪の芽を摘むに当局の手を借りる
カメラから覗く複雑怪奇な地球
思い出の句集写真にある人生(百句写真集刊行)

野村太茂津

句集読みながら点字をふと思う
帰宅してゴシゴシ擦る痛い面
遺言の冗句か妻に散骨頼まれる
消耗品にされた昔を忘れずに
人質を思えば噎せる花粉症

小西雄々

修羅越えただけ反対をした男
目的へ髪逆立てた日もあった
物ばかり盛って人情皿にない
手術室に向かう時にも眉を描く
紅白の餅へお世辞がさつと出ぬ

松川杜的

喪の家で一入燃える桜草
追伸のつもり一筆箋に書く
陸軍記念日と赤で書く日記
体調が狂わす暦の○印
玉手箱抱いて八十路をどっこいしょ

野田素身郎

還付金が出る楽しみの申告書
今年こそ今年こそはのタイガース
泣き声は元氣障害持った孫
事件事故多発ニュースの枠に入りかね
妻が嫌いな相撲あいにく僕は好き

黒川紫香

小さい手で何を析るか桃の花
螺旋階段 都会の歪みから抜ける
教え子に逢うて嬉しや句碑に来る
嫁さんの化粧ポツンと見て居ます
涙腺を抑え六甲の山を見る

小林由多香

裏口も先客があり混んでいる
注目を集めて後へさがられぬ
むつかしい顔で先生カルテ書く
子飼いまで背中を見せる寒い風
負けぐせがついてトンネル抜けられぬ

高杉鬼遊

年寄りへ下さる金に判がいり
悪いことしたいができぬ春の宵
ひと嫌い犬と仲よく住んでます
ネクタイを締めて悪人らしくなる
ふたしかなこの世を生きて人に会う

恒松叮紅

部屋みんな匂わせ妻の沈丁花
年金を鴨居に届く背が狙う
春風へ調子に乗って火傷する
幸せに囲まれ米寿共白髪
凝り性がまた鉛筆を削ってる

辻白溪子

子の事でいつも喧嘩になる夫婦
粗大ゴミいらんが捨てる気がしない
好きな酒断ち当分はなる無口
間違えたコピーを下字で直す
裏切らぬ味方と信じ込む胡坐

波多野五楽庵

あれが安達太良千恵子の里に見る夕日
語部の手振りがまじる春の風
トマト剥く日から慕情を断ち切れぬ
十和田湖に浸せば青くなる右手
悪筆は悪筆なりに味があり

西田柳宏子

退職のそれから忙し敬老バス
左利き皆に逆らう竹トンボ
口答え息子成長してゐるらし
待つことに慣れた男の愛想よし
性急な桜前線急北上

河内天笑

浮かれてる僕を遠くで見てる妻
恋人と銀河をそぞろ歩きたし
高原の駅は空からバスが着く
真にうける君も単細胞です
すぐまわる人とおいしい酒になる

橘高薫風

生きざまも縞馬のしま虎の縞
万愚節万民を愚に消費税
三十六塚さくらが咲いて桜塚
幻花一閃自転車は赤だったな
桃菖蒲めでたく育つ姉弟

京都塔の会
吟行句会

と き 5月24日
集 合 午前10時
阪急大山崎駅前

行程と句会場
大山崎山荘美術館
館→離宮八幡宮

兼 題 (各3句)
鱗・移る・行事
席 題 当日雑感
会 費 5000円

永田帆船

東野 大八

生前の帆船と交友のあつた人は、幾度か彼

から「ちよつとコーヒーを」と誘われた体験を持つていると思ふ。彼の持論は「世に酒を好む左党があるかぎり、僕のようなコーヒーが好きな者は『右党』と称し、僕はその旗手になる」と語り、無類のコーヒー党で彼の赴くところ、行き付けの喫茶店は数多く、こよなくコーヒーを愛した。

往年、「日川協」の事務局長を長くつとめたことがあり、柳界での交際は広く、全国各地での大会開催時の懇親会や地方の川柳会の宴席にも参加したが、彼が酒盃を手にしたのを見た柳人は皆無と思われる。しかし宴席での彼は決して野暮天ではなく、滑らかな会話や酒芸は一家をなし、一杯のジュースで端唄「春雨」や「びんはつ」を披露し、その渋い

ノドで宴席を盛り上げたものである。

彼、帆船は若いころ、大阪朝日新聞社が主催する「アサヒ混声合唱団」のメンバーで、テノール部に属していた。当時の人気歌手、藤原義江を畏敬し、その愛唱歌である「鉾を収めて」「出船の港」などをよく口ずさんでいたものである。

また、映画ではアメリカ物を好み、そのころの大スターであるゲリー・クーパーと人氣が拮抗していたジョージ・ラフトのファンで、彼が主演した「ボレロ」を絶賛していたのを記憶している。そのころの若者のヘアスタイルはリーゼントという長髪で、ベッタリとボマードをつけた髪を後頭部まででなでつけ、今の橋龍さんのようなスタイルが流行していたが、ジョージ・ラフトも、彼を愛する帆船

もこのヘアスタイルであつた。

さらに同年代に阪急電車が企画実施していた沿線のハイキングサークルである「ワンダーホーゲル」に帆船も私も共に入会していて日曜日ごとに六甲山縦走をお決りのコースとして楽しんだものである。その頂上近くに三國池というのがあり、私たちはそこへ着くと裸になって全身の汗を拭うのが常であつた。

ある夏のことに暑かつたある日、彼はあろうことがオールヌードになり、堂々と男の象徴を拭き取つたことがあるが、その立派さには私などはただただ羨望するのみで、六十年経つた今も、鮮明にその情景が甦るのである。

○

まことに長文の引用で恐縮だが、右のエピソードは、柳友として六十年間を過した堀江としお（『川柳文学』顧問）の筆者あて書簡である。

永田帆船、本名永田春雄、大正3年2月22日生れ、司法書士。

「帆船さんは、『川柳文学』の前身、『昭和川柳』の同人として堀口堯人と終始、行を共にし、戦時の召集で少し中断したもの、六十年間川柳活動を続けた。その間、創成期の日本川柳協会の設立会則を作り、その事務局長として活躍した。『昭和川柳』改題、『川柳

文学』の二代目主幹として塊人なき後、率先して同誌の経営にあたり、豊中川柳会会長もつとめて新人育成にあたった。

また、同会をはじめめき申斐教室など数か所の川柳塾の運営にあたり、正に常人の三倍以上の活動ぶりであった。さらに特筆すべきは、大阪川柳人クラブの発起人として、率先その指導にあたったことで、正に関西柳界振興の恩人であり、その帆船句集も絶品であった『川柳文学』主幹、波部白洋追悼文要約。

○

前うしろ右も左もただ無なり 帆船
秋風に虫いっぴきずつの怨みごと 〃

の二句を極にのせ、平成8年5月26日永眠した。享年83歳、法岳浄安信士。川柳文学社葬で、『川柳文学』7月号は、その追悼号であった。

寡黙な得難い川柳評論家でもあり、『川柳文学』に毎号表紙巻頭に連載されたその川柳評論は、白眉の柳論として識者の好評を博していた。その一例を次に掲げておこう。

「誌上大会の選者を仰せつかった。一題に十人の選者である。選句後、発表誌を見ておどろいた。十人の選者が選んだ天地人句のどれもが、全く異なった視点で捉えられ、一句として重なかったのはなかったのである。」

これではまるで口裏をあわせたとような見事な配点である。これは一体、何を意味し、何に原因するのであろうか。

天地人の三十句すべてが平均的作品であつて、複数の選句眼がどの一句にも集中しなかったのは、選者の心をとらえることのできない力量感の希薄なものばかりであったのか、それとも甲乙つけ難い力作ばかりであったのか、逆説的強弁をもつてすれば、秀句が多く選ばれたという予期しない成果を生んだことに意義があつた、と言えなくもない。

だが、本ものの秀句はどこに隠れひそんでいるのかという空疎感と脱力感のこる。

しかし、選者ともなれば、少なくともその道のエキスパートである。熟達練磨の柳人が起用される。投句者の選者に対する依存度は極めて高いからである。だが、選者にもそれぞれ独自の思考と信念があり、地域的環境による視点の相違があつて、このような結果をもたらしただと思ふのだが、果してそのように納得してすむものだろうかという、釈然としなしいこりが胸中にわだかまるのである。

裁いたあとで裁かれるのが選者である。」

（『川柳文学』No.356巻頭・永田帆船）

誌上選と言えは最近の傾向として、著名有

力吟社の「誌上選」が盛んだが、ヘソ曲がりの筆者としてハラに据えかねるのである。同一課題二、三人選はまあ辛抱するとして、目に余るのは一題十人選といったものだ。一体、出題者には何のメリットがあるというのだろうか。この件につき筆者は、晩年の帆船に改めてその是非を訊したところ、「まことに嘆かわしい風潮で、また何々記念を二字ずつバラバラにしての出題、イヤハヤ」というのが返書で、これが当方あてのこの人の絶筆となつた次第である。

大陸川柳同窓会の箱根の集会だったか、膳を並べての柳談でたった一言、こう話された一語を今も記憶している。同じ寅歳同士の愚痴とも思ふ。「最近の川柳は、他人の句を話題の引き合いに出すだけで、まるつきり作句の意欲が湧かないのは、齢のせい、現柳界のせい、要するに現柳界がダメになったせいだよ。」

遺作

大臣に誰がなろうと通り雨 帆船
震災のおかげでナウイ家に住む 〃
原点にかえると門がしめられた 〃
顧問とはもはや用なき捨小船 〃
わが国でありわが国が嫌になり 〃

▼次号は「品川 陣居」

古川柳歳時記

5

『初

鯉』

清 博 美

ない。これが、江戸期に入ると俄然、人氣がでてくるのである。時代によって、同じ魚でもこのように評価が違ふのだから面白い。

さて、この初鯉はべらぼうな値段段であった。そしてまた、値の崩れるのも早く、古背は初鯉とは比べ物にならないほどの安値になる。鯉は足が早い。冷凍保存の技術のない時代でもあった。

『徒然草』第百十九段に、「鎌倉の海に鯉と云ふ魚は、かの境ひにはさうなきものにて、この比もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄りの申し侍りしは、『この魚、己ら若かりし世までは、はかしくしきひとの前へ出て捨て侍りしものなり』と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上さままでも入りたつわざにこそ侍れ」とある。

鯉は、中世以前においてはゲスな魚の評価であり、後期に至って漸く上流社会にも認められ始めたという程度の魚であった。

さて、この『徒然草』から百年を経た頃の『北条五代記』を見ると、「鯉鮪は毎年夏に至て、西海より東海へ来る、伊豆相模安房の浦につり上る、初鯉しやくわんなり、天文六

年の夏、小田原浦近く、釣船多くうかび、鯉をつる、此の由北条氏綱聞こし召し、小船にめされ、海士のしわざを御見物、珍事の御遊盃酒に興じ給ふ所に、鯉一ツ御船へとび入ったり、氏綱喜悅におぼしめし、勝負にかつうをと御祝詞な、めならず、即時酒肴に用ひらる、然るにおなじき七月上旬、上杉五郎朝定め武州へ発向のよし告げ来る、氏綱出陣同十五日の夜いくさに、氏綱討ち勝ちて、武州を始め給ひぬ、其の頃は四方に敵有りて、毎日戦ひやん事なし、氏綱賞飮し給ふ件の鯉は、勝負にかつうをとまではやし常に支度し、諸侍戦場門出の酒肴には、鯉をもっぱらと用ひ給ひぬ」などと記されている。

つまり、中世期末頃からぼつぼつ食卓に乗り始めたという古い魚であったことは間違いない。

『蜘蛛の糸巻』には、「天明の頃、我家の長臣渡辺松右衛門、石町の豪富林治左衛門が許に至り、……初鯉の振舞に逢ひし時、林が手に鯛を尋ねければ、今日は安し。忝本式両式分なりと云ひしとて、立ち帰りて我が父へ語りたるを、我等傍にありて聞きし事ありき、私父、鯉を好まれしゆゑ、出入の魚屋常に持ち参りしが、初鯉は高値なりしが、秋の古背に至りては、肥大なるも価二百孔に過ぎず。今は初鯉も式両三両をなさず。古背も式百孔の物なし。いかなる故やあらん」とあり、また『五月雨草紙』には、「奢侈の人の初鯉を賞飮するに、魚屋の持ち来るを待ては其品すでに劣るとて、時節を計り、品川沖へ子め舟を出し置き、三浦三崎の方より鯉魚積みたる押送船を見掛け次第、漕寄せて、金苞両を投げ込めば、舟子は合点して、鯉魚巻尾を出すを得て、櫓を飛して帰り来る、是を名

付て、真の初鰹喰と云へり、余が少年の頃にや、文化年中には、此弊は既に止みて、昔人の豪華を嘲るのみなりしかば、初鰹の価は、目の下一尺四五寸の者にて、価金百疋位にて、追々盛漁に従ひ下落して、二百五十文位に至る。是れ年々大抵定まりたる値段なりし」と、狂気の沙汰も記されている。

更にまた、『守貞漫稿』にも、「江戸鰹の刺身を用ふ四月の初鰹を賞味すること最甚し、中昔迄は四月初鰹一尾価金二三両に至る近年甚だ劣れりと雖ども金三分」とある。

鰹は、鰹船の一日の漁獲を、八挺櫓の快速船でとばし、夜明けごろ日本橋の魚河岸に掲げられる。これを仕入れた魚屋がてんでんに町に飛び出して行く。輸送費が高つくき、また奢侈品だから、漁師も魚屋もぶったくりである。それにしても、鰹一尾二三両は高い。

二三両は、今の貨幣価値に換算すると、七八万円になろうか。下女の給金が年間で最高二両、下級武士の三ピンが三両、という時代である。低所得者の年間の給金分を鰹一本に消費してしまうのだから、この上もないべらばうな事ではあった。そしてまた、この高い初鰹を誰よりも早く賞味するのが、江戸っ子の自慢であり、見栄でもあったのである。

山中共古翁の遺稿に「かつほうり」があ

り、『集古』（昭和四年五月）に掲載されたが、それによると、「初鰹を賞味し価を惜まざ給を質に入れても、これを買ふと云う江戸人の意を、今人の想像するは難きこととなるが、青越の銭を使はぬと云ふ江戸人は、世間の見栄を第一とせしゆえ、他の家では未だ買はぬ高価の松魚売りを呼び留め差身を作らせ食するを以て慢りとせしなり、此如くことを得意とせる者は、町の仕事師職工の親方芸人等に多かりし。初鰹魚の価高きことも、今人の想像し能はぬこととなるが驚くべき高価なりし也、春町作黄表紙『楠無益委記』に、「人王三万三千三百三十三代に当つ初鰹極月廿日ごろより出て尊き事八百八十両ぐらい五百両に付ては返事もせず而して後天びん棒へ反る、かつをくく」とよぶ所ばかりも百両のものはあるのさ」、初松魚の高価なることを証す」とある由。

「三月下旬より四月の頃、相州鎌倉にて始めて漁したる鰹を初松魚といひ、東都に大いに賞翫す。初鰹は晚くも四月上旬、早きは二三月の頃なれば春季とすべきものなれど、古来夏季として詠じ慣れ仕しを以て、……」（『新撰諸辞典』）とある。毎年二月から四月頃までを句とする魚だが、何故か夏の季に納められている。

＊

聞たかと問ハれて喰たかとこたへ

拾一 16

一聞たかはホトトギス。

はつ鰹百足のよふなふねに乗り

宝十一 満 2

一八挺櫓などの櫓の見立て。

丸の内まだうそくらき初鰹

宝十二 義 4

一売り先は大名屋敷。

ばかりのをあてに四五本初かつほ

天元 松 2

一買手を馬鹿者として、仕入れ。

ひるまでの勝負とあるく初かつほ

明五 宮 2

一鰹は足が早い。

れい年の事にたまける初かつほ

一七 31

一相変わらずの高値。

金持と見くひつて行初かつほ

拾一 18

一金持ちは無駄遣いをしない。

初かつほそろはんのなひ内て買

拾一 16

一計算をしては買えぬ魚。

明五 天 2

はつかつほ人間んわつかなぞと買

僅か五十年の命。

はつかつほにわかによすく成ルきかな

安六 義 4

一需要と供給のバランス。

かみさまじゃ出来ぬとにける初鰹

七 11

女房と半いさかいてはつかつほ

明四 梅 4

初かつほ女房に小唄年いわれ

一五 5

初かつほ妻にきかせる値でハなし

安六 松 1

一女房殿は堅実なのである。

〔寄稿〕

家族から見た路郎と葭乃

西村 梨里

『川柳雑誌』というそのものずばりの誌名の創刊号が出たのは大正十三年で、私は翌十四年に兵庫県の鳴尾で生まれた。その当時、尼崎の市長の月給が百八十円だったそうで、父は二百円の高給取りだったと聞いている。ばあさんと子守が三人居たとか、可成り裕福だったよである。私が小さい頃は何となく、いつも居候が居る家だった。成長してからそのことを母に言ったことがある。「今夜行く所がない」という人に「そんなら家へ来い」と連れて帰って来はる。何日居ても母は何にも言わないので終いに父が断りを言うハメになるそだ。「自分が連れて来はってんから自分で断りはつたらええ」と笑っていた。母はとても鷹揚な人だったから、子供達にも何も言わないが、この子はどういうことに向いているとか、その点をよく見ていたと思うし、ミッションスクールの出身だったのだ、

いつもバイブルの聖句によって育てられた。私がお友達の持っている物を欲しいと言つと（空の鳥を見よ、播かず刈らず倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたまふ。（中略）また何故衣のことを思い煩うや、野の百合は如何にして育つかを思え、労せず紡がざるなり、されど栄華を極めたるソロモンだに、そのよそおいこの花の一つにも似かざりき」と明日は明日の風が吹くというのが母の信条だった。

「専門家をき世界發展せず」と言つて、安定した生活を捨てて、プロ川柳家を宣言したのは、いつの頃だったのか。多分私が小学校の頃だったと思うが、その頃には既に鳴尾から大阪の岸の里へ、そして玉出へと居を移していた。母は何事があつても、いつも同じであつたから、子供達は何も知らないでいたと思ふ。けれど私が小学校四、五年くらいの時

には子供心にも何となく経済的に逼迫していることは感じられた。そのころは一般に誕生日を祝う習慣はあまりなかったが、母がキリスト教だったせいか、子沢山なのに誕生日には、よくご馳走をしてくれた。けれどその日は私の誕生日なのに、何の用意もなさそうなので、思いっきり泣いたことを覚えている。

母はだまって一円五十銭しかない預金通帳を出して来て「これ出しといで」と言つた。今思えば多分なけなしのお金だったと思う。時々、父が古本屋を呼んで何冊もの本を売ることもあつた。それでも母は平然としていたから、それ程困っているとは思わなかった。多分不用品本を売っているのだろぅぐらいに思っていたが、「貧乏はしたが、僕は質屋だけは行ったことがない。どんなに大切な本でも惜し気なく手放した」と父は晩年になつてそんなことも言つた。

當時は川柳といつても知らない人の方が多かった。大衆雑誌に漫画入りで出るくらいのもので、文学的価値の低いものと見られていたから、川柳人口も俳句に比べて問題にならないほど少ない。それでなくても短詩で食べて行くことはむづかしい。俳句の正岡子規でさえも、立派なバトロロンがあつてのことである。世間で認められない川柳のためにすべてを抛つて生きた人生であつた。

その頃は一流の音楽会をするような会場である朝日会館を借りて、売れる筈もないと思われる切符を売って『川柳雑誌』の百号記念を成功させた。今思えば他人には考えられないようなことを次々にした人であつた。江戸堀で小さなビルの一室を借りて川柳雑誌社をここへ移し、戦時には「有保証新聞紙法」にした。(新聞と同じような記事が扱える)保証金は確か千円だつたと思うが当時としては大金である。どうして趣味雑誌にそんなものを取らねばならないのかと思つたけれど、これも父の先見の明の一つだつたと思う。だんだん戦局が厳しくなるにつれて特高の思想取締りが厳しくなり、川柳は言わば批判詩とも言える一面を持っているので、たとえばこんな何でもない句が引つかかる。「転業や僕は一個の

部分品」文学も何もわからないような人が検閲をして、これもダメ、あれもダメと言う。

戦後は「関西短詩文学連盟」を創設した。

中には著名な詩人もおられた。色んな方々との交流を計り、その中で川柳家の父が初代の理事長をしたことは、川柳の社会的地位を高めることであつたと思うが、同じ川柳家の中には父の真意を理解出来ない方々が多くおられた。いつもそうした誤解を背負つたまま、川柳の向上にのみ心を痛めていたと思う。

大正末期には父の句は古川柳的な句から脱皮した句が多く、その当時は異端者の風評もあつたようだが、後には川柳家以外の方から哲味のある句との評を頂くようになり、文学的な評価もされるようになった。父が残したことはに「いのちある句を創れ」とあるが、たつた十七音字の詩に人間の思いを託すことはむづかしい。けれど「いのちある句」は後に残る句である。句風というものは大体先生に似るものであるが、父の直弟子と言われている方々の句は、句を読んだだけで、どなたの句かわかるほど、それぞれに個性のある作家が多い。こうした多くの方々のおかげで『川柳雑誌』は護られて来たと思う。

私達も子供の頃は、よく句会へつこをして

遊んだ。成長して父の手伝いをするようになってからは、作句もしていたが、別に川柳が好きでしていたわけではない。何となく便利に使われているみたいだに思っていた。父は好きなことをしているのだからいいけれど家族は犠牲になっているみたいだに気がしていた。今思うとみんな不肖の子であつたし、要するに実力がなかったのだと思う。

父は青年の頃には文学を志し、文科系に進むつもりだったが、三文文士になつてどうするつもりか」と親に反対され、大阪高等商業(現大阪市大)に入学した。数え年の十七歳のときに川柳に手を染めたと聞いている。若い頃には別名で小説も書いていたそうである。自分は大変な回り道をしたが、子供には好きな道を歩ませたいと常々言っていた。事実、兄にはヴァイオリンを習わせていたし私にも色々考へてはいてくれたが、踊りも絵も好きではあつたけれど、どうしてもこれがないと思つほどの情熱があつたわけでもなかった。それに父はいつも口ぐせのように、「やるからには氣違ひになれ」と言う。「秀吉は草履取りから天下を取つた」と言う。秀吉がそんじよそらにゴロゴロといてたまるものかと言う反発もあつた。だからお茶もお

花も父に内緒で習いに行った。確かに気楽に習ったものは大して身に付かない。兄弟姉妹が九人、そのうち四人は幼少の頃に他界した。残った五人はそれぞれに性格も違い育ち方も違っているが、大成した者は一人も居ない。兄は母に似てのんびりやさん、私は性格的には一番父に似て何でもムキになる所があるが、変った親を持っていたので、ただ、平凡な暮らしに憧れていたのだと思う。縁あってお寺に嫁いだが、父を亡くしてからは父を理解することも出来たし、父の考え方に共鳴する所もあった。

商家に生まれ、高商時代の友人達がバリバリの実業家になっておられるのに、なぜ文学を選んだのかという不満を子供達は持っていたと思う。父はいつも自分が文学を選んだ理由をこう言っていた。「僕は経済が専門だからお金儲けをしようと思えば出来る。けれども有形のものはつまらない。他人にあげればなくなる。無形のものあげても、あげてもふえこそすれ、なくなりはない」と、この言葉が私の人生を力強く支えてくれた。宗教と文学という違いはあっても、無限に広がる無形のものへの夢のある働きに魅力を感じて生きて来れたことは幸せであった。

昨年一年早めに父母の法事をさせて頂いてからは、しみじみと父母のことを思うことが多くなった。兄と会ってもよく父母のことが話題になる。こんなに子沢山なのに、よそへやっつてしまえば、もつと楽だったろうに、世の中には妻子を捨てて好きなことをする人もいくらでもあるのに、一人の子も手放さずにこれだけのことを成し終えた父と母に「ありがと」の言葉と共に泪があふれて来る。

妻よりバラ／＼になれば浄土なり 路郎

この句を見ると、子供達がどれほど父の重荷になっていたかが窺えるような気がする。特に母の出処は堺で、明治天皇が堺へ行幸されたときの行在所をした家柄でありながら、どんな生活の中でも母の愚痴を聞いたことは一度もなかった。父も母も、とても真似の出来ないような所があつて、真似をしたいとは思わないが、この父母に育てられたことは本当によかつたと思つてゐる。四十年間もご無沙汰をして、全く無縁になつてしまった私が、つまらないことを書いてごめんなさい。私達は不肖の子揃いなのに、今になつても父母に熱い思いを寄せて下さる川柳塔の皆様方には御礼の申し上げようありません。

合掌

磯野いさむ夫妻 金婚記念祝賀会

とき 6月22日(日)午後4時開会

ところ 三井アーバンホテル・大阪ベイタワー(地下鉄・JR弁天町)

祝辞 仲川たけし日川協会会長ほか

宿題 (2句・5月15日投句締切)

「婚」 番傘川柳本社 森中恵美子選

「麻雀」 川柳塔社主幹 橘高 薫風選

「池」 札幌川柳社主幹 斎藤 大雄選

会費 100000円(パーティ・記念品共)

主催 記念祝賀会実行委員会

男女雇用機会均等 月間記念川柳募集

題と選者(各題3句)

「働く女性」 島村 美津子選

「和む」 高杉 鬼遊選

「自由吟」 橘高 薫風選

投句料 無料・5月17日締切

応募先 大阪市大正区泉尾3-9-16

大阪市立勤労婦人センター

脳内革命と川柳

東野 大八

昨年夏のこと、ある本屋で春山茂雄著『脳内革命』という一冊を目をとめ、つい衝動買いをして直ちに読了したら、なんてことはない―至極当り前のことが並んでいるだけの内容なのにガツカリした。ところでこの本が一年後の今、二百五十万部の一大ベストセラーになっているのに改めて驚いた。

アホらしくなって読了するや、知人の脳外科の先生に進呈したら、その読後感いわく、「あの本のことなら、当方の茶のみ話で、至極当り前のことだらけだ」と阿々大笑。

八十過ぎのこちらの頭は、生れつきの「脳内保守派」で多年使い過ぎの傾向があり、アルツやボケ防止へのショック療法ととびついたのがとんだ茶番に終わった次第だ。

とにかくこの本の目次は四章数十項目から成っているが、目玉の章は「病気にさせないのが本当の医学」というので、「脳からモルヒネを分泌させなさい」「医学が証明する発想効果」エトセトラはいいとして、「ガンを発病させるストレスは諸悪の根源」「酒やタバコに罪の意識を持つな」「納豆こそが日本の生んだ最高の食品」などを読み進むにつれ、ど

れもこれも今流行の健康雑誌の見出しそっくりなことが書いてある。

かくして二百四十頁にわたるルルたる解説の結論は、「くよくよせずに、ノンビリと、適度な運動を行い、何か生きる楽しさを発見するのが―脳内革命でアル」という一語でチョンである。

多年モノ書きを職とし、幾冊かの駄稿をまとめた当方にとって、こんなラチもない憶説の羅列が、二百五十万部の大ベストセラーになったとは、よくぞこれだけ売れまくっているというこの方が、当方の頭にとっては法外なショックであったことは事実で、実はこのコトの方が脳内革命に役立つ。

ともあれ、このラチもない一冊を目にしてツーカーンしたことは、われら川柳人が川柳をすることのしあわせである。まことにご同慶の至りと申すはかない。

思うに柳界はいま、相当な高齢化水準にあることは、識者の挙げて指摘するところである。名句を生むにしかずだが、とにかくある事象を捉えて、あれこれ作句に熱中することは右脳内ホルモンを刺激し、脳内の活気を躍動させ、その出来栄えによって入選、三光、××賞を獲得した折の、故知れぬ健全な脳内生態のショックは、必ずや万代不易の一大収穫に相当するにちがいない。

伝統の月並川柳に甘んじることを快しとせば、柳界革新の意欲に燃えて新川柳に没頭

することも脳内マラソンの一つに相違ないと信じられよう。然らずば伝統とて、常に名句を求めよと精進する意欲は必ずや、自己の脳内革命を促進することは疑いなしだ。

また、全国各地で催される各大会には、進んで参加し、その旅中の運動を加味して、上記の本による「右脳を使う文科系の長生き」を促進するに好適であらうと思われる。「一日最低五千歩、右脳をはたらかせて歩く。」という、右の本の一項目にも適合するわけだ。

筆者の住居は木曽川畔にある。その堤の上は、アスファルトで固めた堅牢な歩道がついているので、朝夕こを寒中なシャツ一枚でマラソンしている人々が絶えない。

しかし、素人マラソンは百害あつて一利なし、と医家の友人のこれは一家言だ。若さにかけて走りぬく人は別だが、壮年期すぎの友人が、この朝夕のマラソンで入院した例もあり、筆者は今もって数メートルも走っていない。ただ愛犬をつれてアラブラとその堤防を朝夕散歩することに止めている。この間、脳中に去来するものは、屈托なき右脳の奔放である。

運動選手の美事な肉体美は、ハードトレーニングという鍛錬によるが、その実確実に活性炭素の害を蒙り、短命だとある。それからすると右脳本位の川柳作家は長生きする―と右の本にも書いてある。よろしくね、がんばろう川柳人作家諸君！

秀句鑑賞

同人吟 宮口笛生

— 4月号から —

川柳塔の秀句鑑賞を仰せつかり、今度ぐらい一句一句じっくり読ませてもらったことはないと思うくらい、隅から隅までしっかり読ませていただきました。

発表されておられる『川柳塔』の三百五十名の優秀作家の方々の秀句の数々、大変勉強をさせていただきました。

私も川柳歴五十年、いろいろと川柳経験をして来ましたが、他人の句の鑑賞となれば、なかなかむずかしいものです。作者の句意に添わない点も多々あることと思いますが、添わない所はご容赦願ひまして、私の意中の句を私なりに鑑賞させていただきます。

赤ん坊のように銅鐸扱われ

伊藤 寿美

せんだって加茂若倉遺跡からたくさんの銅鐸が出土した。大和橿原の考古学研究所で調査した結果、優れた技術により作り出されたもので、古い昔にこのくらい立派な技術を持った人がいたと感心しているということを聞いた。この句、発掘された銅鐸を赤ん坊を抱

くように慎重に扱われている様子が、ほほえましく伝わってくる。赤ん坊という表現が秀句にしていると思う。

レントゲン恋に悩んでおりますの

鈴木 公弘

お医者様でも草津の湯でもじゃないが、恋にレントゲンを持って来たところが面白いと思う。恋の悩みをレントゲンは、はたしてどのように写し出してくれることでしょうか。結果や如何に。何かクスリとさせられる。

逆転はもうない坂にさしかかる

高橋 岳水

年老いて行く寂しさがひしひしと伝わって来る。どうもがいても若返りはできない。逆転はもうない坂とは何歳くらいを指すのだろうか。私も古希を過ぎてからの月日の経つ早さをつくづく感じさせられている。思えば寂しい限りである。

アホやのに今年は風邪に取りつかれ

川原 章久

昔から阿呆は風邪を引かんと言われている

が、今年の冬はきつい香港ウィルスで、誰でも一度や二度は風邪を引いてしまっている。風邪引いたことをアホやのにと謙遜しておられるが、風邪引きにアホもカシコもないようです。私の句にも、「幸せな阿呆で風邪も引かずにいる」というのがある。風邪を引かなかつた幸せを読んだのだが、と言つてまだまだ油断をしないように。

梅だよりセーター編む手速くなる

田中正坊

寒い寒い言つていても、立春ともなればあちこちから梅の花だよりが聞かれる。冬に間に合やすつもりで編んでいるセーターも、これでは時効になってしまふ。もう少しで出来上がり。編む手もついつい速くなって行くというもの。早春賦のひとつまである。完成を楽しみに待ちましよう。

どこかに金が落ちていないかと思う

新家 完司

お偉方の億つく金の取崩騒ぎや税金の無駄遣いを尻目に、四月から消費税五パーセントに続いて、諸物価の一斉値上げ攻勢で、庶民は窮地のドン底に追いやられている。どこかに金落ちてないかと思つのは作者だけではない。この不景気を吹き飛ばすような明るいニュースが欲しいものである。

日本語よどこへ行くこゝ日本だよ

時 末 一 灯

チョベリグ、チョベリバ、メツチャどつとかこうとか、ヤングの言葉には驚きの外ない。この句のようにここは日本ですぞと言いたくなるのも当然。作者も日本語の行方を心配されている。私も同感である。

経済にうといが玉子安すぎ

三 宅 保 州

大蔵省を全部家内に任している男性にとつて、こまかいことはあまり分かつてはいないが、たまに見るスーパのちらしに、本日の特価として安い玉子を見ることがある。お一人一個限りへ、妻に引つ張られて行くこともある。安いのは有難いが、気の毒な気もする。私の句に、「十円もしない玉子がかわいそつ」というのがある。玉子も安すぎて御馳走の中に入らなくなつてしまつてゐる。

転ぶから起きる勇氣が湧いてくる

吉 岡 美 房

人生七転び八起き。喜怒哀楽の長い人生にはいろいろなことがある。一つ躓いては一つ教えられて行く。転ぶから起きる。当然のことながらそこに明日への勇氣も湧くというもの。何でもないような句だが、人生の生き方を教えられ、力づけられるところがある。

吹雪くる白いカーテンひくように

西 原 艶 子

吹雪いてくる様子を、白いカーテンをひくようだとほすばらしい。とつてもきれいに読み上げている。雪国の人にしか読めない句だと思ふ。観察力の良さを賞つ。

うっかりとしっかり我が家平和です

高 須 賀 金 太

うっかりは亭主で、しっかりは女房というところ。うっかりとしっかりを持って来てうまくまとめている。うっかり同士ではつまらないし、しっかり同士では喧嘩のもと。女房がしっかりしてもらつていてこそ、平和な家庭が保たれている。妻へ最敬礼である。

消費税と書いたら風がよく揚がる

久 保 正 剣

国民の反対を尻目に、消費税が五パーセントにアップされた。消費税と書いたら風がよく揚がる。軽く読みこなしているが、とつてもきつい諷刺が効いている。

野仏ものをびをしてはるさくら咲く

大 内 朝 子

待ちに待った春の楽しさがありあとと出ている。野仏ものをびをしてはるという中に、人間もすべての生物の春への喜びが聞こえて来るようである。きれいにまとめている。

唾こくりしてやられたと脱ぐ兜

桜 井 千 秀

したたかさがよく窺える。人誰でも良く出くわすことで、くやしきの唸り声まで聞えて来そうである。唾こくりに重みがあり、句のまとめ方がうまいと思ふ。

東大志望と書いた隣へ絵馬をかけ

矢 野 佳 雲

川柳三要素の一つ、皮肉が良く出ていると思ふ。入試合格祈願の絵馬を、東大志望の人にあやかろうと隣へかける。薬をも掴むその氣持がうまく表現されていると思ふ。

句評は出来なかったが、好きな句を列記して、今後の御健吟をお祈りいたします。

老眼鏡と豆甕を一つ買つてくる

小 島 蘭 幸

ばあさんかそうかと放つておかれそう

川 端 柳 子

右目で右を見つづけている寒の鯉

江 口 度

目移りを許してくれる花の店

大 河 未 佐 子

上り坂苦しいだけのことはある

高 瀬 霜 石

地獄に落ちる法話へ両の耳立てる

舟 渡 杏 花

水煙抄

高杉鬼遊選

河内長野市 大西文次

米子市 猪森スミエ

人だから何だ何だと好奇心

極楽は今がすいてる言われても

寄り道をするなと靴に言い聞かす

中流が怪しくなった低金利

送電線 大和河内をひとまたぎ

富田林市 藤田泰子

待ち遠しくて菜の花色の服を買う

岬へと続いていますローカル線

雨には雨 雪には雪で旅楽し

忘れっぽくなって夢にも出てこない

徘徊か散歩か区別むずかしい

鳥取県 山本正光

弥陀の掌に縋って慈悲を乞うばかり

健康の部品揃ってまだ達者

親方の儲け知らない弟子の意志

先代の大きな屋根で着ぶくれる

ふとところで象と鯨を飼っている

北の海ほとほと困る置き土産

困ったら頼む氏神様がある

トチテター ラッパ水仙勢ぞろい

芽が出たよ山がくすくす笑いだす

小まめにも鼻が拾った杉花粉

鳥取市 岸本宏章

かくれんぼきつちり数え逃げられる

ゴミの日はクラスも早く目をさます

戒名の長い先祖がいて困る

逆風がはばたく知恵を貸してくれ

鯛網にかかった雑魚が捨てられる

鳥根県 菅田かつ子

新予算審議中です蟻の穴

可愛いなあ奮ぼうつと紅くなり

鳩が来てすずめ遠慮をしています

ほとばりがさめて落ちた目のうろこ

私がわたしを喰う忘れもの

熊本市 北川 一進

再三再四誤解とくの一苦勞
人前も平氣やっぱり好き同士
ぐっすりと眠った朝の良い笑顔
使い方知ってて財布軽い口
買う積り見比べて居る首飾り

和歌山県 杉山 精子

たんぽぽを愛でる瞳を裏切れぬ
地球儀をくると回す夢飛行
潮満ちて引いて航路の無い旅路
癌告知 庭の植木も病んでいる
綾取りの指に絡んでくる情け

八尾市 神原 まさと

もういっぺん寒なりまっせお水取り
とお下の妻ごくごくと寒の水
境界線すったもんだが嫌で負け
胡蝶蘭飾れる家にや々と住め
モンゴルで見たい星降る大草原

横浜市 鈴江 純子

日向ぼこ日差しを追って席を変え
気に入った絵葉書自分宛に出し
流行の服からのぞく貼り薬
飽きのこぬ顔と夫は言ってくれ
クローン猿 冒瀆ではと怖くなり

和歌山県 木村 親路

口車乗るほど金もない老後
故郷の匂いも消えて標準語
生きている実感に夜は明けてくる
じいさんと呼ぶな呼ばすな呼ばれるな
低金利敵か味方か分からない

八尾市 村上 ミツ子

だんごより花が嬉しい年になる
コンピューター金の工面はしてくれぬ
壁の耳にも聞かせるちよっという話
あの手この手で新聞とれと言うてくる
寝不足でいいアイデアが逃げていく

札幌市 三浦 強一

清貧と言えば貧乏さまになり
昭和史に赤紙という人さらい
餌にすぐ飛びついたのは雑魚ばかり
夫婦して日課となった探し物
割り勘で夫婦別姓縄のれん

和歌山県 木村 初子

喜怒哀楽は神が下さるプログラム
得したような損したような日が暮れる
本番のゲストはわたし喜寿の宴
あるがまま生きて詩あり夢もあり
気取らずに平々凡と生きてます

今治市 渡 辺 南 奉

わからない明日の約束してしまふ

日本の祭りどうして万国旗

合流を素直に許す川の幅

敵が転ぶと変な満足感が湧く

まさかから又かになって諦める

富田林市 中 井 ア キ

ありふれた男を飾る妻でいる

叱られてばかりいた日に戻りたい

ときめきが少うし若くしてくれる

たつぷりと時間はあるさ本を読む

任せたらとっても楽になりました

北九州市 岡 田 幸 生

妻病んで男一人に乱気流

床上げの祝いは髪を染めてから

新聞がレインコートを着て届く

寄付金が引つ越し先へ追ってくる

警官が駆けて野次馬追っている

川崎市 和 泉 見 早 子

セーターをほどいて過去を丸めとく

一抜けて二抜けて猫が三に抜け

髪切ったわたしを風がよけていく

大胆に脱いでひとりの露天風呂

残り火を消すのにコップでは足りず

尼崎市 田 辺 鹿 太

鳥籠の鳥は平気で嘘をつく

佗助よご免 三日も留守にして

血圧が上がると狂う腕時計

感情のもつれか雨が降り止まぬ

バンザイの形で死んでいるやもり

堺市 上 野 楽 生

5パーセントの針の席に耐えている

日曜大工昨日の棚が落ちている

強い子に育てと鍼を打っている

ネクタイは貰うものだ決めている

加熱処理した煩惱が胸にある

豊中市 石 川 勝

花をかう 妻に謝ることがある

腕立ての五回ですまぬ今日の罰

縄のれん父のアジトはガード下

自首をするこの天井を食べてから

切れそうで香具師からガラス切りをかう

今治市 村 上 久 美 子

老いるのもっと忘れて春を待つ

こんなにも人があふれていて孤独

檜山も混んでるそんなコネはなし

ぬるま湯の中でぶくぶく増える愚痴

父の下駄一度は履いてみた記憶

八尾市 與田 明

ポケットに忘れたままの清め塩
官僚の胃袋人も金も食う

任せると言つて油断も隙もない

没句には没句の想いきつとある

借金ががんじがらめの国予算

倉吉市 山中 康子

やさしさを目の色声のいろで知り

平坦な道に蹟く日の予感

傾いた船に白羽の矢があたり

淡々と時をきざんで近うなる

晩学のひとり散らかす小半日

富田林市 山原 昭水

ジャズを聞き恋だ愛だと過去が燃え

歯学部を出たが虫歯が二本ある

天国の仲人さんに酒供養

鳩アヒル 亀も友達ランドセル

おかあさんの手の温もりがいなり寿司

羽曳野市 西村 りつえ

薬つかみしかと子育て豆の蔓

また転びだんだん低い靴探し

老木がざわめきだした春の森

幸せは戦を知らぬ武者飾り

嫁いでも商家の癖で急いて食べ

富田林市 大橋 鐘造

耳二つあつて善悪聞き分ける

満潮も干潮も抱く胸の底

身の内の鬼飼ひ馴らす豆の数

風向きの変らぬうちに頼みごと

香川県 田中 ふみ

無精して秤の要らぬ目分量

甘党のまた肥えたかと体重計

雛も人も気持ち通じる愛と哀

ずばらして余生楽しむ老い一人

八尾市 鷺見 章

病室の寡黙になれて物思い

鬚そつておしやれ好きです病むベッド

モーツアルトリハビリ室は今無人

ドリンクを末期の水の如く飲み

和歌山市 武本 碧

女からおんなへ変わる十三夜

力んでも五十歩百歩マイペース

満ちる刻信じて欠ける月の性

山姥の吐息を思う杉花粉

大阪市 和田 和風

強情に杖を拒んでまた転ぶ

抹茶二服作法知らぬが達者です

九七年 はて平成は何年や
問診の医師懐かしや国訛り

岸和田市 亀井 皎月

サラ金を必死に逃げて夢醒める

遠回りしなくて行ける縄暖簾

ドラマではなんであんなに美しい

年金で清貧の味かみしめる

高知市 細木 子龍

バーゲンで女上位の太い声

四十に親の背を見た川漁師

咲いて飲み散つては飲んだ終電車

飽食の無策へやがて付けが来る

宝塚市 飯西 ミサヲ

八十年生きて明日は定まらぬ

八十本口ウソクの灯よすぐころう

限られた器で生きること慣れ

出来すぎた嫁に疲れる贅沢さ

東大阪市 今岡 貞人

きさらぎの水の匂いに忌が巡る

忘却の日々よわたしの寒椿

生き死にはどうあろうとも夫婦なり

良い知恵の出そうな煙草吹かして

松江市 松浦 登志子

進化した人間なのか花粉症

小難し顔で蒸しパン食べている

昨日から始めてたんだダイエット

新幹線乗ると都会にきたような

今治市 渡邊 伊津志

寄り添うた船は塹から出られない

この世から離れられない舳艫船

裏切りの海へ祈りが届かない

昔話にしてはならない青い海

横浜市 川島 良子

直木賞 芥川賞だけは読む

花マルの母さんにある笑いジワ

他人様に話のわかる親らしい

無縁仏にも手を合わす墓参り

八尾市 篠原 いつふみ

犬が先 親しくなった散歩道

ひとり旅猫と話した漁師町

掌の上で遊ばされてる遊んでる

北新地便利になつて遅くなる

大阪市 立蔵 信子

羽毛布団まだ買えませんが母の日に

低血圧それを理由にしたくない

神様が二度めの誓い見て笑う

財産は何もないけど保険あり

鳴門市 八木 芳水

飽食の海に溺れる血糖値

法名をもらつて楽に生きてみる

満ち足りた今日がこんなに短くて

波が引く潮どきらしい遠い人

島根県 三代 朝子

もの忘れ娘の知恵を借り老いてゆく
この次は抜きましようかと齒科の椅子
もしもしでお誘いかかる嬉しい日
神仏に掌を合わすこと多くなり

羽曳野市 川田 晋

縄のれん独りで国を背負い込み
客寄せの薄利多売がよく続く
妻が翔びとべぬ夫は留守居役
行革は皿ばっかりのフルコース

愛媛県 黒田 茂代

どう名前変えても変わらない政治
何も言えぬつらさ脱毛症が知る
やすらぎの場所ですわたしだけの部屋
黙ってるただ見つめてる愛してる

和歌山市 水田 秀男

ボディービル首から下に自信あり
赤い血のたぎる体をもて余す
重油流出 鳥も魚も泣いている
借金を子供や孫に残す国

兵庫県 緒方 美津子

デパートにない朝市が旬を売る
ガマ口の軋み出したる消費税
傘寿です紅さす母に拍手する
バーゲンの頃にセーター編み上がり

滋賀県 中 宗明

隅々に気配り届く亡妻でした
妻逝ってつくづく孤独身にしみる
男なら寅さんのよう暮したい
女なら嘘でもシャンと言われたい

唐津市 江川 青琴

毎日を近くの他人助け合い
頼られてちよつと「かつこ」つけてみる
生き甲斐は只忙しく過す日々
愛犬をかばい過ぎては内わもめ

秋田県 湊 修水

としよりに得体の知れぬたまごつち
どんな娘か早く逢いたい孫の嫁
雪まつり特養ホーム作ろうか
こだわりも春には溶ける雪だるま

西宮市 古谷 ひろ子

乱れ箱に母のその日が眠りこけ
春一番いのち生まれる音しきり
震災はまだ終らない仮設の死
役得の毒味に酔って堕ちていく

尼崎市 的場 十四郎

和のなかの一期一会の友が去り
大皿に妻はくらしの夢を盛る
寒の水吞んで五体を弾ませる
同じ目の高さで語る車椅子

八尾市 村上剛治

犬ふぐり小さいままに凜と咲く
沈丁の香がなだれこむ喫茶店
裸木の新芽そろって天を衝く
木の芽立ち持病の機嫌悪くなる

泉佐野市 山本蛙城

かと言って生保入れる歳でなく
前立腺の話婦人も聞いている
お地藏さん怒れサラ金コマーシャル
GNP中にプリクラたまごっち

尼崎市 長浜澄子

眉きりり運命論に逆らわぬ
男と女いつか流れて流されて
逸る氣を抑えゆっくり歯を磨く
春雷一過 あと振り向かぬことにする

鳥取市 西村半量

市の講座キムチ作りが一単位
久し振りバランスシート合って来た
金もうけへたで町役ばかりする
氣がつけば烏合の衆に組みこまれ

伊丹市 榎谷郁子

娘と湯舟 網野の宿の外は雪
膳の上蟹が威張って客を待つ
花も無し小町の塚は雪の下
母校から榎谷寿馬様便り

大山市 早川盛夫

行く心算 会って話して見るつもり
生きている限りのことはしておこう
寿司折を一つ二人の茶を入れる
駅弁は隣を少し睡らせる

兵庫県 北川とみ子

古傷を洗いおとした母の数珠
ベルを押す九官鳥が留守と言う
冷蔵庫満杯にして妻の旅
ふり出しに戻り遠慮のない独り

新潟県 高野不二

二三日ならしてみたいホームレス
孫の話 孫も割込む長電話
香典は並に包んで泣いて来る
賞罰をなしとは書けぬ免許証

大阪府 大家風太

ポーカーフエイスあれが素顔かも知れぬ
慈悲満ちる半跏思惟仏細き指
エリート倫理も寒くなる時世
無欲などあるはずは無し余命表

綾部市 藤田芳郎

野も山も含み笑いをして春に
北国の春へあかぎれ痒くなる
韭買って卵は家にあつたはず
不惑過ぎ実印ほどに未だなれぬ

大阪市 平井露芳

いちご大福なんて一緒に食べさせる
どちらかが標札持つて出る離婚

香港へ船旅をする盗難車
本日は晴天花粉多めです

愛媛県 中居善信

物音に怯えつづけている猫だ

一升の米の重さを知ってるか

反戦歌を歌いつづける死ぬるまで

春三月土が小さい息をする

海南市 谷口義男

気味悪く隠しカメラが此方向く

好い夢を猿に食われて目が覚める

散る時期が来れば未練のないサクラ

トップの座空けて待つて天下り

堺市 宮本かりん

ほろ酔いの足駅前のタコ焼き屋

逃げ道はすぐに見つける水の音

任せると言うて上手に逃けている

夢一つずつ捨ててゆくのも大人だな

大阪市 尾崎黄紅

忘れたと言つて知らないことを訊き

寸志とはいえない厚さ受けてくる

本性がすこし出てくる鍋囲む

人間に食べられるのに目が優し

横浜市 荒井広和

トップの座ドミノ倒しの先にあり

無意識の脳をテレビに刺激され

ペンツでは男の価値は計れない

手が鳴ると方向音痴足を向け

東大阪市 谷口義

世間体気にしたほどは気にされず

しようむないことを世間は覚えてる

真つ直ぐに字を書くのさえむつかしい

晴耕雨読 合間に妻と喧嘩する

倉吉市 田中八太郎

良く言えば悪く言えばと裏表

値段差で松竹梅の梅を食う

アイウエオ名前をなんと言つたかな

半額と今までなんぼ儲けてた

横浜市 山下省子

啓蟄に浮かれて怠け癖も出る

妻だつて野性に戻りたい時も

目茶苦茶を試行錯誤と言つてみる

要するに妻は下手にできればよい

高槻市 乙倉武史

顔を出すだけで浮世の義理も済み

遺品整理一途な亡妻の几帳面

清貧を信条として傘寿来る

雑学の底は浅いが記憶力

尼崎市 内田 美也子

まだ六十 心はいつもときめいて

城の梅 絵巻の中の姫気分

遺作展 絵筆の旅に君といふ

告知ひめ笑顔で日々の命乞い

今治市 越智 青園

ハイテクで祖母の手伝うことがない

春を待つここの桜も高齢化

悲しい時もお腹がすいて生きている

風邪の嘘また言訳に使われる

横浜市 後藤 早智

スイッチを切り換え明日へ歩き出す

敵に塩送った道が塞がれる

ご近所が狙われ鍵を二つ掛け

放さない固い握手が久し振り

横浜市 金森 徳三

マイカーはスーパー通院だけに乗り

照れくさい心の中ですまないね

銀行に友人いても低金利

誕生日歳は要らぬが金は要る

横浜市 丹下 智洋子

考えてみまうと言われ諦める

タテマエで生きる理想はすぐ崩れ

腕の良い医者は患者を選んでは

息遣い悲鳴にも似る寒稽古

三重県 佐々木 森哉

風葬予約風になりたいわが身体

血の中に棲むバツカスが酒を呼び

春を詠むペンを休めて雨を聴く

鬱の日は影と会話をして暮れる

横浜市 豊田 羊子

五七五 余生をリズムカルに生き

家賃補助制度を知った家探し

長生きが科学のこわさ見てしまひ

クローン羊 他人事でないひつじ年

大阪府 奥野 義夫

お神楽は終りピアスの娘にかえる

ひと言がなだれ現象妻の愚痴

夕鶴のように女の手内職

遠ざかる尾灯のように退職日

島根県 松本 聖子

一人増え家のリズムが狂いだし

大胆な子の発想に助けられ

表現を変える回転ドアがあく

しのび寄る老いを蹴とはす靴をはき

兵庫県 大谷 幸次郎

中流の見栄に切られるパンの耳

浅知恵が三人寄って文殊さま

人並みに引かせてもらうはやり風邪

春一番世のうつ積を掃くように

鳥取県 原 みさを

大学を出て酸欠の大あくび
札束にすぐにもみ手のくせが出る
鉛筆の芯ツンツンと五月病
ミズスマシ丸く泳いで嫌われる

枚方市 森 本 節 子

マンションの無口にも慣れ三年目
難聴でつい声高になるくらし
出る杭もあって世の中活気づく
副食費コレステロール上がり気味

河内長野市 木太久 正 一

弱い者いじめの国になり下がり
少子化を言訳にするお役人
甘い汁飲んで野党の腰ぐだけ
公金を勝手に使い天下り

鳥取県 近 藤 春 恵

変化球ボールは拗ねる術も知り
続柄は父としっかり太く書く
八方美人もめごとからは逃げておく
記念日に日の丸遠慮がちに揺れ

堺市 井 崎 ミサ子

さようなら言うまで黙って歩く道
おはようとい声の出るいい笑顔
おしゃべりが黙り周りが気をつかい
愚痴ばかり書いてる日記読み返す

香川県 向 山 治 延

成人式しつけ糸取る娘の晴着
寒椿八十路にきつい雪の道
縁遠い娘が居て雛の早じまい
老いてなお過疎捨てられず種を蒔く

大阪狭山市 伊 藤 尚 子

吉報が遅くイライラしています
その場では言わず後から出る苦情
頑張っしてほしいこの子に欲がない
どの花が好きかと聞かれどれも好き

岡山市 清 水 金太郎

円相場気になる孫の留学費
ああ無情 親の都合で子等は泣く
世に出れば内助の功を言いたがり
国会の議論に何の興味なし

豊中市 岸 田 知香子

釘煮する春待ちわびるお水取り
束の間をリツチ気分になるホテル
小商い閑な二 八の小旅行
次々と名所が出来る新世紀

兵庫県 森 脇 和 子

隣からころころうれしひなあられ
ひとり部屋春の香りと春の音
右を立て左を立てて愛し合う
早春の風へ恋するはぐれ鳥

横浜市 宮村 ちよ路

児童劇 裸の王が決まらない
年金を切りきざんでる台所
貴婦人へ孔雀も負けていられない

鳥取市 岸 本孝子

古い二人メモがあちこち貼つてある
口実をつけて飲んでる玉子酒
反対の意見出てから盛り上がり

尼崎市 軸 丸勝巳

預金解約睨むカメラも窓口も
叩く手 wait っていたのか冬の蠅
やと膝くずして雛は加太の浦

尼崎市 小川 富江

娘が言えば妙になつとくする私
生花の一枝背いてままならず
人柄か姑の法事の日はぬくし

伊丹市 延寿庵 野鶴

一生を疑問符持つて生きてやる
キャンパスの余白に描く茜雲
心電図美人ナースで乱れてます

横浜市 伊藤 ふみ

ツアー旅行エビを買わせて鯛を釣る
店の雛勢ぞろいして指名待つ
年重ね常識の箱丸くなる

豊岡市 榎 本雅之

遺跡からパズルをせよと壺が出る
論客も寡黙な口にしてやられ
不景気の長さ案じる預金帳

兵庫県 円 増純子

ひたすらにただひたすらに従いて来た
ご先祖があつての私だと気付き
遠慮なく意見が言えるいい仲間

横浜市 秋 元和可

マフラーを三寒四温もてあそび
もう遅いテールランプが遠ざかる
こだわりの泡一センチ ビアグラス

羽曳野市 徳 山みつこ

いい夢を見てパンジーが笑つてる
券売機お前も皺がいやなのね
たまごつちに負けんと夢も育てるぞ

八尾市 山 本宏

ぎっくり腰 神にもらった安息日
父の日に娘がデートしてくれる
春の宵花に誘われ回り道

神戸市 向 井泰子

しみじみとほうれん草の根が赤い
親からの顔も歳とりそのまんま
戦死した話は続く来世紀

日立市 加藤 権 悟

もひとりの蜚に住んでゐる火種

一匹の蠅を労る日向ぼこ

平成の美食よ奢り過ぎないか

羽曳野市 芦 田 絢 子

甘えたい日もあり亡夫へ書く日記

パズルみな埋めても何も変わらない

不足ない年齢と陽気なお葬い

愛媛県 安 野 案 山 子

満開の花へいけずな雨が降る

手違いの地獄をちよつとだけ覗く

公達の末裔ですかなるほどね

横浜市 近 藤 道 子

ロスタイム重ねて歩く恋もある

溶けにくい愛をしゃぶって持て余し

悔しくてやたらに食べる片想い

兵庫県 安 達 厚

病弱が古来稀なる春を生き

雪柳春は近いというてくれ

老いるほど妻は大事な宝物

横浜市 保 田 絹 子

夕映えの山なみきつといいあした

料理より先に覚える後始末

俺が先貴方あとよと墓掃除

東京都 井 上 つよし

変身を夢みて励むダイエット

リュック買う春一番に励まされ

謝恩会口八丁の生き残り

東大阪市 北 村 賢 子

寝ころんで太陽一人じめにする

血のかよう話に飢えているテレビ

とりたてていい事ないが春は来た

鳥取市 近 藤 秋 星

さくら咲く国に生れて来た果報

霊柩車花見のバスとすれ違い

待合室みなおとなしく待っている

兵庫県 倉 垣 恵 美

いつの世も青を信じた海でした

啓蟄へとくと用心して出てね

精一ばい伸びて欲望ない輪ゴム

唐津市 松 本 圭

三枚におろされている魚の目

突然に食べたくなつたゆで玉子

カウンター煙の来ない席につく

松江市 山 根 邦 代

いつの間に日足も風も心地良い

春風に野山の色を染められる

折返しとつくに過ぎて弾む靴

唐津市

宗

弘

デザートが出て割勘の備えする

贈り雛 桃一枝を添えてやり

チラシには新聞よりも念を入れ

八王子市

播

本

充

子

突っ走る耳には風の音ばかり

わかつてる欠点だから腹が立ち

逆風にしばらくダンゴムシでいる

唐津市

岩

崎

實

人質のニュースの続く雛まつり

使い捨ていよいよインクかすれだす

英霊の御魂は今も澄んでいる

大阪市

亀

井

円

女

その時はあなたも泣いてくれますか

白は白 黒は黒です亡母譲り

名も無い草も春を覚えて居てくれた

千葉県

大

川

晚

翠

まだ乗れる自転車山に置き忘れ

野遊びに社会奉仕と缶拾い

どこでどうなった噂の食い違い

鳥取市

石

上

悦

子

ひとりっ子お下りの服憧れる

鳥かごは開けてあるけど子は翔ばぬ

年頃は誰でも光るやぶ椿

池田市

木

村

一

笛

大阪は東京ドームに負けへんで

皺を取る薬はいらん年になり

愚痴っても愚痴らなくても同じ道

今治市

中

村

好

恵

裏をよむ人へ対話がとぎれがち

別姓のどちらにしよう世帯主

お彼岸のチラシお墓と仏壇と

堺市

梶

本

哲

平

医者になるとこがいいのよ止しなさい

博士まで二十五年の高月謝

むかし医師みな聖人と崇められ

愛媛県

宮

本

末

子

頼らずに生きるひとりの窓明り

足軽の日もそれなりに今日があり

速達の返事は夜のうちに書く

和歌山県

藤

井

春

子

ポイ捨てにも少し欲しい思いやり

春の部屋季節にあわせ模様替え

安らぎが欲しくて会いにゆく大樹

大阪市

杉

澤

汀

今にして思えばあれが別れ道

あのときもやはり小雨の降る夕べ

起承転あとはまだこず桜散る

富田林市 杉本とも子

元氣だよ何と嬉しい春の声

辛い世を知っている父甘い声

東京で芽を吹き出した若い竹

榎原市 西本保夫

泣いた分だけを笑いにまぎらわせ

足並みをボクに合わせる未亡人

銘の無い茶碗ばかりの夫婦仲

和歌山市 吉村さち子

梅匂う四十九日が後先に(二月、二月と不幸あり)

食いぶちの中から買った花の苗

友達友だちまでも響き合う

枚方市 石森利昭

沈丁花匂う夜道に二日月

温暖化花の便りが早くなり

流水に国境は無し春が来る

横浜市 明渡トヨ子

義理固く今年も来ます杉花粉

ひとり居は気楽と不安五分と五分

真夏日が思いやられる冬のダム

鹿児島県 大山舞鳥影

ライバルにエールを送る自信過多

塾で学力 躰学校 親仕事

間伐材の割り箸だのに自然保護

八尾市 平川幸枝

不始末の子のほころびを繕いぬ

気休めの反省などはせぬつもり

初ざくら見えるベッドの位置を変え

今治市 野村清美

兄嫁がいいから里へ足が向く

寄せ書きの色紙が埋まる披露宴

棒立ちになってこけしの物思い

大阪市 一本勇太

今ならば間にあいそうな釘を打つ

鍵にぎる男うす目をあけている

輪の外に出てマンネリを裏返す

寝屋川市 井上すみれ

齢なりに賞味期間の日々新た

茶髪連嫌ってばかりいられない

拭き上げた眼鏡が今日の客を待つ

高槻市 傍島克治

小鯛でも再起に嬉し祝い膳

休校か小川にめだか見当らぬ

見合ではたしなむほどと言った酒

高槻市 小林一閑

散髪屋少ない髪がやりにくい

肩書きをまだ捨て切れずお気の毒

日と曜日 新聞を見て確かめる

和歌山市 松本良

電話するだけの孝行しています
人間不信鍵を預ける場所がない
大器晩成そんなに待てぬ塾通い

鳥取市 富山雄幸

孟に春爛漫を踊らせる

我武者羅に生きた親父の破れ傘
今日生きて笑い上戸と戯れる

鳥取県 橋谷静江

花だより聞けば仕事も手に付かず
趣味多く予算は何時も越している
良い鬼になって子孫へ嫉する

富田林市 欄智久

骨粗鬆症 骨も私も八十歳
ダンディズム男の美学に遠く居る
家計簿から妻の悲鳴が聞えそう

吹田市 野下之男

絢爛が池に落ちてゐる金閣寺
汗かかぬ金が世間を騒がせる
マドンナに話しかけられ金縛り

和歌山市 福重美子

本職でなくて楽しい野菜園
ビルが建つカラス吃驚する高さ
転勤は馴染んだ頃にやってくる

八尾市 高橋明子

うす着して前後左右の捨てカイロ
タダの券暖房切れて風邪を引く
折れそうで身じろぎもせずフラミンゴ

横浜市 菊地政勝

ときめきが失せてきたのも歳ですか
ぼつくりと逝っても社会困らない
家庭でも肩たたきだけやらせない

和歌山県 中村君枝

転んでも只では起きぬ女の目
迷惑な落とし物です重油とは
金持った人が次つぎだまされる

八王子市 井上京一郎

恋猫の恋には遠い面構え
お向かいの窓から恋の狙撃兵
乾杯へこん畜生も居るグラス

交野市 山川日出子

夢の字の帯が行李でねむってる
本堂が相撲の部屋に早変わり
喜怒哀楽を捨てて気楽に手術する

高知県 百田幸

ファッションは嫁に相談して決める
雑魚なりにみんな幸せ丸く生き
放し飼いされてる感じ老夫婦

八尾市 井尻民子

目立たない所でわたしなりに生き

道草で過ぎた人生ネバーリターン

姉少し美人だからとたかが知れ

八尾市 砂田八寿子

女にはちらり油断をみせておく

行草のラッパの音色聞こえない

だあーい好き硬い財布の紐ゆるむ

高槻市 江原秀夫

銀行がどうのこうのと花見酒

立飲みの酒空しさが胃に落ちる

エンマさま舌抜く数にあきれ果て

今治市 塩路よしみ

三回忌亡母の絆が寄るぬくさ

七つ道具バッグに詰めてまだ女

色即是空何度唱えた仏間の灯

兵庫県 仲井素水

頑張れば素通りをする風邪の神

肩張って歩いた頃は妻が居た

口車うっかり乗れぬ泥の舟

和歌山県 尾田綾子

距離おいて自分の夢を確かめる

山菜を採って今年も四季の味

捨てる神拾う神あり地平線

高槻市 左右田泰雄

暇そうな人に近づき道を訊く

車窓からみつけた自分だけの春

旅に出て心の元氣貯めてくる

広島市 流奈美子

すぐ熱す血がありいまを生きている

たやすくは答えられないから笑う

四捨五入整理上手な棚袋

吹田市 石原靖巳

禁酒禁煙まだ人間を捨てきれぬ

人悩み地球まで病む世紀末

和気藹藹 傷が大きくなるばかり

泉佐野市 稲葉洋

幼稚化と言うがマンガも味がある

読む本と見る本に分け昼と夜

児童劇最後になった鬼の役

和歌山県 中後清史

自動化が診察券を迷わせる

親切なナースの針は痛くない

消費税老人医療費寒うなる

和歌山県 森口美羽

解消をしても尾をひく腐れ縁

ふところの寒さ心も飢えてくる

エンドレステープは輪廻だと思ふ

年金暮し四月が怖い消費税
年がいもなくまくし立て気が引ける
妻にねじ巻かれて走る市場籠

尼崎市 中澤向西

就職の決った夢に跳び起きる
平均寿命男おんなで何故こうも
長身の嫁で私が可哀想

尼崎市 尾宮弘治

つぶやきが聞こえるような木の芽風
平凡な暮らしに熱い火が欲しい
縄のれん気分晴らしのコップ酒

羽曳野市 内田さとみ

端っこに座る癖あり自由席
未だ死ねん行きたい所たんとある
たんまにはぼうつとしようのんびりと

大阪市 中井正秀

禁酒禁煙 息子と誓う納骨日
いつまでも煩あたたかいうす化粧
午前五時生きてた妻は六時死ぬ

島根県 大野蒼流

うぬばれを乗せて漕ぎ出す泥の舟
よかったと言える出合いを待つ老後
逢えそうな予感ゆつくりペダル踏む

岡山県 富坂志重

ボタ餅の夢空腹が充たされる
死の影をうつつにみすえうなされる
日の本の我防人ぞ斃れまじ

大阪市 岡本久峰

主治医より看護婦さんがえらく見え
童歌しずかに流れ眼手術
執刀の医師を信じて鯉となる

兵庫県 西川一繁

男と女のつまらない空間
影を描いていると心が出てきた
お帰りと言われて父の顔になる

尼崎市 松下比ろ志

春風を悪役にする杉花粉
講習を受けた日だけは心する
条件が多すぎパート見つからず

横浜市 福田由美子

歯の治療右も左も削岩機
もう七十まだ七十と白髪抜く
物忘れ夫婦互いにけなしあい

佐賀市 黒川峰翠

初孫を宝のように抱く夫婦
カラフルなエプロン腕に撚りを掛け
いそいそとチラシに引かれショッピン

松江市 浦辺静江

尼崎市 河津正治

逃げ道を考えながら小言聞く
逢った夜の木枯しそつと頬を撫で
出稼ぎの父励ました子の便り

大阪府 澤田和重

入浴剤 今夜別府の湯になじむ
久しぶり聖書にこころ洗われる
老いの恋枯れ木に花を咲かせよう

静岡市 大村正雄

真面目顔並ぶ明治の古写真
一円も混って瓶の義捐金
失策の後の説教効いてくる

横浜市 生坂サト子

腹の中色とりどりの鬼が棲み
背のカイロ押されて熱いラッシュアワー
インプットされたコースの鮭の群れ

鳥取県 国森武子

会う毎に形見をくれる叔父であり
ほめないが一目おいて嫁をみる
煙ほどはかないものよ命とは

鳥取県 谷寛子

老いも病も認知しないと言うあなた
これからが実の夫婦というけれど
だとしても今更夫変えられず

島根県 福岡博利

だんだんと亡父に似てくる兄の背な
すばらしい句想トイレを出て忘れ
鍋だろう妻が鯨鰯買ってきた

北海道 中里つね一

洗濯機一人ぶつぶつ土間の隅
雪あらし窓越しにみる蝦夷の冬
寒鴉風にのつてる風を追ひ

鳥取県 吉田孔美子

針も錆びてわたし一体何してる
カラオケとパチンコ母性浮遊する
再生は効かない母の返し針

東大阪市 松山隆

減塩の日にハグラムどんな味
税サ別 仲居さんには胸次第
窓口に引出しにくい片えくぼ

岡山県 国米きくゑ

付き合いの言い訳叱る聴診器
異口同音いい人だった通夜の席
カーブでもナイスキャッチの出来る妻

姫路市 服部一典

縄のれん元校長をなぐさめる
難病も老化ですますかりつけ
病んでいる妻が居るからばけられず

兵庫県 西山 八重子

衣食住足りて老後が忍び寄る

一日の疲れ足にも灸を据え

ひたすらに歩き二人の縄電車

吹田市 西岡 豊

祝快気関所通過のいい笑顔

髪染めて若く見せたい見られたい

幸福の螺旋階段駆けのぼる

松江市 佐野 みえ

爽やかな風に逢いたく街に出る

プラス思考になって明るく振舞える

亡母の年越えてまだまだ生きる欲

羽曳野市 森田 四三郎

オレンジのうまい話に乗った悔い

ひたたくりワースト一は大阪や

年下が流行ると聞いてまだ嫁かぬ

静岡市 中西 雅

電線が歌う楽しいやみあがり

エスコートされる身になり気はすかし

生きのびたすごいちだ冬の蠅

河内長野市 妹背 尽呂久

バーゲンであれこれ買って悔いる癖

夫婦とは無色の他人かも知れぬ

勘定をいつも合わせている幹事

沖縄県 杉谷 一栄

変なもの食べた気がして覚める夢

ふる里のお宮とお寺変りない

孫負うて転んでからの怖い道

島根県 武島 ちよえ

踏まないで芽吹き始めた草の私語

春一番回覧板で宮の寄付

悪いのはわたしでした事で事がすみ

大阪府 中橋 恵美子

梅の香を近寄って聞く車椅子

すり足で昔へ戻す能舞台

天守から虎も梅見をする人出

鳥取県 藤山 弘子

建て売りに気持ちほどある障子の戸

温泉の雪見障子で酒を酌む

鬼さんも老眼鏡をかけている

鳥取市 藤 ふうこ

丸を書く明日は今日より大きいぞ

するめ裂く腹の立つこと許そうか

ねぎ坊主みんな負けん気のばす首

大阪府 三浦 千津子

伝統美継ぐ子がいない鬼瓦

褒め立てる人に魂抜かれそう

無念かな信じた道に裏があり

鳥取市 山本 益子

引退をささやく頃が花道だ

中傷は柳に風と受けながす

新聞のおくやみ欄を真っ先に

倉敷市 家守 政子

五田玉財布の中で威張ってる

玉葱と花粉に弱い私です

強かに生きて勝手なつんぼです

和歌山市 楠見 章子

おおかたはカウンセラーという和尚

初めての簡保の宿が好きになり

新地駅禁酒始めたところなのに

豊中市 みき わきみ

古稀傘寿戦友会がまだ続く

シルバーマーク要るのか無事故六十年

しきたりは伝わらぬまま核家族

岡山市 土居 ひでの

うれしきは孫が家業を継ぐという

残照のひとりおしゃれな袋帯

飽食の森で出口を見失う

出雲市 加藤 スズコ

雪の朝猫が陣取る縁の下

冬眠の和服春待つ祝事

若かった記念写真のエピソード

静岡市 増田 抄美

医学書の気になるページ二度三度

一病に熱い情けの長電話

味方から洩れた噂が命取り

静岡市 宇佐美 寿美

孫と歩き未来の虹を語り合い

反抗期いつか芽を出す夢にかけ

土壇場で男の本音ためされる

兵庫県 高見 末野

二月雪 夫が逝った日を想う

隙間風 用事ないのに戸をたたく

通販のカタログ孫と若く観る

兵庫県 谷田 多美子

孫のことばかり祈って初詣で

インシュリン打ちつつ食べる桜餅

羽繕いする術もない能登の鳥

鳥取県 高尾 京

春浅く陽光追って花の鉢

税金の使途が気になる国に住む

追憶の風にひろがる海の彩

和歌山市 和田 美寿子

無雑作に活けて我流と書いておく

つまずいた石に秘密をみやぶられ

さあ行こうゴムのスカート食べ放題

益田市 岡田 たくを

コツコツと貯めてお墓へ持ってゆく
酸っぱい酢のんで命をいとおしみ

鳥取市 宮脇 道子

遺伝子に小さい癖もひきつがれ
いやがらせ年に不足はない自分

岸和田市 不破 仁緑

ボツボツと話すが筋は通ってる
梅の香が天神さんによく似合う

鳥取市 森 明美

住専と厚生省をつつく鍋

地下街の少しおしゃれな店で買う

砂川市 武田 正美

人様のニュース気軽に聞き流す
百ヶ日さてそれからの夜の永さ

高知市 桑名 知華子

それまでは癒しの時と鶴を折る
子にみせず神仏拝むこともあり

倉敷市 戸田 正志

嫁さんをもらって友がすぐ帰り

花嫁の夢はタラップ降りるまで

枚方市 二宮 紫鳳

散っていくあわれを知らぬ造花です
自分さえ信じられない迷い橋

唐津市 林 公一朗

反対の鬼がこの頃与党ボケ
茹でガエルまだ中流と勘ちがい

大阪市 川久保 睦子

あすは明日今日はゆっくり歩きます
口裏を合わせ穴から抜けられぬ

大阪府 団 野恒

柄杓リレー貧しい国の危機管理
まちわびしホットなニュース梅便り

松江市 松本 知恵子

合格に母と娘で選る春の服
行きつけは老先生もいる医院

福岡県 横地 東川

共に老い立てずせめても筆便り
やる気まだ傘寿の手足サロンパス

島根県 児玉 幸子

うぐいすの初音へ春が目を覚ます
どの子にも同じようにと母の愛

松江市 川本 畔

真実がしどろもどろとなる弱さ

沈黙の平和がこわい白い飯

徳島県 安宅 美代子

しとやかにじつとこらえた訪問着
食べて寝て牛になるぞとまだ教え

熊本県 増田 一 乗
傍目には足りぬ日本の危機管理
月刊誌整理すまぬに次が来る

島根県 谷岡 ふみ

花吹雪うけてわびしさ老い同士
訃報欄わたしも順が来そうなり

寝屋川市 瀧本 八十八

お粗末になった日本に泣く論吉
のんびりと落ち葉焚火で芋を焼く

兵庫県 西井 つや子

いい話はじけるような笑い声
ふる里へ春の小川を聞きにくる

西宮市 井上 俊二

腹八分守るつもりが箸を出す
豪邸の普請の音が胃にひびく

鳥取市 福田 登美

公約が足踏みしてる春霞
ごぶさたが筆を持つ手を重くする

生駒市 半澤 無眼子

神集いヨセフの苦悩慰める
柳多留背負い三途の川渡る

成田市 斎藤 房子

夢売りの風になびいた紋白蝶
春一番こころの塵も掃いてゆけ

羽曳野市 山本 たけし
火ダルマで五パーセントに決めました
教室でそっと孵化したたまごっち

倉吉市 大下 智子

里帰り姉のみやげはよもぎ餅
目的は何か知らぬが署名する

和泉市 横山 捷也

呑む前に聞いておきたい正座する
携帯で高笑いして乗って来る

東京都 清原 悦子

七人の敵にいい顔して帰り
ブレーキも時々かけてマイペース

羽曳野市 三好 専平

彗星が氷だなんて嘘でしょう
血管にミルク飲ませて何するの

鳥取県 権代 康女

娘の晴着母が満足して居ます
日本語がくずれて茶髪増えてくる

大阪市 島崎 孝一

いつからか歩幅も孫に追いつけず
風を待つ先祖供養の風ぐるま

横浜市 長島 亜希子

わたしには娘の常識が非常識
老い二人小さい声で豆を撒く

広島県 山本 示風
琴の音に上品下品あったとは
春の風邪ぬけないままにお水取り

和歌山市 山根 めぐみ
演技力使い果した申告日
避けられぬ事ならいつそ胸を張る

福岡県 本田 忠男
ばらばらと勢子が見守る阿蘇野焼き
地図広げ妻の旅追う春炬燵

島根県 槻谷 伸子
漢和辞典六十年の長い秘書
魚屋できまる夕食古い二人

島根県 岩田 三和
こたつからヨーグルト酌むおもてなし
兄妹に恋はないです愛昇華

神戸市 船津 とみ子
髪を切る何の迷いもない春だ
食卓を飾る苺を買いに行く

尼崎市 森安 夢之助
耐えぬいた大正の貌豊かなり
大器晩成夢はまだ捨ててない

出雲市 梅ミツエ
太陽も汚染だらけで泣いている
着ぶくれて散歩をすれば重い足

尼崎市 長谷川 佳山
御仏の心にかなう島なのか
美意識も個別採点してみたい

兵庫県 徳平 毬子
検診は異常なしですえびす顔
モーやめて増える税金減る年金

岡山市 藤原 一平
男なら仮面ぐらいいは持っている
この辺で味方の数を読み直す

西宮市 井上 信子
鬼の面つけて三歳強くなり
颯爽と歩いてみても続かない

鳥取市 山本 崇
助手席を吃驚させる急停車
蹴躓く畳の耳にとがはない

米子市 池尾 保子
人間の命あずかる医者が好き
お一人様ひとつへ夫連れだされ

東京都 結城 明玄
小銭入れもたずに散歩すると決め
待つ人もないのに急ぎ帰宅する

泉佐野市 大工 静子
若者に老いの物差し間に合わぬ
宅配の預り賃へおすそ分け

香川 神保坊太郎

澄んだ瞳にみじんの嘘も許されず

スパルタで育って打たれ強くなり

米子市 小塩智加恵

予定表ばつばつ埋まる春うらら

親よりも学があるから出世する

和歌山県 村中悦男

テレビ消し孫の電話に耳をたて

零近い電話カードにせく会話

静岡市 松下正枝

容赦なく割り込んで来るコマ―シヤル

四人分とても都合のよい数字

松江市 安食友子

ラフカディオ・ハーン出雲なまりを愛された

来る来ない恨みがましい呪文だね

堺市 森千津子

思うことほとんど同じ不思議です

貴男とは終りたくない終りたい

大阪市 鈴木トヨ子

親子ですさとしさとされ丸くなり

両親の悪いとこみな似る子供

高槻市 執行稲子

ナポレオン抱いてそぐわぬ下戸の父

ニューロック見納めだった計の知らせ

兵庫 中野とよ子

窓の雪これほどまでに人を恋う

ワイキキの浜で水着が着てみたい

鳥取県 石谷昭恵

満点の正座で姑はまだ老いず

満点の努力出来には触れるまい

初恋は椿の花の首飾り

頑固者同士でいつも火花散り

伊予市立図書館川柳コーナー

開設記念川柳誌上大会

宿題と選者(各題2句)

「熟年」 山崎 鮮紅選 「波」 柴田 午朗選

「ドラマ」 坂本 一胡選 「五色」 龍興 秋外選

「未来」 白井 花戦選 「友情」 佐伯みどり選

「いたわり」 東野 大八選 「コスモス」 月原 宵明選

締切 5月31日(当日消印有効)

二次選者 増野 英作・仲川たけし・山田 良行・磯野いさむ

橘高 薫風・兵頭まもる・塩見 草映

参加費 1000円(郵便小為替) 発表 8月1日

表彰 伊予市長賞ほか10位まで 最優秀句を特別顕彰

主催 伊予市立図書館 伊予川柳会

沙湖抄

八木千代選

合鍵を売りに行こうか臘月
乾杯の腕はまっすぐ伸ばすべし
世を捨てた男のように留守番電話
煮凝りにする父たちの小言
体調がもどってきたら書く手紙
いつでもどうぞと天も地も暖かし
妥協して今日は四角いゆでたまご
も一人の僕に似ているのは樹水
もう少し若かったなら恋千句
通リゃんせ この先どんな道がまつ
飛鳥路を桂馬のように見て歩く
組み立てた積み木を崩す瘦せた決意
年齢の欄にヒミツと書いておく
見るものが無いので中釣りを読む
同調のペダルを踏んで曲がってしまふ
陽光にわが身を晒すうす埃
レールの上ばかり歩いて行きづまる
晩鐘だ炭酸ガスを吐き出そう
凍てる道歩く帳尻きつと合う
今日は頭三度下げたと書く日記

和歌山市	古久保和子	和歌山市	川上	大輪	和歌山市	森	荒介	西
尼崎市	田中	森	荒介	西	島根県	松本	文子	
米子市	林	森	荒介	西	和歌山市	川上	富湖	
和歌山市	川上	大輪			弘前市	齊藤	高田美代子	高代
和歌山市	川上	大輪			藤井寺市	高田美代子	高代	
和歌山市	川上	大輪			米子市	茂理	高代	
和歌山市	川上	大輪			松原市	小池しげお	高代	
和歌山市	川上	大輪			宝塚市	永田	高代	
和歌山市	川上	大輪			海南市	三宅	高代	
和歌山市	川上	大輪			和歌山市	福井	桂香	
和歌山市	川上	大輪			富田林市	池	森子	
和歌山市	川上	大輪			西宮市	牧渕富喜子		
和歌山市	川上	大輪			米子市	青戸	田鶴	
和歌山市	川上	大輪			鳥取県	鈴木	公弘	
和歌山市	川上	大輪			和歌山市	田中	輝子	
和歌山市	川上	大輪			枚方市	前	たもつ	

平凡な坂に吐息が落ちている
たたけばほこり春の陽はだませない
春愁のうすいコートは危険だな
たしかめあって川の流れの中にいる
うっかりと落ちそうになる春の崖
他人様の荷物もきつと重からう
七十五日の視線に灼かれている背中
千羽鶴上手に折って帰れない
神様の死角へ餅は供えない
渋柿に甘柿を接ぐ人のエゴ
おだやかな笑顔 練習しておこう
わたくしを育ててくれた子供達
何掴むこぶしか固いわらびの芽
墓参り始発電車でいつも行く
楽しみの種を見つけてから眠る
買う気ならブライバシーも売っている
ユリの花断崖にいてアカンペー
雪洞におんなの歴史点しおり
白魚を掬うて春を呼び寄せる
打ちすえて見ても尻尾のない妄想
頃合の石を拾って子に託す
端っこを担ぎ逃げたい時に逃げ
困ったら少し離れてみていよう
火をさぐるわたし一人の時間割
輝いた昔を偲ぶ粗大ゴミ
投函のぼとり未来の音立てて

倉敷市	小野	克枝	和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	月原	宵明
松江市	川本	畔	今治市	小西	雄々	和歌山市	桜井	千秀
八尾市	高橋	夕花	米子市	流	奈美子	和歌山市	驚見	正子
米子市	白根	ふみ	米子市	石谷美恵子		鳥取県	船津とみ子	
鳥取県	新家	完司	神戶市	奥田みつ子		西宮市	本間満津子	
米子市	政岡日枝子		大阪府	谷口	次男	和歌山市	野々	圭子
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	青枝	鉄治	和歌山市	中井	ゆき
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	福本	英子	和歌山市	播本	充子
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	福本	英子	鳥取県	西原	艶子
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	福本	英子	米子市	光井	玲子
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	福本	英子	岡山県	矢内寿恵子	
和歌山市	木本	朱夏	和歌山市	福本	英子	和歌山市	坂上	高栄

なにげなく窓際で見る花吹雪

昨日の闇が居座る胸をもて余し

哀しみを抱えてドミノ立ち尽くす

寄り合いへ行く欄干の雪にぎり

役終えたビニール傘が一人ぼち

去りし冬 一枚ずつを折りたたむ

この風が止んだら次の旅に出る

母のザルするする抜けて春の子ら

しきたりのひとつひとつへ目を瞑る

言葉から言葉をめぐる春の使者

一族の長老となる歴日や

手術すんだか西の雲にもわからない

時々は声をかけよう足の裏

無理するな言うだけ助けてはくれぬ

音の無い耳はガラスの部屋が好き

これからは老母に童話してあげる

定年がない太陽に乾杯す

ときめいてお彼岸さんに会いに行く

微粒子が明日のわたしを支配する

寒いさむいみんな無口な無人駅

胸の傷かばうかたちに猫を抱く

いい顔で春の足音聴いている

ちぎれ雲お前も今日はいいい顔だ

鬼の面笑うとどんな顔になる

目的は柩の中に置いてある

焦げ癖の鍋にも姑の自己主張

砂川市 大橋 政良

西宮市 門谷たず子

弘前市 相馬 銀波

鳥取市 武田 帆雀

横浜市 川島 良子

尼崎市 春城武庫坊

綾部市 藤田 芳郎

弘前市 肥後和香子

八尾市 高杉 千歩

豊中市 田中 正坊

尼崎市 春城 年代

東京都 山口 新子

米子市 澤田 千春

八尾市 村上ミツ子

米子市 石垣 花子

鳥取市 小谷美ツ千

黒石市 相馬 一花

富田林市 藤田 泰子

弘前市 一戸 ツネ

岡山県 富坂 志重

吹田市 山本希久子

羽曳野市 田中 透太

米子市 木村富美子

大阪府 澤田 和重

倉敷市 田辺 炎六

出雲市 園山多賀子

息ひとつ吐けと嬉しいアドバイス

誰がためにかがり火を焚くシクラメン

落丁もあって人間らしく生き

子の居ない分だけ減っている喧嘩

独り暮らし独りにかかる釘を打つ

ぎりぎりになれば私も変りそう

菜種の黄 心の画布に塗りたくる

セーターをほどくと過去がころげだす

冷凍庫に入れた愛だが小出しする

天界のなさけに迷う花手桶

やさしさで充分わたし生き過ぎる

行く春やうとまれながらボランテニア

ストレスを春の蛇口に流して

コメディアンだとずっと思われてた私

帰るところあるから今日も居酒屋へ

凝縮をすれば三口で足りるのに

分相応 歳相応の豆の蔓

剪定をして青空を広くする

猫の好みに合ったか猫が寄ってくる

杉のてっぺん見上げ笑っている息子

目が回る地球が回る忙しい

前むきに生きてよろこび上手なり

二キロずつ買うては試す銘柄米

チンドン屋来るのを春が待っている

ただ一途 香りに生きる沈丁花

春ですね田舎芝居が始まった

犬山市 早川 盛夫

横浜市 秋元 和可

羽曳野市 吉川 寿美

出雲市 竹治ちかし

大阪府 日阪 秋子

兵庫県 遠山 可住

大阪府 榎本 露児

川崎市 和泉見早子

寝屋川市 籠島 恵子

米子市 林 瑞枝

鳥取市 石上 悦子

鳥取県 土橋 螢

貝塚市 池田寿美子

今治市 村上久美子

鳥取市 春木圭一郎

守口市 結城 君子

大阪市 津守 柳伸

青森県 西谷 大吾

倉吉市 野口 節子

寝屋川市 江口 度

鳥取県 土橋はるお

八尾市 宮西 弥生

寝屋川市 岸野あやめ

倉吉市 松本よしえ

大阪市 鍛原 千里

鳥取市 坂田和歌子

友情があれば一人にさせてくれ
楽な方楽な方へと妥協癖

ケンカしたことがない子が気にかかる

風呂敷に包んであった亡母のころ

油断することは予定に入れてない

まさもどす時計はぬくいメモワール

再会へやっぱり女意識する

ゴミ出し場公德心も捨ててある

ハトポッポでも唄おうかカラオケで

一日一善 意識してない竹箒

エプロンの中に隠れている女

溜め息を弓張り月に睨まれた

遠めがね向うの岸はまだ見えぬ

北側のカーテンも替え五月晴れ

寺から寺 花の香りに札を打つ

孫に似た雛と白酒酌み交わす

肩パットはずして戯画の街へ行く

ベレー帽老後何とか似合いそう

机上論現場が右往左往する

観音も地藏もおわす花の下

内面の揺らめきを描く浮世絵師

ステッカー貼って無駄遣いを謳う

風かすか梅の散る日がまだ続き

定年に自己満足をして辞める

慰めの嘘を信じて眠れそう

合掌で秘めし想いを解きほぐす

笑面市 岩津ようじ

大阪市 神夏磯典子

鳥取市 美田 旋風

倉吉市 淡路ゆり子

八尾市 村上 剛治

八尾市 大内 朝子

西宮市 西口いわゑ

唐津市 久保 正剣

京都市 松川 杜的

大阪市 北 勝美

和歌山市 榎原 公子

鳥取県 林 露杖

茨木市 堀 良江

唐津市 仁部 四郎

米子市 木村 春枝

和歌山市 岩本美智子

横浜市 近藤 道子

弘前市 佐治千加子

富田林市 片岡智恵子

唐津市 浜本久仁於

今治市 渡辺伊津志

鳥取県 乾 隆風

岡山市 井上柳五郎

愛媛県 中居 善信

横浜市 保田 絹子

岡山県 山本 玉恵

ほどほどのゴムの長さがむずかしい
付添うてひとつ掴んだ虹の彩

樹の影が小さくなった春になり

密談の側で仲間と思われる

寝たきりが政治詳しく知っている

ラクガキを老人が消す無人駅

長生きの鬼でそのうち抜ける牙

代々の墓を故郷に待たせてる

佗助ポトリすべてを許すことにする

幾許の余命に笑顔絶やすまい

大根を抜いた穴から地の叫び

よく食べてよく笑うから安心か

失言も多い 雀のミーティング

気疲れをさせぬ釣り合いとっている

ジグザグに歩いた父の靴がある

あかぎれの痛そうな手の温さかな

うしろ指 心の寒い人だらう

西宮市 亀岡 哲子

鳥取県 さえきやえ

守口市 森川まさお

横浜市 山下 省子

静岡県 蘭田 獏沓

唐津市 山門 タミ

大阪府 榎山 隆盛

横浜市 菱田 満秋

尼崎市 長浜 澄子

香川県 木村あきら

大阪市 川久保睦子

和歌山市 宮口 克子

寝屋川市 太田とし子

和歌山市 玉井 豊太

鳥取県 土橋 睦子

兵庫県 大谷幸次郎

今治市 中村 好恵

古久保和子さんの臘月の人恋しさ哀しさには参ってしまいます。

愁いのたちこめた春の夕空の月を感傷だけに終わらないで、合鍵と

いう具象のものでかつちと押え、凝固した想いを上手に表わして

あります。しかも「売りに行こうか」とまたぐらりとさせる危なさ、

臘月そのものです。川上大輪さんの乾杯の腕の爽やかさ男らしさ、

まっすぐに書き切つてあつて、技巧を使っていないから小気味よく

ずかつと心に届きます。乾杯はかくあるべきもの。試みに「乾杯」

と声に出して腕をのばしてみました。肩の疲れがいつべんにはぐれ

ました。田中薫さんの留守電の独特の雰囲気、世を捨てた男と話す

妙に気構えた、やりとりの通わぬ電話。重くてSHYな電話です。

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(76)

橘 高 薫 風

路郎先生は十月十五日橋本緑雨氏から川柳雑誌社の事務所を引き取ってくれとの書信に接する。緑雨氏は、その年の四月二十六日に夫人外喜さん（行年三十四歳）を失くされた痛手に加えて、ご自身の手術後の体調も思わしくなかったのが理由であった。

先生はこれ以上無理を強いることは出来ぬと、事務所を天王寺区上汐町一丁目に移す決心をされる。同人増井汀柳、山本雨迷両氏を編集同人に推し、雨迷氏が緑雨氏の後を継いで総務の椅子に就くことになる。それ故雨迷氏主宰の『玉むし』は十一月号（八十一冊）を以て終刊となった。

上汐町の事務所は堂々たる洋館で、階上の洋室が編集室と柳談室に区画され、囲碁、将棋、卓球などの娯楽設備も揃っていたので、川柳会館、川柳倶楽部の観があった。屋上のバルコニーからは眼下に道頓堀の歓楽街の灯が見え、川柳から盛り場の夜へ歩を運ぶにもさして遠くはないところにあった。

昭和九年、川柳界に於ては井上剣花坊師の

死去、川柳雑誌社では事務所移転の年、路郎先生個人は朝鮮満洲川柳行脚が特筆される。

この年の川柳界有名人の一句を記す。

大阪 麻生 路郎

子沢山僕の枕は何処へいた

大阪 麻生 葭乃

すき髪の新チュリズムを讚美せむ

奉天 石原青龍刀

軍大へ顔をそむけて村の犬

東京 藤島 茶六

秋風立ち初めて鉦探すなり亡妻の一周忌に

青森 後藤蝶五郎

咲く花があり散る花の忘れ勝ち

大阪 堀口 塊人

嘘をつく心に少し余裕あり

東京 井上 信子

無抵抗神が白痴か美しさ

大阪 岸本 水府

啄木は亡し故郷の山はあり

東京 川上三太郎

わが上に屋根のある幸雨の音

御影 食満 南北
正月は遊ぼうといういそがしさ

青森 小林不浪人
しらじらと雑魚寝の夜は明けかゝり

東京 三浦太郎丸
秋の風大工一人の鉋屑

東京 村田 周魚
一人居て一人楽しむ三下り

大阪 塚越 正光
手伝えて蚊帳を畳めば鰻が鳴り

舞鶴 安川久流美
白湯のんで悟った顔も秋によし

東京 前田 雀郎
春もや、苦きもの置く舌の上

横浜 中野 懐窓
時に磨かれた色なる奥の院

大連 大島 濤明
笑つてるように日の丸風に揺れ

大阪 近江 砂人
気疲れて家族制度の国に住む

大阪 須崎 豆秋
大毎も止まり豆腐屋も止まり（風水害）

神戸 梶元 紋太
海を見ず港の街の幾日や

神戸 三条東洋鬼
親からの稼業がいつか世に遅れ

荀香のむ

西出楓楽選

塩の壺 姑は味方と知りました
 考えろかんがえるなは歳のこと
 育て上げ親も大人になりました
 リモコンが届かぬ場所であれを知る
 これからの旅は道草など出来ぬ
 今日も元気にポストへ種を播きにゆく
 羽目外し撫でております向う脛
 野の風と素顔で生きることにする
 カーテンを換えておいしくなる空気
 本当は翼だったんだね両手
 生き様はえらいと思う風見鶏
 幸せに気づかぬ人の不しあわせ
 春の蝶 誇大妄想せぬように
 フルムーン主婦の心を置いて出る
 写経して春の心を整える
 拝啓と書いてしばらく考える
 分解をして些細な傷を深くする
 返し針しすぎた悔いが母にある
 捨てにきた過去はやっぱり捨てきれぬ

羽曳野市 芦田 絢子
 吹田市 栗谷 春子
 横浜 川島 良子
 大阪市 川久保睦子
 大阪市 神夏磯典子
 米子市 石垣 花子
 大阪市 三浦千津子
 岡山県 矢内寿恵子
 八尾市 大内 朝子
 寝屋川市 籠島 恵子
 和歌山市 桜井 千秀
 今治市 塩路よしみ
 出雲市 園山多賀子
 鳥取市 岸本 孝子
 鳥取県 さえきやえ
 藤井寺市 高田美代子
 大阪市 稲本 凡子
 今治市 野村 京子
 和歌山県 杉山 精子

ダブルキッチン鬼のすがたが見当らぬ
 この春に熟年の匂見つけねば
 春は良し春恨めしい菜の花忌
 分別くさくなつて沸点遠くなる
 淡墨がばわーんと誘う春の書展
 衰える記憶といつも喧嘩する
 春の音お金も人も忙しい
 ため息で流そうあれも夢これも夢
 日に幾度おしめを替える宇宙人
 本当の痛みだれにも話さない
 梅の香がわたしに寄ってくる庵
 聞き役も会話のひとつ茶をすすする
 啓蟄より先にとび出す靴の音
 心にも手にも筆持つ水墨画
 幸せを私のサイズに合せてる
 鎌の月 縄文の恋知っている
 リズム変調 春の足音軽くなり
 淋しきは風にうなじを撫でさせる
 スランプと言えず只今考慮中
 度を越せば愛も嫉妬も根は一つ
 許す気の姿で百合は咲いている
 退屈な女が過去にしがみつく
 深い褥りに折鶴一羽翔び立ちぬ
 花咲けど試行錯誤を繰り返す
 真似をして生きるしかない影法師

和歌山市 福井 桂香
 大阪市 鍛原 千里
 吹田市 山本希久子
 和歌山市 川上 富湖
 弘前市 肥後和香子
 芦屋市 黒田 能子
 和歌山市 木本 朱夏
 大阪市 渡部さと美
 米子市 政岡日枝子
 米子市 中井 ゆき
 松江市 川本 畔
 富田林市 片岡智恵子
 守口市 結城 君子
 唐津市 浜本 ちよ
 岡山県 富坂 志重
 弘前市 一戸 ツネ
 吹田市 茂見よ志子
 川崎市 和泉見早子
 寝屋川市 岸野あやめ
 池田市 栗田 久子
 倉吉市 野口 節子
 今治市 村上久美子
 西宮市 門谷たず子
 松江市 佐野木みえ
 倉敷市 小野 克枝

子と同じ土俵におりてすもうとる
斜め読みすると換気のいいくらし
御好意に甘えていますモカの味
人間が一番悪い事をする

淋しい心つれてお笑い聞きにゆく
桃の花あの子も嫁ぐ噂聞く
他人さんの知恵を借りている余生

鳩尾に消化不良の語彙溜まる
大好きな花の咲く根がここにある
聞き役はいいねポリポリおかし食べ

風上に鉢置き替える沈丁花
正体を見抜いてからは雨期になる
みそ汁をふつつ心寒い朝

ここだけの話 一丁目から三丁目
五バー税 後の祭りが気にかかる
裏話聞けば首肯く事ばかり

本心は聞こえるように泣いて
ジョンガラが胸の底まで寒い春
街なかの匂いも連れて見舞客

切札がやさしい言葉で押してくる
無事故です私ベーパードライブ
葬送曲これに決めたよ赤とんぼ

時はわたしをおばさんにして知らん顔
笛吹きケトル話の腰を折っている
身のまわりせわし気になり花便り

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 古久保和子

和歌山市 細川 稚代

徳島県 安宅美代子

米子市 澤田 千春

大阪市 辻川 慶子

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 森口 美羽

鳥取市 小谷美ツ千

神戸市 船津とみ子

和歌山市 福重 美子

寝屋川市 森 茜

鳥取市 西原 艶子

寝屋川市 太田とし子

大阪市 日阪 秋子

大阪市 本間満津子

米子市 白根 ふみ

富田林市 藤田 泰子

寝屋川市 堀江 光子

熊本市 永田 俊子

横浜市 宮村ちよ路

横浜市 近藤 道子

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 山口三千子

尼崎市 春城 年代

戻り寒耐えます土筆落の臺

体調をくずした暇を狙われる

早々に先を読んでるカレンダー

声だけは変らぬままの七十九路

無駄口は言わず聞かないバーコード

念入りの化粧時には武器となる

ストレスはむかし話にねぎらわれ

割引に女は弱い好奇心

絶好のチャンスだ足がふるえ出す

ある時の自分が嫌になる鏡

お喋りと思ふ人などなくて春

消したいと思う人などなくて春

二日酔シヤネルの五番むつとする

和歌山市 福本 英子

八尾市 高杉 千歩

松江市 浦辺 静江

京都市 勝山美千代

和歌山市 吉村さち子

鳥取市 福田 登美

大阪市 津守 柳伸

愛媛県 宮本 末子

大阪市 松尾柳右子

八尾市 宮西 弥生

大阪市 小泉 久子

八王子市 播本 充子

東大阪市 北村 賢子

詢子さんの句―下五をはなし言葉にしたことによって、塩の壺がまことに所を得てくる。そのため、永遠のテーマと言われるどころどころした嫁姑問題が、上品な句に仕上がっている。春

子さんの句―その昔、親は子供に「まだ子供のくせに」と「もう大きくなったのだから」を使い分けて叱った。そして幾星霜―成人した子供たちは親に対して、この句のように忠告する。

家族から大切に思われている作者の姿が目にかぶ。良子さんの句―子育てのゴールは子供を自立させることであろう。その

時点で、作者のように胸を張れなかった記憶のある私には、反省をこめて頂戴した句。睦子さんの句―良子さんの句が親の立場を詠み、この句は自立した子供のものと見えよう。二句を並べて、理想的な親子像をつくり上げてみた。

壺

富田蘭水選



美しく生かし合つて花と壺
小さき母心を預かる壺となる
一つ一つ話を抱く古い壺
縄文の壺に祖先の声を聞く
枯野出て女が流す涙壺
自惚れを溜めてた壺も底にひび
陽の目みた壺からロマン転げ落ち
火消壺老いの残り火までも消す
一か八男は壺に賭けてみる
我が人生壺のサイズに身をまかせ
蛸壺に女の業がとぐろ巻く
やんわりと押された壺に吐く本音
火消し壺の中で渦巻く恋心
妻の焼くいびつな壺にある意味
今の幸ためておきたい壺さがす
したたかに母は見せない涙壺
金婚の壺に溢れる愛と憎
まほろばの先史を壺に語らせる
大欠伸しながら壺は箱を出す
刎頸の交わり壺に酒滴たす
床の間の壺に野心は封じ込め
三猿を壺に隠して金を貯め

豊 美津子 明水 政良 権悟 一壺 鉄治 克夫 高夫 公一朗 潮華 あずま 英子 恭昌 志重 久美子 正剣 岳水 日枝子 帆雀 黎之助 子龍

一の矢が壺はすして飛んできた
一喝の寒雷壺にとじ込める
汗ばんでいるのが偽の壺だらう
思ふ壺に嵌めたつもりにある誤算
幸せがまさかの壺にあった運
アラジンの壺がほしいと子がねだり
企業秘密壺の垂れには黙秘権
欲の手がつかぬからぬけぬこともある
振り翳す壺は乾いた音で鳴る
壺がもう割れそう愚痴がいっぱいで
高慢な壺は花とは妥協せず
壺壺に母の願いが脈を打つ
幸せをつかむ言葉が壺にある
壺満杯二十一世紀はすぐそこに
壺壺が満ちて心が欠けてくる
佳

みつこ 富江 俊路 有一朗 愛論 正雄 きみえ 智洋子 あやめ 多賀子 さち子 狸村 みさを 和枝 島 銀波 諷云児 ちかし 荒介 しげお 螢 天 軸 明日の絵の描けず乾くインク壺 海老池洋 赤の汗えべネチア壺にあるゆとり

手 本

井上直次選



生命の手本父が遺した闘病記
お手本にしますと言う褒め言葉
育児書より手本は母の子育て記
戦争と平和くぐった父手本
逆境の手本に親の汗がある
身振り手振りマスターしてもちがう味
まだ母の煮物を越えぬ妻の皿
幼児は良いも悪いも手本にし
僕を手本に動いてくれる僕の影
お隣を手本におしやれでもするか
手本から貰ういい癖悪い癖
お手本の通りなるとは限らない
お手本をはみ出るとは限り立志伝
蹟いて大きく見えてくる手本
利己主義の手本と顔に書いてある
うちの恥手本にしておまこと
前衛派 手本はいらぬ個性出す
軍国の妻を手本に生きてきた
手本より自由自在に子は伸びる
手本より反面教師みせておく
お手本はお手本参考にあいたします
お手本にされるくらしに影ができ

恭昌 甚一 強一 洞庵 俊子 千代 正子 千枝子 佳雲 露児 政良 狸村 可住 しげお 勇太 久美子 照子 螢 あずき 舞影 杜的 明水

お手本と決めてた人の裏を見た
日本人手本通りが好きなら
生きてゆく手本を貰う蟻の列

よく聞けば僕が反面教師らし
決断力 嫁を手本に整理する

父の挫折手本に今日もいく夜学
手本にはならぬ私の過去語る

そこそこの手本かえってやる気出す
お料理の手本にはないかくし味

笑い皺老母の笑顔が手本です
お手本が悪いまま書いたモンタージュ

お手本が悪いことばかりして困る
お手本にないことばかりして困る

会う人のみんな手本と思う古い
世渡りは俺を手本に子よ孫よ

佳

DNA 手本なくとも瓜二つ
手本は手本やがて越す夢みる個性

三下り半書いた手本が売ってない
習ってはいけないことから教えとく

創作に個性が消えてゆく手本

人

近づけば手本の息も乱れてる
地

手本にはするなと汚点悔いている
天

ほんとうの手本は父の胸を借り
軸
お手本の通りに生きて無味無臭

あいにく

時広 一路選



啓蟄の扉あいにく春の雪

ごあいにくさまとおみくじ凶が出る
持ちあわせなくてバーゲン下見だけ

アリバイがあいにくばれていた不覚
ごあいにく援助交際年金者

手の内は読んでおりますごあいにく
柄も値もいいがあいにくサイズがね

折角の再会あいにく花粉症
休肝日なのにあいにく友が来る

おあいにくさまと孔雀は知らぬ顔
タクシードライバーでやかましい

一粒万倍の日あいにくと雨が降る
解明の語が見付からぬ白い嘘

あいにくの雨でも嬉し披露宴
生憎の天気話題に間を持たせ

お賽銭あいにく小銭切れました
あいにくと父は鰻が好きでした

夕食を当て込んだの母は留守
家事手抜きした日あいにく姑が来る

重なつた法事に切符無駄にする
あいにくまた泣かされている手相

寿恵子

杜 的

美也子

狸 村

奈美子

好 恵

武 史

強 一

剛 治

美代子

螢 螢

多賀子

あいにくくさま邪魔な尻尾は切り捨てる

あいにくを断り上手使い慣れ

あいにくの眼元で今日は誘うまい

神様があいにくよを見てた事故

晩学へあいにく探す辞書がない

あいにくの留守葉たんが伸びている

あいにくも運よく降るも同じ雨

あいにく南にビルが建つという

あいにく雨とは雨に失礼な

あいにく魔法の壺が毀れてる

あいにくくさまと孔雀は知らぬ顔

タクシードライバーでやかましい

禁煙席売り切れでした咽せてます

あいにくと言われてからのねばり勝ち

期待した友の財布にうらざられ

一泊の旅を断る犬を飼い

徹夜までした来光が出て来ない

あいにくくさま邪魔な尻尾は切り捨てる

あいにくを断り上手使い慣れ

あいにくの眼元で今日は誘うまい

神様があいにくよを見てた事故

晩学へあいにく探す辞書がない

あいにくの留守葉たんが伸びている

あいにくも運よく降るも同じ雨

あいにく南にビルが建つという

あいにく雨とは雨に失礼な

あいにく魔法の壺が毀れてる

哲 子

富 喜 子

一 壺

満 秋

大 輪

めぐみ

幸 弘

幸 夫

ち かし

諷 云 児

英 王 子

晋

あずま

保 州

ツ ね

み つ こ

し げ お

宵 明

荒 介

時 弘

日 枝 子

美 代 子

藤 田 芳 郎

初歩教室

題 — コース

吐^は田^だ公^{きん}一^{いち}

今回は推敲のやり方について述べよう。

○園児からコースを決めて突っ走る(原句)

コースを決めたのは園児ではなく親

▽決められたコースを園児突っ走る

園児からコースを決められるというのは、

少しオーバーかも知れないとすれば「また

上句と下句を入れ替えてみると

▽突っ走る進学コース親が決め

親子の姿を織り込むと

▽進学のコースへ親も子も必死

これが終には子の反感を買ったとき

▽決められたコースへ強い子の反抗

この他コースを詠み込まなくても、コース

を表現できる句も可能

添削句

○ライバルと出世コースを過去競う 益子

本来競うのは過去ではなくて現在である。

▽ライバルの出世コースにある妬み

○はずれなく辿れるコース今はない 奴夫

恐らくあなたの頭の中では、エリートコー

スがあるのではないかと思うが、それが詠

まれていない。

▽頂上へ辿るコースにある起伏

○予算には入ってなかったフルコース てる代

中八「入れてなかった」で中七となる。

○散歩道今日はコースを変えて見る 久子

原句は説明句と言って、単に「今日は変え

てみよう」というだけで、内容に乏しく、

読んだ人の視野が広がらない。コースを変

える理由を想像してみると

▽あの方の家へコースを変えてみる

○お奨めのコースで跳んだフルムーン 泰雄

全くの説明句。フルムーンはどうしても夫

が頼りとなる。この辺を詠む。

▽フルムーンコースを選ぶのは夫

○人生のコースも僅かあと浄土 一典

言い切ってしまうので含みがない。

▽人生のゴールが迫り残る悔い

○母が願ったコース違えた漫才師 トモ子

ノックという参考を生かせば

▽漫才師にも開かれた知事之道

○このコース自分を活かす苦だった 俊二

中七以後に一考を要す。

▽入社時の思いと違ってきたコース

○京住まい同じコースを案内する 啓子

内容が単純すぎる。「さされる」で意志に

反したガイドもあることを指す。

▽旧跡のガイドさされる京住い

○進学のコース早やばや親がきめ ますみ

巻頭の例句を参照のこと

○朝野鳥同じコースで飛んでくる 日出子

上五と下五が少しひつかかる。

▽極地から同じコースの渡り鳥

▽野鳥くるコースを待っている窓辺

○万歩計いつものコースで右折する 多美子

○万歩計いつものコース行けと言う ミツオ

着想が単純。共感を呼ばない。

▽万歩計コースを変える花の道

○富士山へ登るコースはたんとある 剛治

原句は当然のことを述べているまで

▽山頂のコースを目指す好敵手

○四季の花愛でて散歩をするコース 美恵子

散歩の句は多い。それだけに吟味を要す。

▽四季ごとの花にコースを選ぶ散歩

○コースから外れ団欒とりもどす まさと

団らんのもととは父であり、これを詠む。

▽コースから外れ素敵な父となる

○離れては行けぬコースで手をつなぐ 芳水

夫婦愛と解釈すると

▽手をつなぎ縁大事にゆくコース

○正論を吐いてコースを踏み出す 義男

折角の佳句が下五の誤りで台無し。出す↓
外す、投句の前に再度読み直すこと

○占いでコースはとても決められぬ 専平

「占い」であるから、就職か進学かのコースが想定される。であれば

▽占いで就職コース決めかねる

○靴を替えた喜び躍動が欲しい。捷也

靴を替えた喜び躍動が欲しい。

▽靴替えていつものコース弾み出す

○このコース行けば必ずあえる人 志重

原句は説明的。少し創作を入れると

▽逢えそうな期待で選ぶ散歩道

○人生のコースに逸れてひと休み 美也子

下五に夢がない。

▽コースから逸れてじっくり明日を読む

○低気圧コース外れてひと安堵 宏

原句は気象の低気圧にとられる。妻の低気圧に持つてゆけば句が生きる。

▽低気圧コースが逸れたとはつちり

○リストラで走り続けたコース尽き 早智

宮仕えはカビくさい表現だが

▽リストラでゴールにされた宮仕え

○コースからはずれて分る人なきけ 道子

下五に無理がある。言葉を探る努力を

▽コースからはずれて分かる人情味

○チラシから花満開の旅コース 智加恵

チラシと旅コース、ストリートすぎて面白くない。満開もこの場合不要

▽花便りチラシに乗って行くコース

○趣味講座あまたコースの一つ決め 一乗

沢山の中の一つを選んだというだけでは、

川柳とは言えない。

▽趣味コース一つ選んでボケ防止

○汗ばかり出るたまさかのフルコース 幸次郎

汗ばかり出る「言葉が冗長。節約した言葉の分だけ他の雰囲気詠める。

▽冷や汗で味のわからぬフルコース

○人生のコース雨のち変わりゆく 富江

人生のコースも多かった。原句は下五に難

▽干されても雨のち晴のコース待つ

佳句

人と球コース逸れたらアウトとは 馬洗

(全く面白い見付け。頑張つて)

地獄行きのコース空いていても乗らぬ 彩子

フルコースより素うどんが性に合い 明美

思案してとったコースは回り道 円女

亀の歩みでコースなど選ばない ミツ子

散策のコースに惑う花のころ 利徳

(下五が少し安直だが)

矢印を信じコースに賭けてみる 隆

(初めての佳句。よく頑張られた)

お茶漬できまり我が家のフルコース 苑子

人生のコースはいつも多事多難 美千代

(大上段に構えすぎだが)

はぐれ鳥きらめくコース見つけてる 登美

(見付けがいい)

どのコース行っても出口ただ一つ 美子

(意味深長の句)

地平線続くコースは天か地か 郁子

(天国か地獄か、一寸先は闇)

コースから外れてからの愛妻家 アキ

(人生の哀愁をサラリと詠んでいる)

七光り決った道を登りつめ 孝子

(コースを詠み込みます、いい着眼)

単身のコース励ます電話ベル 崇

(家族愛がほのぼのと)

震災が変えたコースを生きて行く 純子

(人生不慮の変遷を素直に)

卵から蛙はコースを決められる 玲子

(掃果本能をうまくキャッチ)

花のあるコースが好きなら万歩計 宏章

ハードルを越えてコースが見えてくる 幸枝

(ハードルとコースの組合せがいい)

蹊いた茶髪夜学の灯が拾う 君江

私の句

左遷地へ派閥のコース取り違え

生々庵先生の思い出

鎮魂の賦

板尾 岳人

「岳人くん、金剛山へ案内してくれ」「ハイわかりました」。生々庵先生を想う時、いつもこの会話から。後日、直原玉青先生ら御一行をケープルにて山頂へ御案内したなつかしさが走馬灯の如く。

先生はいつも少年のようににはにかみながら冗談をいわれ、思いやりこもった眼でわれわれを、川柳塔を、そして医学者として世界を眺めておられたような気がする。

計報に接した時、僕は枯れ木が朽ちるようだったと思うていたが、先生は巨木が音をたてて倒れたような思いで悲しみも深かったような気がした。死ぬことは先生にはどうでもいいことだった。すべてはただ生きることに尽されていたように思う。

先生は句集『生々樂天』発刊の跋に「世間の言葉に良妻賢母というのがあるが、私は良妻よりも賢妻、賢母よりも良母が望ましく思う。小石は、まさに私の望む賢妻であり、良母である。たとえば、野球の打者で言えば、打率が一割そこそこしかない私を「割打者」、時には三割打者近くにまで世間に押し出してくれたのも賢妻ぶりである」と、のろけを書いておられる。先生は日本の素朴な幸福観をそのまま実践したような一生だったのかもしれない。それは先生の柩を見送ったとき、見事な神様になられた気がしたからである。葬儀当日、大阪は雪が積って真っ白だった。

先生の思い出

岸 本 豊平次

生々庵先生との出会いは先生の本職の中島小児科診療院に薬剤師として就職した日から

です。昭和二十五年二月四日でした。当時川柳雑誌で活躍しておられ、自ずと路郎殿乃ご夫妻をはじめ西尾葉先生その他当時の大先輩の方々とも昵懇と言ってもよいくらいにお付き合いさせて頂いた。二十六年に南区医師会に南画同好会が出来て、先生に誘われて一緒に勉強することになった。画の生々庵と行動を共にすることが多くなった。先生は大勢の人が集まるのが好きで、元日には川柳雑誌の方々が鰻谷の診療院の二階の広間に招かれて、新年宴会が催された。仲居さんも呼ばれて、三味線の音が戦後間もない心齋橋に近い静かな鰻谷に流れたものだった。夏には画の同好会の会員と、医師会の川柳同好会の先生が合同で、画と川柳の合作の雪洞を諏訪森の先生の自宅の庭に吊るし、路郎先生ご夫妻を囲んで夜の浜風に吹かれて遊んだこともあった。川柳雑誌も路郎先生の死去と共に消えて、新しく生々庵先生を主幹にして川柳塔社が発足した。本社は診療院の二階の一室に移り、不二田一三夫氏と小谷葉子さんが編集の業務を担当された。川柳が身近になり、そして皆の川柳にも接することが多くなり、私も昭和四十二年三月号から作句し投句を始めてより現在まで休まず続けています。先々庵先生には「よみうり川柳」で直接指導を受けました。

—水煙抄

秀句鑑賞

—4月号から

米田 恭昌

おしまいにみんなの風邪をもらう母

岸 本孝子

上五中七下五と夫々にひしひしと母の温かみが伝わってきます。昨年末から悪い風邪が流行しました。娘の家でも婿、孫二人と順に罹り、最後に看病疲れて罹ったのが娘でした。正月のことです。母は強く温かい。

三ヶ日夢を見させてくれた孫

福 重美子

甲吉さんの「孫がまた帰って行くよ淋しいよ」の句が頭をよぎりました。

防波堤こわれた恐さ痛いほど

長 浜澄子

思い出のカーテンを見るにつけ、いつも庇ってくれていた人の温味が胸を突きさします。万歩計うまいうどん屋知っている

森 安夢之助

健康の為の運動も旨いうどんには負けず。

ナビゲーター訛りが変わる雪の町

延寿庵 野鶴

トンネルをぬけると雪国、道を尋ねる人もなく、やっと出合った老婆の何と温い国訛りだったことか。出張の日々を思い出しました。ドナハンと聞かないでくれわしやがな

平 井露芳

永年苦楽を共にしてきた妻が惚け始めたのか、世話してるわしをドナハンとは「わしやがな」が哀しいまでにおかしき切ない。

椅子蹴って立つたお人がまた座り

岩 倉キク子

きつとローンはたまた子供が学資が頭をよぎり思い直したのです。男は耐えるのです。鬼が不憫で福はウチ鬼はウチ

森 本節子

追われる鬼をウチにおいてとは何と心やさしい。丹波では今でも「鬼はウチ」と豆をまく。落書きの字を先生に褒められる

伊 藤ふみ

こんな素晴らしい先生ばかりだといじめもきつと無くなることでしょ。

真夜中の電話が闇を支配する

田 辺鹿太

深夜にかかる電話は計報だろう。低く抑えている声がびんびんと部屋にこだまする。

たまごっち惣菜屋には売ってない

武 島 ちよえ

仲々手に入らないゲームだ。孫を喜ばそうと、卵コーナーをさがしまわる爺ちゃんがいるかも知れない。おかしきほほえましい。望郷の夢かきたる雁の群れ

岡 本久峰

極寒のシベリアの空、雁の群れが東へ飛んで行く。きつとオホーツク海を越えて祖国日本へ—と思うと頬を伝う涙も凍てつきます。ステップを冷ややかに見る同い年

安 食友子

流行の社交ダンスです。「フン何よ、あのステッパ」とやつかみの声が聞こえてきます。ちよつとねえ医者の暗示は恐ろしい

石 原靖巳

医者のことろない一言が病を生む。医源病と言ふ。常にプラス指向で話してほしい。汚されて泣いて吼える日本海

桎 谷 郁子

冬の日本海は猛々しく吼えている。重油に汚された海は泣き叫んでいるかに聞こえる。

三日目は流石に飽きる関東煮

中 橋 恵美子

妻は旅行中、今三日目のおでんを終えてこの稿執筆中。まるで我が家が覗かれたよつ。

本社 四月句会

四月七日(月)午後五時半

メンスファッションセンター

花の見頃は長雨にたたられた四月初めであったが、ようやく雨の上がった七日、本社句会は八十九名の参加により定刻開催された。先日亡くなった同人の野村静雄氏への黙祷から句会は始まる。

今月から投句復活し入選句数も多くなる。

お話は和歌山市の繁華街築地ブ拉克リ丁で大衆食堂を経営する福井桂香さん。91歳で亡くなった彼女の父は戦前この地で回転焼の店を持ち、自身のアイデアで時代に即した三勇士焼と命名、繁昌させた。

ひとりっ子の彼女は父を継いで食堂を経営、かやくうどんを人気メニューとする。客のたてこむピーク時は目の回る忙しさであるが、訪れる客には実にさまざまな職種があり、客からそれぞれの人生を垣間見る楽しさもある。東南アジアの客は焼そばに砂糖をふりかけ、又ある外国人からスパイスをと言われ胡椒を出したところがノー、スパイスとは酸っぱい

酔のことであつたと言う。若者から素つとんを、もとうどんと注文されたことなど会場を笑いの渦に巻き込んだの30分であつた。

月間賞は前たもつ氏(枚方市)に輝く。

(司会―隆盛)(記名―月子・弥生)

(受付―洋・弥生・いわゑ)

席題「下駄」 小西幹齊選

下駄箱で肩身が狭い下駄一つ
 天気になあれ下駄と楽しく遊んだ日
 下駄はいて遊びに行ける友がいる
 からころと下駄を鳴らして春が来た
 下駄履きが似合う隣のいふし銀
 助六の下駄が生きてる花舞台
 下駄を履く前に勝負はついていた
 玄関に赤い下駄もある通夜の客
 お祭りの地道を下駄が恋しがり
 下駄箱に桐下駄陽の目見ぬままに
 高い下駄履いた話が遠ざかる
 バンカラの下駄が響いたよき時代
 下駄でも履くか水虫の治るまで
 春雨か 利休の音を聞きわける
 アベックで潮に濡らした宿の下駄
 下駄の音やはり日本はよい所
 喝采の記憶を抱いて下駄ねむる
 母の下駄凍とやさしい音がする
 下駄二足はいてはりきる出世欲
 恋をした赤い鼻緒にある嫉妬
 何となく心安まる下駄の音

一步 みつ子 天笑 金太 久峰 狸村 美房 弥生 恭昌 笛生 東雲 石舟 度 武庫坊 笛生 露児 寿子 朝子 頂留子 岳人 ますみ

下駄脱いで石切さんの百度石
 下駄の音三步遅れてついでくる
 鬼太郎の下駄があらばれる永田町
 花魁の下駄に優越感がある

結果など下駄をはくまでわからない
 日和下駄 蛇の目の似合う母だった
 裏口をそとと抜け出す春の下駄
 預けられた下駄がいつでも裏返る

冒険も知ってる宿の下駄である
 影法師お前も下駄を履きたいか
 ひたむきに生きた老母の利休下駄

下駄履きで春を満喫する素足
 ときめきの子感をもらう朝の下駄
 うまいこと下駄をはかせる骨董品

先輩に下駄をあずけて寝てしまふ
 庭下駄が大事なことを知っている
 蛇の日傘下駄屋を探しあぐねてる

赤い鼻緒に女の念がよく絡む

軸

下駄箱をあけると見える子の未来

兼題「雑誌」 堀端三男選

生き残り賭ける雑誌のネタ探し
 一冊の雑誌と旅のローカル車
 見出しだけ一人歩きをする雑誌

立ち読みの雑誌で知った杜のピンチ
 人権と自由がせめぎ合う雑誌
 診察を待つ雑誌と小半日

グラビアのヌードで売れている雑誌

度

章久 大輪 楽生 美代子 頂留子 みつ子 いわゑ 大輪 昭子 諷云児 勇太 金太 朝子 狸村 希久子 しげお 悟郎 森子 幹齊 清史 幸生 良知 洋 美房 希久子 度

花便り満載季刊誌が重い

週刊誌見出しが財布開けさせる

奥さんの嫌がる雑誌ばかり買い

捨てる人拾う人あり週刊誌

雨続きのキヨスク雑誌売れ残り

雑誌からヒントを貰うこともある

私の句載った雑誌を持ち歩く

雑誌から抜き出す華やかなセンス

恥部ばかりあげばいて売れている雑誌

宣伝の割に中身の無い雑誌

雑誌にも自負あり裸載せません

たかが雑誌されど雑誌で得る知識

読み捨ての雑誌にもある自己主張

ばらばらと雑誌めくっている思案

留守番へ雑誌一さつ持つて出る

立ち読みの雑誌にヒントもらう朝

古雑誌高い値段で売れました

表紙とれた雑誌と歯医者で待たされる

ヌード誌を黙って女児で閉じる

網棚の雑誌にヒント教えられ

グラビアに明日の夕食載っている

雑誌園芸父を優雅にしてくれる

雑誌から拾ったネタで飲んでいる

話の輪外れないよう読む雑誌

訳あって雑誌車内へおいてくる

入院の妻へ届いた主婦の友

海外の旅は雑誌ですませとく

愛された二人を雑誌追っかける

英子

いつみ

天笑

保州

希久子

房子

千秀

森子

笛生

風云児

美房

千秀

昭子

いわゑ

保子

みつ子

満州

萬的

愛論

佳秋

みつ子

幹子

いつみ

庸佑

英子

重人

信子

弥生

佳

立読みの雑誌にヒント得て走る

有名でないから雑誌怖くない

紀伊国屋被せて車中の文庫本

潭海や少年倶楽部に夢の跡

千客万来旅の雑誌に載ってから

人

一足早い季節とどけている雑誌

地

六郎が表紙に生きている週刊誌

天

真空の街で雑誌がよく売れる

軸

良かれ悪しかれ雑誌に載れば全国区

兼題「乗る」

岩佐ダン吉選

息とめて体重計にそつと乗る

仮免許娘が横に乗れと言う

墜落の度に乗っている日本人

甘い誘いに乗ったタンポポの行方

玉乗りがうまくて群にかえれない

乗ってくる人だと知った詐欺の勘

一輪車乗って少女は春風に

こわごとと乗った馬が笑い出す

少し狂った方が時代に乗りやすい

こもこもの思いを乗せて流し難

その手には乗らぬ鈍行が性に合う

便乗値上げ息を殺して耐えている

いい話板前さんも乗ってくれ

シマ子

大輪

柳伸

射月芳

石舟

恵子

たもつ

鹿太

三男

良知

幸生

保州

森子

保子

文秋

房子

靖巳

勇太

澄子

シマ子

たもつ

紫香

口車に乗ったうかつを戒める

春おぼろ行方さだめぬバスに乗る

あほなこと言つても乗ってくれぬ人

追い風に乗るのは闇を抜けてから

夕夕乗りで政治が浄化出来すか

春風に乗ってうれしい旅行券

煽てには乗るが年金つまずしい

乗るよりも積まれていつも通勤車

どんくさい切符でいつも乗りおくれ

乗せられたらしい健康器具がふえ

乗りすぎる男と距離をおいている

鈍行に乗って駅へん春を追う

潮どきを見て乗りかえる切符持ち

八方美人が乗ればみんなが降りてくる

勝運に乗ると風まで味方する

流星に乗って亡母に逢いにゆく

少年を乗せてブランコ鳥になる

やさしさと乗ればいちめん花電車

5パーセント乗ってしまった乱気流

特措法 乗る気さらさら基地の町

春の風動き蜂が乗ってくる

何もかもなくせば泥舟だつて乗る

もつひとつ気乗りがしない回れ右

佳

鈍行に乗り換えてから暗れてくる

喧嘩には勝つたがバスに乗り遅れ

万策が尽きて虚しく雲に乗る

波乗りが下手でも父の真実味

公園のブランコ鍵っ子だけ残り

久峰

みつ子

天笑

幹子

鹿太

かすみ

一步

美房

いわゑ

寿美子

天笑

一風

石舟

しげお

風云児

いわゑ

美智子

森子

朝子

柳弘

悟郎

弥生

美代子

武庫坊

射月芳

悟郎

千秀

路児

人

リヤカーにはあちゃん乗せる野良婦り

正雄

地

乗るまでを母が見送る過疎の駅

笛生

天

荒馬に乗って男の貌になる

美代子

軸

核兵器ゼロの作戦ならば乗る

ダン吉

兼題「君」

阿萬萬的選

マザコンは君のやさしさだと思っ
走っても君に並べる距離でない
花散って無口に戻る君と僕

正子
照子
良知

君が代はどうあろうとも平和主義
君のことなら奥さんよりも知っている
君らしくないと背中をたたかれる

保州
天笑
稚代

朝やけへ歩幅のそろう君と僕
君だけと言われしんどくなってる
君死に給うことをなかれ粥を煮る

恵子
シマ子
落児

箱すしをはおぼる君を見ています
春が好き君との約束ならでできる
たこ焼きを君と食べてる戎橋

洞庵
稚代
鬼遊

オクタブ下げて本音を洩らす君
君からのななし半分きき流す
久し振りの笑顔にカンバイだ

月子
ダン吉
諷云児

多数派を歩むさみしい君がいる
絹よりも木綿のような君が好き
嘘のない君に世間は煙たがり

悟郎
大輪

警官の笛 君君と呼び止める

大輪

用件は君に逢いたいだけのこと
渡れない橋のむこうに君がいる
君の背の遠さを思いうちぎれ雲

保州
夕花
美智子

つつましい君に捧げるシヤガの花
ラバウルで死にそけたた君と僕
大阪弁で君の毒舌あたたかい

鹿太
寿美子
ますみ

君の眼に言うな言うなと諭される
どこまでも平行線に君がいる
あれ以来心に君の絵が残る

あやめ
希久子
美房

目の光る君の明日へ賭けてみる
君の絵の中で深呼吸ばかりする
棒グラフ君に言いたいことがある

夕花
重人
いつみ

後輩に君で呼ばれる宮仕え
君づけて指図女性の部長さん
君となら渡り切れそう川の幅

みつ子
金太
靖巳

君だけじゃないと言われた肩たたき
君の為などと殊勝な二枚舌
あの日から僕の磁石は君を指す

柳宏子
森洋
朝子

枯野まで君の影法師になろう
相乗り自転車みたい君と僕
君と僕 奥さん同士も仲が良い

紫香
千秀
和子

誤字脱字君の便りにある温み
どん底で握った君の手が温い
その先は聞くまい君の瞳が濡れる

和子
メ女
萬的

ふる里の夕焼け見た君と僕

萬的

兼題「うかれる」

川島 諷云児選

うかれすぎてはいないかと花が言う
海鳴りがうかれた私呼び戻す
鼻の差でうかれた犬が帰らない

幸生
アキ
恵子

もつ三日月うかれた犬が帰らない
花咲いてうかれたばかりいる鏡
政治屋も詐欺師もすこしうかれすぎ

保子
みつ子
幹齊

うかれてはおれぬ桜が散りそうだ
杉良と握手した掌を抱いて寝る
さくらさくらうかれて過去が疼き出す

金太
石舟
典子

浮かれ者ひとり目立つた蟻の列
あの頃はうかれてました若かった
空港へ向かううかれた足ばかり

グン吉
文秋
恵子

恋にうかれて帰って来ないウチの猫
駅裏でうかれる癖が付きました
ひとことが女をうきうきさせている

冬葉
寿美
恵子

桜散るまではうかれていいですか
嫁の優しさにうかれていいですか
うかれすぎた女の世話をさせられる

大輪
シマ子
洋

泣かれてもうかれすぎても困る酒
みんなうかれてるのに咳がとまらない
泣きたい日もヒエロうかれて笑わせる

昭子
章久
希久子

乾杯 乾杯 ライトアップの花の下
東西線できたきたと北新地
空っぽでうかれてみたい春うらら

昭子
かすみ
たもつ

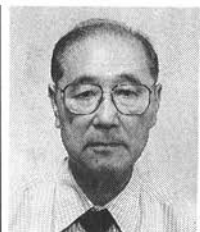
うかれてはならぬ眼の入ったダルマ
うかれると梅もさくらも散り急ぐ

金太
森子

うかれても本気で酔えぬ消費税
うかれてる証拠 釣銭貰わない
遺伝子がうかれおつちよこちよいになる
うかれ出た土竜も僕も花粉症
花の闇 裸おどりが透けてくる
花を活けると壺がうかれて困ります
響き合うものと奥底からうかれ
うかれうかれて仏に足を向けている
佳 弥生
うかれ過ぎる味方に梯子はすされる
うかれてもつかなくとも酒がいる
百万円もろたぐらいで浮かれるな
くもの巣のくも蝶のうかれを待つて
通天閣の下でうかれてる財布
人 幹齊
花の下人間らしくうかれよう
地 いわゑ
百歳になればうかれることにする
天 重人
逢いにゆく駅でステップ踏んでいる
軸 みつ子
これしきに酔うてうかれていた迂闊
兼題「証明」 橋高薫風選
足跡の証にする句と思えども
所得証明見せて娘の部屋借りる
生きてきた証 紅梅実を残す
年金証明だけが私という証
説明はいらぬ貴方が好きただけ
幸生
正子
アキ
保州
シマ子

嬉しさも半ば老人医療証
唇のホクロ証になった孤児
証明は買わず実力買い上げる
酸性雨ですと山の木枯れて見せ
紹介状をえて証明念を入れ
生きている証明腹が減ってくる
青春の証明いつもハングリ
階段を一気に上り証明す
証明なしでシルバー切符買える顔
人間の証明優しさにつきる
証明は城をバックに撮つてある
初対面の人に証明書を貰う
愛の証明同じお墓に入ります
丹精を証明してる花の色
免許証増やして嫁にいきそびれ
証明写真まじめなひたい光らせる
生きている証明一年予約する
でかい印押してインチキ証明書
証明に証明が要る人間不信
紙されて証明できぬ白い愛
生きている証明ゴミが出ています
わたしから証明されぬわたしです
証明を見せればアゴで通される
証明を貰う役所で叱られる
常がつねだから証明もらえない
一枚の証 命がかかっている
亡き後もよろしく火葬証明書
佳 生きている証明熱い湯が好きだ

靖巳
紫香
久峰
度
利武
昭子
石舟
美智子
武庫坊
ダン吉
大輪
富湖
あやめ
メ女
絹子
千歩
萬的
希久子
信子
昭子
佳秋
利武
美代子
頂留子
悟郎
保子
岳人
人間の証明として本を読む
証明書一枚人を落ちつかす
生きている証明 わたしも鳥も水を飲む
同じ刻を生きている証 夕桜
私より信用がある証明書
地 富湖
証明書なしで妻から借りる金
天 たもつ
土に還る 証明などはいりません
軸 薫風
証明書お辞儀の数をわびしがる
(清記-希久子)
NHKの文部大臣奨励賞
NHK学園川柳大会の最優秀作品に授与さ
れる平成8年度の文部大臣奨励賞は、山崎正
信氏(石川県)の「嫁ぐ娘の鏡の中に父がい
る」に決定した。
▼おことわり▲
■3月号P64上段(水煙抄) 渡邊伊津志氏
の3句目「チリメン雑魚の雄と雌とが気にか
かり」■4月号P65上段(水煙抄) 今岡貞
人氏の2句目「ああ余生つるべ落としに日
暮れる」▽P82上段(渺湖抄) 9行目の永田
曉風氏の句
以上をいずれも本人の申し出により削除い
たします。



川柳を愛した人

— 野村静雄さんを偲ぶ —

瀬戸 まさよ

もう悪いことは出来ない顔で寝る

田辺聖子著『川柳でんでん太鼓』に収められている野村静雄さんの句である。静雄さんは享年七十六歳で人生の幕を閉じられた。

借りていた命を返すさようなら 静雄

残念というより口惜しい。「ぼくは句を作るのに時間がかかるから……」といつも口にされていた。句材に対し推敲に推敲を重ねられたからであろう。静雄さんの句は誰にでもわかるやさしいことばで表現されている。そして読み手を納得させる。が、中身には独得の味と深味がある。学生の頃から川柳・俳句短歌などの本を読まっていた素養もあり、豊かな社会経験に尚且、戦争体験も加味された人生が、表現の幅を広げ、掘り下げる原動力になっているのだと思う。

十二月八日は知らずクリスマス 静雄
じわりじわり毒がまわって行く地球 〃
木から落ちてなんと男の弱いこと 〃

一杯の水が甘露の台所 静雄

昔から待たせる人を待つてみる 〃

孝行をして孝行をされず古い 〃

静雄さんは恬澹とした人である。柔道で鍛えた大柄な体で悠揚せまらずといった雰囲気漂わせていた。酒を愛した。雑談しているときも最後は落語的な落ちで、周りの人を楽しくさせるすべを心得ていた。十一年前、朝日カルチャー川柳教室を訪れた私は、その人柄と卓越した句作りに参ってしまい、川柳だけだけでなくいろいろのことを相談するようにになった。静雄さんはそのいろいろな的確な答えを出してくれる先生でもあった。私が句作りに意気消沈しているときも「いやあ、瀬戸さんの句、初めの頃より随分うまくなっているよ」静雄さんの言だから、ついつい乗せられてしまった私である。が、静雄さんは五、六年前から体調をくずされ、体力も衰えを見せるようになった。ずっと病院通いの日々であ

あったが川柳教室へは必ず出席された。少しい体が不自由になられてからは奥さま同伴で来られた。「うちの人、どうしても行くと行くと行きませんので……」川柳をこよなく愛した静雄さんの気持ちと奥さまにも通じていたのであろう。またカルチャーの親しい友人達も静雄さんの佳句を、このまま埋もれさせてしまつのは何としても残念であると話し合った結果、平成七年十月「朝日」にわ柳壇入選句私の百句」として上梓した。その間、資料をまとめ、静雄さんご夫妻と共に印刷屋へも足を運び相談したが、すべてお任せするとの了承のもとに実現したものである。

「野村はんほど遊ばんと、いい句はできまへんで」「静雄さんはお酒が大好きでしたなあ」親しい友人達の回想である。私は静雄さんから『江戸小咄大観』『醒睡笑』という貴重な本をいただいた。多分、静雄さんがこれから勉強するために求められたものであることが、ずっしりとした重さから感じとられた。献身的な奥さまに付添われた静雄さん、大正の佳き友人たちに囲まれた静雄さんは幸せな方であつたと思う。

静雄様どうぞ安らかに眠ってくださいませ。
平成九年三月十九日 寂
法名 賢修院孝悦日静居士



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

胸の奥始末におえぬけもの住む
油断することは作戦外のこと

油断といつも仲良く生きている私
走馬灯心の始末未だつかず

喜寿近い父が再婚匂わせる
古いものの始末私も古いのに

不始末の子のほころびを繕いぬ
子猫三匹始末を妻に頼まれる

優勝のご祈禱をしたタイガース
耐えて行こうやがて芽も出る春を待つ

想い出に始末出来ない物ばかり
口下手な妻が始末をつけにくい

重油始末こたつの中で見てるだけ
始末した物を探るに輪思ふ

後始末ばかりしているマネージャー
油浮く気の遠くなる後始末

剛治
ミツ子
道子
春江
幸枝
一風
隆盛
友甫
朝子
ますみ
幸子
トシエ
まさと
明子
けいこ
いつふみ
春江

城北川柳会

吐田

公一報

春の陽を受けて嬉しい合格日
落語会粉雪の舞う夜となる

除きたいものばかり増え老い深む
年明けてからと話もボケてくる

当落の運カタコトと絵馬に春
棺から指図したから仕切り癖

ロボットが未来を探る宇宙基地
ほとんどに伴奏の木を揺さぶろう

居酒屋の前を素通りできぬ癖
三寸の立離居間に春を呼ぶ

子の未来夢みてはげむ母心
ふところの鏡に納める裏の顔

筆跡の癖が決め手でうなだれる
産科棟未来背おった子が並び

笑ったりすねたり女の意地に負け
子の悩み聞いて下さい影法師

銀世界一際映える寒椿
わがままも適度に夫婦仲がよい

知佐子
美代子
民子
明
八寿子
鬼遊
佐津乃
美代子
登美子
あき子
静子
春蘭
睦子
史風
寿美子
一枝
あい子
久留美
とし子
高栄
昭子
扇帆
トヨ子
達子
八重
倫子

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

あつさり別れを決めたのは女
美女を描く絵の具は少し薄い目に

花の種絶やさず死ぬまでは女
もう泣かぬ女になったコンバクト

轢かれてるみたい車の修理工
みどり児の笑み治す気にさせてくれ

私のこころを治す本を読む
やり直す努力おんなは愛らしい

意地を張る癖が治らぬま老いに
聞こえないふりが理解の母の愛

理解できぬ今頃妻の変化球
欲の皮理解の顔と別だった

理解する気か父はだまって聞いている
待ちかねた花芽は春の戸を叩く

春の気配へやつと木の芽が喋りだす
何処からか岩の割れ目に可愛い芽

典子
朝子
千歩
白峰
あやめ
秀夫
政子
満津子
公一
森子
萬的
英一
とみ
春子
頂留子
夕花
柳伸
朝子
美幸
シマ子
恒明
ますみ
剛治
東雲
度

芽の出ない男公園掃いている
 かいわれはもういいかいと発芽する
 妻だけが理解者だった四面楚歌
 援助より理解が欲しい身障者
 少年の理解が三歩ほど速い
 理解して欲しい男の力瘤
 匂うよな十九の春よいま一度
 陽に干した父の作業衣火の匂い
 菜の花の匂う向こうは母の海
 耕せば春の匂いのわく大地

川柳ねやがわ

江口

半額の人気が受けた店じまい
 実力が後からついてくる人気
 吸い込まれそうはやつてる一ぱい屋
 改革へ狐狸妖怪が音頭とる
 引ききわも流石と思う人気者
 涙ぐむ女傑にあった暗い過去
 寂しそうな女傑の背中見せし
 噂とおりの女傑だった舌を巻く
 政党から誘いのかかってくる女傑
 婦長さん何があっても驚かず
 男だてらと女社長に叱咤され
 新築になっても僕の部屋がない
 新築だから拭いている床柱
 新築へ先祖の遺影長まる
 新築へ父の表札だけ黒い
 新築へ家訓もでんとお引越し
 新築の軒にツバメはもう来ない

たもつ 祥一 柳宏子 三男 欣之 いつふみ 賢子 隆盛 一風 度 英壬子 三郎 小路 仁清 頂留子 庸佑 時弘 度 かすみ 洋 博泉 冬葉 一途 とし子 権太 あやめ

太古から改革知らぬ蟻の列
 内部告発され改革の重い腰
 火の粉は覚悟改革を願ってる
 後手後手になる改革が口惜しい
 太陽の塔生き抜いて風も春
 こんなにうまくいくはずがない不安
 同窓会孫と持病のこと許り
 義理チョコも来なくなったと冬木立
 肩書きが無くなり好きな事を言う
 アイドル気分でみつ豆のサ克蘭ボ
 波風を立てたかいなと金婚日
 寒い世を梅一輪に癒やされる
 ワンカップぐらいいで脳に花が咲く

川柳塔打吹

米田

幸子報

お話が御馳走らしい老人会
 無表情な一本道がおそろしい
 スタートは六畳一間鍋と釜
 人間がスタートむきに出来ている
 お百度を踏んで彼女を妻にした
 長寿国支える子等の手が足らぬ
 向かい合う二人に言葉などいらぬ
 ときめいてスタート切ったはずだった
 向こうから手をさしのべる阿弥陀さん
 再スタート打吹桜も芽ぶく
 スタートの一步師の声母のこえ
 その時は貴男の杖になるつもり
 スタートはりやカー引いた名社長
 物忘れ誰もでうよと勞られ

たもつ 恵子 勇太朗 西 静江 亜成 光子 黎之助 一風 文秋 波留吉 高栄 朝子 節子 玲枝 和朗 弘朗 季芳 孝恵 勝見 玲坊 睦子 宗光 明美 美ツ千 帆雀 よしえ

彼女には忘れてならぬ思がある
 延命を支えるチューブなららん
 水と氣と天道さまに支えられ
 結束で打吹丸は支えられ
 危機いつ越える夫婦の支え合い
 スタートの靴へ重たいノルマ詰め
 向かい水差すと五体がよく弾む

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

忌があけてなお佗助の無言なり
 二月堂造花の椿法要する
 椿散る振り時計が時を打つ
 育児休業男隠せず取る時代
 男とや妻のベースに乗せられる
 剃りあとの青き寒行僧泣える

澄子 正子 武庫坊 向涉 年代

佳句地十選

(4月号から)

道

輪を抜けて自分のいろをたしかめる
 轍には父の迷った跡がある
 紅引いて女は鬼を棲まわせる
 門柱に男の貌が彫つてある
 ところと弱火で煮込む嘘ひとつ
 迷いから抜けるコインを投げてみる
 立て板の水にころりと騙される
 真ん中で雄しべ一つを守り抜く
 黒髪の一筋凍る白い街
 核心にふれると重くなる荷物

凡子 たもつ 精子 友照 風云児 隆盛 浪速子 シマ子 岳人 美ツ千

跡継ぎの出来が良すぎて過疎となり
立止りいまたこの道振返る
しゃべくりが止まらぬ我に妻サイン
この辺で止めて友情温め合っ
止めどない話が続く午後のお茶
止めるのは誠意肩持つ訳でない
春風の内緒聞き度く立ち止る
八合目で止る勇気のある男
信号の赤い殺意に立ち止る
赤い靴買っ妹の恋を知る
タテマエと本音が軋む角のポスト
疑問符を解くマニアルは慣れてから
神の手のようにさし出す白い杖
滝の音を聞いているように芭蕉の碑
七階でフリータイムの春の夢
シャボン玉割れる命を追いかける
つきはぎの脳 菜の花の物狂い
まささらな朝と祭りを掃いている
独り居の貧しき夕餉冷えきって
小ぢやな子夢一杯のクレヨン画
あの山を越えては今日この宿がある
決心をしてみればかたて茶をつがれ
登校の子が一人待つ向う岸
ピアノ止むうつらうつらと立春の卵

サークル樺櫨

小林

一夫報

昭三 ハツエ 吉太郎 十四郎 すみ 歌子 まさお 弘治 比呂志 とみ子 義芳 正治 久子 杜的 伊三郎 紫香 美子 千恵 一笛 夢之助 白溪子 芳子

いつか昔が生えてしまったばかりの祈り
ささの世の人なつかしき照葉樹林
石仏 カラスの相手して笑っ

一夫 薫 みつ子

春の音がし福耳揺れている
迎合などする気はないが待つてみる
草餅を食べれば春のゆとりかな
存在感のある菜の花の黄色
待ち侘びて春を迎えに旅に出る
爪先まで女でいたし梅の中
ザクザクザク軍靴の響き二・二六
京都塔の会 松川 杜的報

喜美子 房子 あずき 希久子 雅子 智恵子 正坊 正坊 英子 女子 求芽 武庫坊 三男 紫香 美穂 柳宏子 石舟 醉虎 杜的 圭坊 京子 萬的 欣之 葉子

城築く夢と屋台を押している
嬉しさは二人の愛で築く城
信用を築いた父の丸い背な
面影は軍歌と共に消えた人
面影は今も未決の箱の中
面影へ真つすぐ切手貼っておく
面影も私の傷も消えかかる
面影が赤いポストと夕暮れる
面影を絵にする淡い彩を溶く
憎いはずの面影がまだ胸に棲む
川柳歌きやらばく 政岡日枝子報

晴生 達子 和子 福子 しの 友照 百合子 風云児 保子 八重子 美世 花子 天雀 千春 瑞枝 なみ 寿々子 春枝 玲子 亜弥 朗子 日枝子

捨て金と覚悟をしてたはずなのに
わからぬまま捨て印ここと押さされる

昭子
久子

サインなし阿吽の呼吸分る仲

喜美子
よし

この辺で手を打てと妻からサイン

保子

一途さに押されて出したゴーサイン

桂子

赤ちゃんのサインしつかり受けるママ

吉太郎

生き生きと少女はモラル破壊する

馬洗

生き生きと人間詠んだ一行詩

善守

生き生きと齢を忘れて旅の夜

散子

生き生きと寡婦三人の空の旅

まみ子

ストレスの顔生き生きと竿磨く

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

第一席 棚田を撮ったカメラアイ

道胤

棚を吊る気力もなしに住む仮設

佳秋

三代の栄枯見ていた違い棚

曙蝶

歳月や記憶の中の白い川

たず子

河童も言うわかし川は青かった

義子

悪童のしくさくわしい師の記憶

武庫坊

記憶にはなかった亡父の笑い声

芳子

あたたかい記憶 子が居た母が居た

みつ子

ストローが甘い記憶の麦畑

香子

愛された記憶を流す冬の川

磔

記憶のなかに凍えたような恋がある

富喜子

折れ刻を母の静かな目が諭す

鹿太

花つけたばかりに雑草手折られる

正坊

ぎんなん三つ刺す懐石の折松葉

絹子

紅椿手折りたくなる備前壺

トミエ

週刊誌変なトコロが折つてある

杜的

折り畳み傘で包んだ淡い恋

石舟

セロリ折る指に春の香緑の香

哲子

雛の目の澄んでいるさへ飽きる日よ

はつ絵

飽きるほどお金使ったことがない

能子

親に似てすぐ飛びついてすぐ飽きる

柳宏子

愛される形に妻が飽いて来る

晴美

独学の芸は他人に教えない

白漢子

妥協案出そうで酒の用意する

萬的

河口まで来てせせらぎは春になる

求芽

人間だもの人の噂を聞きながら

江美

三人の中にもいつも恋敵

しげお

この線で行こうと主治医慌てない

てる

飽き性の男へ効かず練りわさび

諷云児

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

本職は主婦業ですと胸を張り

ちよえ

玄関に人待ち顔のクンシ蘭

英子

死ぬるまで本職もてぬやじろべえ

はるみ

古着から素敵なファッションでかき

鈴江

本職は女中か主婦か重役か

かつ子

リサイクルきれいな紙が拗ねている

聖子

リサイクルママのお古がリッチです

好栄

リサイクル地球汚すな木を切るな

博利

方向音痴事故を通れたゆきちがい

清泉

本職は無と書いてるが食べている

白汀

表道しか歩けないきやしやな靴

あずき

表門框の母が今通る

田実子

淡雪の許し合うのはもう近い

慶子

花びら餅たべるにおいしい淡い紅

香住

表からどうぞワイロは匂わない

能子

淡白な人で人間味に欠ける

欣史子

表沙汰にさせぬお金という力

弘直

淡墨の忍の一字は母の筆

シマ子

付けの効く飲み屋に梯子かけておく

清芳

顔見たら積もる話が出て来ない

大輪

舞台裏熱気の冷めた面一つ

輝子

妻不在で只ことでない走り書き

忠翁

段梯子見守る妻に励まされ

柳宏子

久し振り縁は異なるものの味なもの

二南

無意識に渾名飛び出す久しぶり

三男

コーヒーで済ませただけの久しぶり

正博

能面にきりと父の立ち姿

白光子

頂上で脱いだ仮面に血の匂い

利治

悲しみを隠し通した面がある

紫香

面一本いつも妻には取られます

金太

喜怒哀楽の面が揃っている

栄美子

裏側には案外く鬼の面

公子

面構え好きで捨て猫抱いて来る

稚代

走り過ぎたつがが回って来たバブル

萬代

人走る僕もつられてつい走る

淳太郎

亡命へ電波地球をかけめぐる

賢二

ビリ走る我が子に愛のVサイン

育子

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

走り書きのメモへ何やら胸さわぎ
走り出す電車へ母が点になる
走らねば過去にもとされそうになる
走らせた日をいとおしむ二人旅
走らねば取り残されるから走る
どんだ底で情けのはしごおろされる
天国の亡母に会いたく継ぐはしご
憧れの花にはしごが届かない
気がつけばはしご母さんだけが持ち
子が登るはしごせつせと高くする
幸せを築いたはしごはずさない
はしごの先にまだ眠ってる夢がある

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

母性愛いつもぬくぬく子を含む
母性悲話戦の庭に消えたまま
すばらしい母性だいのち生む力
ボケちゃってお金の味がわからない
元気かな何を食べても味がよい
どうしても実家の味が困る
父の背に淡茶の味がただよって
ふたありになってほんとの味になる
観光の町に煙が春告げる
野焼きする父の煙が春を呼ぶ
お役所の方から黒い煙立つ
湯けむりに超しあわせの首が浮く
いのちの火やがて大きく煙りだす
ああ無常のべの煙は待ったなし
地に還る煙が音もなく揺れる

紀久子 佐代子 美羽 富美子 英子 和重 呑天 射月芳 ダン吉 富湖 誠子 寿子 八重子 智恵子 くに子 菊乃 久枝 かつ乃 富久江 和子 野草 富恵 喜与志 弘子 茂 隆風 宣子

初恋の別れ七十の胸に住み
完結編書けば別れが待っている
筋書きの通りに別れやってきた
ひよこりと別れた人に会う夜汽車
別れ泣き門出に笑う子等の春
お地蔵さんをきれいに洗っての別れ
裏側の自分と別れたくなった
別れぎわに首いっぱんを引きちぎる
三月の別れは胸をふくらます
住専と厚生省をつつく鍋
お金さえあればやさしい顔になる
朗々とつたう卒寿の薄化粧
会う毎に形見をくれる叔父なりき
七十のカーブどつこい風邪をひく
大声を出そうわたしは生きている

三幸川柳教室

三宅

保州報

寂しさを置きかえているジャズ喫茶
前置きの長い話でよを見る
母となりくらしにいつも亡母を置く
病院で置き物のご待たされる
目ん玉が飛び出しそうな置き手紙
辞書置いてカタカナ文字と苦闘する
杯置いてじわり本音に触れてくる
一目を置かれた椅子が孤立する
陰陽の程よい位置で身をゆだね
どんだ底に身を置いて日もある指輪
位置換えてみれば視界が広がる
立場置きかえて痛みを分かちあう

房子 三子代 節子 きみえ はるお 盛桜 諷人 実満 明美 次男 睦子 武子 きみ子 孔美子 美智子 美子 貞子 よし子 正嗣 初子 鉄治 鉄子 孝子 靖子 嘉平 公子

座右に置く手塚治虫もバイブルも
置き場所に困る私の自尊心
定位置で喜怒哀楽を呑むポスト
マネキンのようにはいかぬ試着室
一夜十し姿のままで縄に揺れ
賽銭を受取る姿見せぬ神
子に見せる姿勢楷書が崩せない
貫いた姿勢は冬の山に似る
猿の檻君の姿は僕らしい
振り向かぬ後ろ姿にある決意
土壇場になれば仮面を脱ぐ姿
姿勢変えねば日本丸が座礁する
カウンターで人間模様みるポトル
懸命な姿に打たれ折れまじした
低姿勢で生きる私に顔がない
善人にみえるカジュアルフライデー
寸歩不離絵になるような影法師
何人も拒みはしない結跏趺坐

溝口川柳会

小西

雄々報

春光を障子に受けて気も騒ぐ
障子張り気分新たな春迎え
張り替えた障子は客を待っている
咳払いしながら障子開ける癖
張り替えた障子に映える初日の出
さっぱりと気分転換障子はる
温泉へ雪見障子で酒を酌む
手すき和紙障子に張って客を待つ
十五夜が障子に映える春夜かな

朱夏 碧 千秀 当代 健三郎 正一 百合子 町子 和子 昭枝 登美代 桂香 三千子 敏子 親路 章子 さち子 保州 久子 康女 智恵子 正光 豊枝 鈴枝 弘子 静江 信敬

鶯の初音を障子越しに聞く

雄々

川柳大版

坊農 柳弘報

スマートになつたら性格かわりそう

須賀夫

スマートな過去の貴女にたまされた

信醉

悪ガキで未だ楽しく生きてます

吟笑

楽しいの貴男と過ごすこの時間

多香

スマートに女死んでも諦めぬ

喜楽

孫の句に俺の素質を垣間見る

河南子

楽しみは買つて夢見る宝くじ

雅果

スマートに生きたい余生無理もする

美すゞ

スマートは私の中ではとうに死語

かよこ

楽しいな今日は年金振込み日

洛醉

花の舞スマートな風の贈り物

柳昌

スマートさがない心が温かい

美花

自分史をゆつくりたどる姫だるま

良花

三味の音に楽しい酒が踊りだす

鉄心

詮索はすまいスマートになった訳

金太

無駄はなし出来て女の楽しい眼

笑風

名刺をゆつくり歩く老夫婦

重人

愚痴を聴くそれも楽しい縄のれん

柳弘

高槻川柳サークル卯の花 川島飄云児報

タンポポの花芯は世間知らぬ色

萬的

色街の意地を知つて帯の芯

芳子

年金暮し芯まで冷える低金利

秀夫

ダイエツト出来たら脱皮するつもり

かおり

鏡見ても一度脱皮しなくなる

猥杏

脱皮して世間見る目がまた変わる

庸佑

少年の脱皮一途に野を駆けける

静江

たつぷりと辛子きかした春のトースト

稲子

母の味たつぷり盛つた一膳屋

一笛

飯場暮しひどい説りもあつたかい

よ志子

消費税五パーセントはチトひどい

あきら

ひといこと言う友だだけど温かい

高栄

ライバルのえくぼ味方にしたくなる

艶子

停車駅ないまま走る父の貨車

英一

女絵馬雪にほろほろ悲をこぼす

恵美子

句読点の位置を違つたまま冬に

しげお

訂正をするなら遺言今のうち

杜的

眠りそびれては聞く鬼の足音

燕

夫婦箸ひとりの怖さやるせなさ

重人

南大阪川柳会

寺井 東雲報

かつおだし一途にまもっている老舗

萬的

風向きを意外と知らぬ風見鶏

千里

裏切りが信じられない夕茜

寿美

髭部長意外と心温い人

志華子

一途に尽す嫁に姑折れてきた

真砂

無印が先頭走るゴール前

直子

雑草の強さへ自立意識する

朝子

ボー捨てに罪の意識は少しある

文秋

回りの目意識しすぎて萎縮する

庸佑

まっすぐに生きてエンマは威張りたい

頂留子

恋一途ええ年をきて狂い出す

柳宏子

艶子

英一

恵美子

しげお

杜的

燕

重人

萬的

千里

寿美

志華子

真砂

直子

朝子

文秋

庸佑

頂留子

柳宏子

ダン吉

東雲

恒明

秋子

度

咲

正博

哲郎

たもつ

艶子

英一

恵美子

しげお

杜的

燕

重人

萬的

千里

寿美

志華子

真砂

直子

朝子

文秋

庸佑

頂留子

柳宏子

ダン吉

東雲

恒明

秋子

度

咲

正博

哲郎

たもつ

道草が意外な人と鉢合せ

無意識の寝言じんわり責めてくる
埋もれ火の恋は意外な時に燃え
家柄にうるさい伯母がひとり居る
威張っても死ねば小さな壺の中
意識すりやすほどの動き出し
威張っても後ろ姿がわびしすぎ
大柄も意外と小さい心持つ
風化する墓石に家柄うかがわれ
入学の背中で威張るランドセル

岸和田川柳会

田中

文時報

肩書きだけで矢面に立たされる
矢面の妻の挨拶聞かされる
矢面に立つて後ろも攻められる
舞踏会優雅に踊る老い二人
ひとり身で優雅に暮らし立つ噂
老妻を見直す優雅な舞扇
優雅とは言えぬが酒も飲んでいる
ひとり身の優雅ですとやせがまん
年金者そつと優雅に暮してゐる
いい湯だは庶民の優雅他愛ない
その微笑優雅におわす伎芸天
おにぎりとの山陽氣を探し行く
戯れて孫と時そばお小遣い
暖かい陽氣だ巣箱から出よう
三合で陽氣にやれと言われても
野仏の背中陽氣がはねている
サザエさん好きで陽氣な妻である

悟郎 柳伸 章久 三男 公一 三恵子 久子 ハル子 勝美 市子

貧しくも陽氣な妻が居てくれる
落語家の妻生真面目はつとまらぬ
自慢の子落語のネタに似て困る
バスガイド落語まがいのオチを付け
落語家が入力して羽織脱ぎ
型破り枝雀の芸に湧く笑い
春団治のレコード溝がすり切れて
も一人の私が利口振っている
利口だと言われお高いとも言われ
お利口ね太鼓叩いて客を呼ぶ
受験場右も左も利口そつ
土壇場で妻の利口に助けられ
利口そつでなにか抜けてるお母さん

川柳東大阪

森下

愛論報

柳宏子 苑子 一齋 呂万 鹿太郎 富志子 白光子 美羽 文時 東雲 さよ子 洞庵 狸村 晋吾 朝子 弘直 みどり 雅文 東雲 たもつ 柳伸 治也 賢子 愛論 太郎 ばつは

苦も楽も無事に乗り切る凡夫婦
無事に今日過ごせた事をまず感謝
老母独り過疎に残して無事祈る
陰膳の向こうにひとつの無事思つ

竹原川柳会 時広 一路報

北海道の雪は天使の涙かも
寒くても今の私は負けません
献金をしたら仲間にしてやろう
母系家族で輪に入れないお父さん
団結を誓った仲間もう居ない
生き甲斐を魚拓にかえて釣り仲間
策のない私こたつで丸くなる
雪の日のお地蔵様の和やかな
銀世界思ひ出深き寒椿
ニッポン列島寒波で足がすぐ乱れ
風邪もよしゆつくり休養出来ました
打ち寄せる重油寒いと言つとれず
背をピンと伸ばして寒い朝の靴
ホッカイロ負けるな二月の受験生
寒いとは言えぬ二浪の子を思ふ
寒行のうちわ太鼓よ春を呼ぶ
凍てついた街人情のあたたかさ
手作業で重油汲み取る寒い景
帰り道ふとした事故に福の神
よく笑つ母さんうちの福の神
福耳をさげて施設へたどりつきの
のこり福でもいい握手拒まない
福祉の火次々細くなる不安

真柳 文秋 柳宏子 湖風 高史子 三千枝 蘭幸 静佳 節夫 菁居 比呂子 淑子 孝江 夏喜 汎美 笹舟 栄恵 千代美 蝸牛 貞子 静風 喜久恵 明子 喜美子 一枝 末子

福の神望まないから来てくれる
幸福は夫婦茶碗で食べたころ
福袋男だてらと言うなかれ
これも福なのか元氣な万歩計

ふくべ川柳会

橋本多哥由報

縁遠い娘が男らしく成る
チョコレート貴方へ上げる甘いワナ
本命の人にはチョコをあけてない
春の乱妻が包丁研ぎはじめ
闘牛の血が流れてる悪女です
還暦のうしゅつたりと紅を引く
義理チョコもめつり減つて忘れられ
チョコレートない者同士肩をよせ
遠縁をたぐりよせては選挙する
白鷺も雪に溶かして池眠る
チョコレート山ほどらい胃が痛む
病魔之母の笑顔が光り出す
チョコレートそつと隠してくれた女
丑の刻伝言板は眠れない

川柳岩出

児島与呂志報

節分へ豆の数だけ生きた自負
孫の顔見ればついつい甘くなり
甘すぎた捻子締め直す子の嫉
患者食病魔を追えと煎豆をつけ
包容力甘さ辛さをたくわえる
不況風甘い言葉で釣りに来る
時重ね甘さからさを知る二人

清水 房子 笑子 一路

和歌子 一夫 ひろ子 帆雀 明美 美恵子 信子 昭恵 寛子 春恵 なつ江 輪多朗 多哥由

精子 昌子 愛子 良一 和子 綾子 悦男

甘い誘いやつぱりあつた落とし穴
行き先をなくした豆が床を這い
福は内大きな声で春を呼ぶ
甘すぎて消えてしまったかくし味
鬼は外老いて今では鬼は内
すぐ飴で釣るのはよそう子の未来
人の旅甘辛混ぜてまっしぐら
福は内鬼を追いつ出し円満に
節分に重ねた年を振り返る
節分の鬼もいなくなり福も留守
ぜんざいはさと屋の店で立ち直り

大原川柳社

矢内寿恵子報

お洒落して騙されるのか騙すのか
二つ目の山のあたりで妥協する
ドラマより洒落た恋です秘密です
元氣旺盛もて余してる冬こもり
食だけは旺盛家族もて余し
旺盛な方で子宝めくまれます
旺盛な時代もあつた老父の背な
旺盛に負けて尻尾を巻いている
旺盛が売りものだった粗大ごみ
意氣旺盛背筋が一本伸びている
旺盛な好奇心あり女の目
旺盛に食べグエイットなど知らぬ
旺盛な商魂捨てぬ父も年
仮面脱ぐ父にふたつの顔がある
均等に旺盛育てた子が背く
旺盛な人です話分かる人

智恵子 千鶴子 保子 幸子 哲雄 アサ 英子 たねえ ふみえ 重徳 与呂志

和子 あすなろ ひでの たづ子 朝代 美佐子 みさえ 玉恵 辰江 さちこ あやこ やすこ みづえ 妻子 悦子 たけよ

合格の二字がほしさに神参り
筋金入りまだ旺盛な呑みっぷり
ありつたけ並べお洒落の旅支度
旺盛な産声天下取ることし
食欲旺盛天国行きはまだ遠い
充電も効かないお洒落でもしよう
洒落つ気も色気も忘れ呆けはじめ
旺盛な詩魂に余生支えられ

岩美川柳会

羽津川公乃報

地獄の鬼にこれから年始酒おくる
集金にこれから行くか怒鳴られる
これからの運を占う暦繰る
入試パスこれから先は遊べるぞ
これからは三本の矢を見習おう
これからは道草もよし八十路坂
これからは持ち味を出す正念場
本当の勝負これからだと諭す
これからは心配したら禿げてきた
これからは神様だけが知つて居る
これからは金庫破りの本番だ
これからは日ごと地獄に近くなる
これからは恥の上塗りして生きる
これからの地図へ私の彩を足す
これからの福祉長寿をもてあます
これからは佳い事がある死なれない

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

巴子 敏子 すみえ 正己 こふゆ 喜美子 幸子 寿恵子 多哥由 一夫 希久代 節子 和歌子 明美 芳江 孝男 蟹郎 単車 帆雀 大漁 公乃 美恵子 忠良 螢

うっかりと出たひとことでますい今日

美恵子

年取りてひまもてあます昨日今日
尻餅をついてきよろきよろまし顔
朝冷えに老いを勞わりおしん見る
紅少し濃くして晴れの吟舞台
客に來た心地短いデイサービス
内緒ではすまされぬ孫の金遣い
壊れても結びなれぬ恋もある
夢壊れな青山に歩を進め
何げない言葉友情壊される
安らぎは二人で語る老いの日々
年老いた我に生き甲斐孫がくれ
ゆずられた席で安らぐ凡夫婦
祝われて小さく座る床柱
連れ添った五十四年の幕を引く
安らかに逝ける老後を神頼み
転動へ夢のこわれた寒い風

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

皆さんの温い情けに救われる
世の中に笑いが欲しい昨日今日
火加減は妻にも秘めた登り窯
アレコレと生きてる証欲も出る
辻褄が合わずに困る村雀
ダイエットグラムで瘦せて疋で増え
年金の話が弾む歳となり
猿知恵に劣るブルーのテロの罟
縄ノレン男の愚痴を聞き流す
生きてきて感情が分かる丸い人
肩叩く孫の駄賃が高つく

知世 智恵子 秀香 富士野 吟平 善代 光水 旭泉 伊久栄 久子 志重 すみれ 樂山 禅心 亜矢

肝心な時に眠っていた鯨
知恵の輪がとけて眠りが深くなる
むつかしい話になると眠くなる
子の傷に逢のありか思い出し
若く見えると言うが鏡はそれなりに
冬の朝眠気と格闘身も震う
ロシア様油攻めとはこ無体な

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

面会謝絶に一礼して戻る
恋思いカルテも迷うこけしの目
病室を抜けた同士が赤ちようちん
患者から医者が不養生論される
一枚のカルテに深い森がある
病名を教えて欲しい欲しくない
発表日 郵便受けの前にいる
お守りを入れて出掛けの初舞台
ひよとしてスピーチが回って来る予感
栄転の話そわそわさせて消え
娘の華燭まだ落ちつかぬ父の席
反論をされることばで恥忘れ
恥線に触れることばで恥忘れ
恥辱と雪辱のどでかみあい
恥をかきながら仕上げた夫婦の絵
整形の美女がそわそわするお産
水面下の賄賂に剥けてくる名譽
いつ来ても電話をかけている患者
癌告知しなされ覚悟できている

かおり ひかり はつ恵 チカエ 治延 なみ子 坊太郎 雅城 花匠 ふさえ 生恵子 アサ 隼人 隆樹 井蛙 哲郎 龍人 北歩 銀波 柳々 しげる 順三 黙人 一花 花峯 叶 五楽庵

翠洋会

藤井

正雄報

大陸の赤い夕陽に燃えた春
四苦八苦覚えた歌が先越され
ダンヒルを吸う指の線意識する
繋いで切れたまたつなく赤い糸
戦線で拾った命長らえる
四苦八苦知っていたのは長女だけ
少し線引いて仲良し嫁姑
もう一度頭を打てばわかるだら
線描きの自画像という外も雨
赤ちゃんが根性見せる初歩き
打ちつづけひびかぬ夫婦また夫婦
孫が撒く豆に打たれて鬼もよし
計れない余命にプランふえる春
一線をひくと私が落ちこぼれ
平手打ち母も泣いてる反抗期
三面鏡四苦八苦して化けたとて
直線の愛受け止める広い胸
情炎のはむらで尽きるのも速い
打ち返す波が昔をつれてくる
政治不振熱い視線を送る民
赤い服好きで低温火傷する
若がついてくるタレントの赤い爪
味方から気付かぬうちに謀られる
屋根赤く塗って太郎の絵ができる
四苦八苦母は苦勞と思わない
打開策のり出して来たお母さん
倦怠期キリトリ線が浮いてくる

久峰 周信 英子 照子 綾子 義経 絹子 春子 澄子 宣子 蕉子 叡子 ひろ子 蛙 真砂 志華子 石舟 さと美 正雄 東雲 希久子 光子 佳秋 みつ子 正坊 恭昌 鬼遊

はびきの市民川柳会

榎本

吐来報

きつちりと量つて母の味に負け

馬鹿になる芸が出来ずに利口ぶる

つましく生きてアイロン掛けが好き

現況届済ませて喜寿の年明けける

寝たきりになつても伸びる爪を切る

心から笑える日々のある余生

生かされて宝と思つ命です

真つ直ぐの帰宅が惜しい迎え傘

衣替え春を迎える顔になる

母さんのメモで迎えるランドセル

新人を迎える鬼の目が光る

何となくはしゃぎたくなる妻の留守

はしゃいで女は家を忘れない

待ちきれずはしゃぎだしてる春の森

はしゃいででも喝采のない一人部屋

冬の空もうさばりと忘れよう

さっぱりとした人だった星仰ぐ

海に出てあつさり彼を許せそう

魚にはさっぱり分からぬ黒い海

散るときのセリフは一つありがとう

柔順なポーズの裏で妻の乱

ポーズまで取らせて写真くれぬ人

茶目つ子のポーズ笑わす春の庭

倉吉川柳会

谷口

役のくるうちが花だとおだてられ

役職で外国旅行はね伸ばす

表には見えぬが二重底の役

農業の機械老人役立たず

お江戸でも木ッ葉役人いばつてた

姑役来けた芝居も巧くなる

女役すてて馬上で生首を

役どころ揃んだはずが当て外れ

十両玉はネコよりも役に立つ

橋渡しの役だと札の束が言う

産卵の役目はたした蛙あわれ

猛犬有り札が一役買つてゐる

さびた釘役に立つてた時もある

拭き掃除風呂焚きもした名役者

転がった舞台の壊れ役所

口ぐせは役が多くて忙しい

絢子

辰子

さとみ

次男報

ちよ子

一夫

玲子

小生

苦句

瑞枝

和歌子

山康

完司

かつみ

御前

節子

智子

帆雀

荒介

よしえ

天雀

厄介なお荷物だけが残される

富柳会

池

満たされぬ心が父の樹をゆする

生きる事亡母の心の痛み知る

前ばかり見ていて気付かなかった愛

何時までも嫁に行かないおひなさま

痛いねと手を貸したいが寒の入り

相性の悪い器に花を活け

月満ちて無限を秘める呱呱の声

母の字で小包届く春の味

独り寝は痛み分け合う相手がない

無農薬で満腹にする愛がある

大人びた少年謎をはらんでる

満艦飾母さん今日はPTA

本当の痛さに耐えている無口

幾度か戦に耐えたひなの顔

ネガを透かせばひそかに過去が満ちてる

夢買いにゆく少年の影法師

痛いほどわかるが上へはすねて見せ

立志伝少年の瞳は輝けり

幸子

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

欣之

岳人

森子

トシェ

森子報

池

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

欣之

岳人

森子

富柳会

池

満たされぬ心が父の樹をゆする

生きる事亡母の心の痛み知る

前ばかり見ていて気付かなかった愛

何時までも嫁に行かないおひなさま

痛いねと手を貸したいが寒の入り

相性の悪い器に花を活け

月満ちて無限を秘める呱呱の声

母の字で小包届く春の味

独り寝は痛み分け合う相手がない

無農薬で満腹にする愛がある

大人びた少年謎をはらんでる

満艦飾母さん今日はPTA

本当の痛さに耐えている無口

幾度か戦に耐えたひなの顔

ネガを透かせばひそかに過去が満ちてる

夢買いにゆく少年の影法師

痛いほどわかるが上へはすねて見せ

立志伝少年の瞳は輝けり

満願の肩から抜けていく空気

幸子

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

欣之

岳人

森子

トシェ

富柳会

池

満たされぬ心が父の樹をゆする

生きる事亡母の心の痛み知る

前ばかり見ていて気付かなかった愛

何時までも嫁に行かないおひなさま

痛いねと手を貸したいが寒の入り

相性の悪い器に花を活け

月満ちて無限を秘める呱呱の声

母の字で小包届く春の味

独り寝は痛み分け合う相手がない

無農薬で満腹にする愛がある

大人びた少年謎をはらんでる

満艦飾母さん今日はPTA

本当の痛さに耐えている無口

幾度か戦に耐えたひなの顔

ネガを透かせばひそかに過去が満ちてる

夢買いにゆく少年の影法師

痛いほどわかるが上へはすねて見せ

立志伝少年の瞳は輝けり

満願の肩から抜けていく空気

幸子

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

欣之

岳人

森子

トシェ

富柳会

池

満たされぬ心が父の樹をゆする

生きる事亡母の心の痛み知る

前ばかり見ていて気付かなかった愛

何時までも嫁に行かないおひなさま

痛いねと手を貸したいが寒の入り

相性の悪い器に花を活け

月満ちて無限を秘める呱呱の声

母の字で小包届く春の味

独り寝は痛み分け合う相手がない

無農薬で満腹にする愛がある

大人びた少年謎をはらんでる

満艦飾母さん今日はPTA

本当の痛さに耐えている無口

幾度か戦に耐えたひなの顔

ネガを透かせばひそかに過去が満ちてる

夢買いにゆく少年の影法師

痛いほどわかるが上へはすねて見せ

立志伝少年の瞳は輝けり

満願の肩から抜けていく空気

幸子

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

欣之

岳人

森子

トシェ

富柳会

池

満たされぬ心が父の樹をゆする

生きる事亡母の心の痛み知る

前ばかり見ていて気付かなかった愛

何時までも嫁に行かないおひなさま

痛いねと手を貸したいが寒の入り

相性の悪い器に花を活け

月満ちて無限を秘める呱呱の声

母の字で小包届く春の味

独り寝は痛み分け合う相手がない

無農薬で満腹にする愛がある

大人びた少年謎をはらんでる

満艦飾母さん今日はPTA

本当の痛さに耐えている無口

幾度か戦に耐えたひなの顔

ネガを透かせばひそかに過去が満ちてる

夢買いにゆく少年の影法師

痛いほどわかるが上へはすねて見せ

立志伝少年の瞳は輝けり

満願の肩から抜けていく空気

幸子

緞歌

文子

勝子

とも子

久則

紅紫朗

鐘造

昭水

二三子

アキ

冬虹

昭子

悦子

美代子

花梢

智久

消しゴムで消せる嘘つく四月馬鹿
 自画像に消えない罪の二つ三つ
 表札に巣立った子等の名が残り
 みな消えて鬼も帰ったかくれんぼ
 お水取り消える火の粉を手で掴む
 居眠りがテレビを消す目を覚ます
 砂浜の愛の一字はすぐ消える
 右左ないソックスにある自由
 校則をルーズソックス認めさせ
 新柄の靴下足を組んでみる
 ソックスの白が眩しい清純派
 靴下も女もはつれやすいもの
 靴下は昔びつたり今ルーズ
 ピチピチのルーズソックス街に群れ
 靴下に幼い夢のクリスマス
 蘭玉を繰る手に熱い期待あり
 目をして胸はずませて燃える紅
 ランドセル期待を詰めて踊ってる
 満点は取らぬが温い子に賭ける
 あきらめた夢を再び孫にかけ
 子に抱いた期待を孫に移し替え
 誘惑を予期して歩く羽化の蝶
 茶柱へいい一日の朝が出る
 優勝が決るまで鯛泳がされ

川柳塔おとり

上田

俊路報

省子 羊子 智恵子 サト子 マサ子 和可 政勝 見早子 潮華 あらた 良子 亜希子 笑子 絹子 歌子 徳三 早智 ちよ路 愛生 純子 広和 道子 満秋

孝子 崇 艶子

聞く耳は持たず主張を通す父
 方言は耳にやさしく氣どらない
 言い訳をまたかと耳がそっぽ向く
 耳打ちが燃えて動悸がおさまらぬ
 耳痛い言葉心に刻まれる
 聞く耳を持てば道筋見えてくる
 反対の声が届かぬ消費税
 奥の手があり反対を恐れない
 反対した嫁におむつを替えられる
 入選にびつくりしてか絵が躍る
 びつくりへ対策つきて天をさす
 戦後ジャズびつくり聞いた生バンド
 テロ防止びつくり箱のふたあかず
 わが家のびつくり箱はひるね中
 黙って御免びつくりさせたくて
 同性同名私が載った死亡欄
 プロポーズびつくりさせてそれっきり
 また汚職びつくりしなくなってきた

川柳藤井寺

高田美代子報

子供等の秘密はすぐにはれて揉め
 化粧直し大阪城に春が来る
 消費税上る物価に泣く預金
 点滴の針を抜かれてやあれやれ
 好きな人ばかりと言えぬ隣組
 たまごつちみたいに夢を育ててる
 札束をかぞえ終って目がさめた
 夢でしか会えぬお前のひざ枕
 叶うなら銅より銀より金メダル

舎人 登美 由多香 佳子 幸次郎 宏章 黙光 銀嶺 道子 清子 多哥由 小生 せつ子 伝住 千秋 雄々 真一

和子 美房 キミ子 桂子 敦子 宗一 鐘造 悦子

無我夢中あの人が好きだった
 まっ白いノートに夢が踊ってる
 主語の無い男の夢は軽すぎる
 夢のつづきみたくて今日は早く寝る
 夢のよな仲人口のいい話
 やがて芽の出る日へ力溜めている
 一芽二芽数えています春の庭
 わたしのカルテ食いしん坊と書かれてる
 定年になってカルテに用が出来
 医療ミス カルテ見てたか見てないか
 カルテ見てからの看護が手厳しい
 灰色のカルテの中に置く命
 万歩計カルテと縁を切りました
 納得のいくまでカルテ梯子する
 要点は漢字で書いてあるカルテ
 カルテの中に命見切った跡がある
 倒産もある銀行を診るカルテ
 カルテ通りすれば退院出来たのに
 全快のカルテ恋など始めよう
 義理チョコを数える如月のカルテ
 この前のカルテもちょうど梅の頃

岬川柳会

八十田洞庵報

風にのるチャンス待つてる身繕い
 風に舞う粉雪子等が掴んでる
 風運ぶ花の粉かもくしやみする
 嫁った娘の風の便りに良い噂
 やさしさがいつもと違う下心
 おそ咲きのあの娘もやつと春の風

恒雄 絹歌 和樹 昭水 志洋 花梢 扶美代 みよ子 政代 三郎 二南 治子 トミ子 昭子 六六 修一 柳太 阿キ 美代子 かつみ

正美 里子 信博 鉄男 ミチエ 年子

やさしさが欲しくてボタンかけ違え
風吹けどびくともしない恋の花
寒い風犬の散歩に愚痴も出る
追い風が助けてくれたホームラン
春風の誘いにゆれるイヤリング
定年日駅のさくらが風に舞い
観梅の山道に吹く甘い風
長すぎた春優しさが凍てている
優しさはわたしだけでは無いと知り
子の熱で少し優しくなった母
おてんばもこんなやさしい母となる
誰にでもやさしいたちで罪つくる
桃の花風も口づけして通る

とつとり川柳会

武田

帆雀報

浪速子
みやこ
悦子
庄六
俣子
龍弘
幸子
みつ子
ヤエ
よし子
とみ
勇
洞庵

満点の人でないから好きになる
満点なひとがお嫁にまだゆかぬ
死んでからババ満点と人が言う
ほろ酔いのババ満点と子等は言う
満点の空だて熱が出て休む
飯風呂寝る我が家の春は満点だ
乗り心地満点馬もいらない
満点ババ寄り道せずにすぐ帰る
満点を取った人から通りゃんせ
母の掌に戻ればみんな満点だ
残雪の中で椿は身を焦す
野仏の脇役でよし紅椿
頂いた椿今年は三つ咲く
寒椿自信過剰に悔いている

昭恵
よしえ
かつみ
玲子
悦子
明美
孝男
睦子
蜚
静生
喜与志
一瑤
雅女
圭一郎

火の想い口にはしない白椿
寒椿耐える女に似て愛し
打ち首の如く椿の落ちる音
椿には雪と紺緋が似合う
紅椿座り羅漢の膝に落ち
喪の家の赤い椿が目にも痛い
ちらちらと春を探しに雪が降る
万札をちらちらさせて口説いてる
ちらちらと微罪を覗くバラの刺
レントゲン肺にちらちら雪が降る
露天風呂雪がちらちらいい湯だな
ちらちらと色気が匂う孫娘
雪ちらちら愛の台詞を忘れそう
桜ちらちらと私をたぶらかす
ちらちらと横目で誘うエスケープ
ちらちらと妬心を覗く言葉じり

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

ひろ子
一京
忠良
石花菜
帆雀
完枝
喬水
隆風
和歌子
はるお
一夫
きみ子
鬼桜
和枝
美恵子
杜的
吉太郎
正坊
重人
慶子
みつ子
しげお
石舟
柳宏子
路児
一笛

大きらい動く歩道で走る人
春の旅 一顧地蔵に百の願
ひっそりとこたつがぬるい母の留守
ひとり来て独りでかえる喫茶店
ゆつたりと地球で他所見して居れず
手術後も矢つ張りなおらない頑固
ろーズ川柳会
山崎
君子報

博史
きく子
女
ただし
悟郎
萬的
哲子
藍
キク子
ミサヲ
てる
花の下ブルーシートが盛り上がる
病得て歩けることを感謝する
桜散るまでに明日を考える
歩幅合う人とゆつくり生き延びる
その時は夢中で歩く母の道
花粉症マスクをはずし初花見
マスクあげてのど飴なめるいそぎ足
ローカル旅歩幅らしくに雲にのる
行く先は犬が知ってる散歩道
記念樹の桜多くを語らない
ふるえるほどの怒りは生きている証
みつ子

川柳句集

銀海

樫谷寿馬著

橘高薫風序文・高杉鬼遊あとがき

◇申込みは川柳塔社事務所まで

価1500円

柳界展望

★第20回鳥取県川柳大会は

3月30日、203名が参加

して米子文化ホールで開かれた。特選句次のとおり。

冠を置いてお風呂に入り
ます

天根 夢草

大切な時間が背中を通り
すぎ

内田 久枝

自転する地球の上の一家
族

林 荒介

雲海に青年の樹が伸びて
いく

泉 佳恵

北の樹は北の祈りに付っ
ている

松本 益恵

とつてもよい朝を宇宙か
ら貰う

山本 玉恵

鳥になるまで浅い眠りを
繰り返す

門脇かずお

茶碗が傾く

私も傾く

水永ミツコ

★ふあうすと川柳社は平成

8年度のふあうすと賞・紋

太賞を次のとおり決定した

ふあうすと賞は石部 明

(岡山)、同準賞は板東弘

子(香川)、進藤一車(札

幌)、門脇かずお(米子)

紋太賞は杉原正吉(笠岡)

野崎輝俊(福岡)、鷹野五

輪(福岡)、濱田玲郎(長

崎)の各氏

★96年度の川柳公論各賞が

決定した。大賞は伊藤紀子

(北海道)、めやなぎ賞は

内藤文子(福島県)、双塔

賞は西秋忠兵衛(千葉県)

新人賞は高橋房子(東京都)

の各氏が選ばれた。

★名古屋川柳社は平成8年

度旭映賞に吉田紫水氏、金

鯨賞に杉坂昌和氏を決定

★津山市芸術祭・第19回津

山川柳大会は6月1日午前

10時から津山市総合福祉会

館で開く。宿題と選者は、

かもめ『杉原正吉▽愚』林

荒介▽苦』若草はじめ▽泳

ぐ』佐藤純一▽階段』石田

寿子▽恋』奥山晴生▽首』

河瀬芳子▽顔』梶川雄次郎

(各題2句・午前11時半締

切)、会費1000円

▽出 版△

■『平成柳多留 第四集』

(日本財団補助事業・全日

本川柳協会刊・A5判30

6ページ)。第1部』全日

本誌上大会入選句集▽第2

部』誌上大会参加者自選句

集▽第3部』日川協加盟柳

社推薦句集から成り、古川

柳のはなし・川柳エッセー

と全日本川柳協会加盟柳社

名簿が収録されている。

▼訂 正▲

■3月号』P44上段・この

一句の本文3行目「成せば

成る」↓「為せば成る」

■4月号』P80上段(水煙

抄)13行目「米澤無眼子」

↓「半澤無眼子」▽P11

6(柳界展望)の住所変更

新同人紹介

森

川

薫風・紫香推薦

抜 智

森

本

薫風・紫香・智子推薦

節 子

長

浜

薫風・紫香・智子・みつ子・武庫坊

澄 子

諷人推薦

宮

本

薫風・天笑推薦

かりん

福

田

薫風・天笑推薦

満 州

▽計 報△

■野村静雄氏(同人・川西市)は3月19日、病気のた
め死去、76歳

5 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(金)午後1時から 失う・鉢・期待・退屈	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 朝・火照る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	10日(土)午後1時から 誘い・壁・目玉	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後6時から 事実・水溜まり・損・疑う	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から 空・長生き・送る	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から 階段・求める・薄い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後1時から 力・今度・影	豊中市立蛸池公民館 阪急宝塚線蛸池駅西へ150米 〒560 豊中市蛸池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木) 正午から 素朴・ひそひそ・遠い・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島風雲児
南 大 阪 川 柳 会	16日(金)午後6時から 置物・可笑的・応ずる・屋外	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸 和 田 川 柳 会	17日(土)午後1時半から 郵便・ようやく・落札・立派	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
川 柳 ねやがわ	18日(日) 正午から 飾る・健康・未知・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 辻・回る・親しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	22日(木)午後1時から 五・響く・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京 都 塔 の 会	24日(土)午前10時集合 鱗・移る・行事	春の吟行句会 本文P49参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下弁財天町 都倉求芽
東大阪市 川 柳 同 好 会	24日(土)午後6時から 突く・トップ・箱・賑やか	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	25日(日)午後1時から 器・果たす・ちょっと・メーデー	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

☆阪神大震災から三度目の春。「震災復興支援事業」と看板を掲げて、駅前などでは大々的な建設工事をして

いるが、あちこちには忘れられたように、数多くの更地が残されている。

☆校区の青少年愛護協会が募集した「あいさつ標語」に小学校一年生の「おはようはあたたかくするまほうの言葉」、四年生の「あいさつはあなたの心つつし出す」とあった。一言が人を明るくもし、傷つけもする。

☆「ふるえる程の怒りは生きている証」という句ができた。作ったのではなくてきた・生れたのである。

ペルーの人質事件・動燃事故など社会的に怒ることはたくさんあるが、最近、個人的にはあまり怒ったこと

もなく、怒らないようにもしていたのだが、この時はかりは怒った。ある人にそれを話しているうちに怒りが増してくるのを感じた。

☆折しも、手元にあった遠藤周作のエッセイの中に、フランスの哲学者アランの言葉として「怒り」というものは、その動作によって倍加される。我々は怒って手をふりあげるといふよりは

手をふりあげたために、なお、怒りが倍加するのである」とあった。

☆怒りだけに限らず、喜びもまた動作によって倍加される。旅行の支度を調べていると旅の楽しさが増してくるのは誰しも経験する。

☆六月の追悼大会に合せて路郎先生御息女・西村梨里さんの原稿も頂き、大会の準備をしているうちに遠来の柳友を迎える喜び、逢える楽しさが倍加する。(み)

風評被害

ロシア船籍のタンカー「N号」

の重油流出事故が発生したのは、正月の二日のことだった。

それ以後、日本海沿岸の広い範囲にわたって、漂着した重油の防除作業が行われた。

その時、米子地方では、幸いにも重油の漂着はなかったが、油まみれになった「うみうみ」の写真が報道されたものだから、松葉蟹シ

ーズンによる観光客や、ツアーのキャンセルが相次いだ。

重油の被害は無かったが、風評による被害にあってしまった。

沈没したままの船尾部には、まだ大量の油が残存していて、これがいつ流れ出すが、一番大きな不安である。これは風評ではなくあつてはならぬ事だから、我々も海の生き物も油の完全除去を願っている

政岡日枝子

ひとこと

▼三月のある暖かい一日、念願の灘の酒蔵めぐりに行って来た。震災後の神戸は二度目である。まず阪神電車で新在家まで出て、そこから歩いて魚崎まで戻ることにした。結論から先に言う

うと、残念ながら期待はずれであった。

▼というのも、福寿酒造の「酒心館」をはじめ、「白鶴酒造資料館」「菊正宗酒造記念館」など、ある程度

予想はしていたが、いずれも再開されていなかった。ことに菊正宗の方は、全く見通しが立っていないそう

で、他の二つは四月中には公開するとのことだった。▼ただ酒蔵めぐりという雰囲気はなく、巨大な科学工場群の中を歩いている感じがした。中には、操業を一時中止している所や、廃業気とはうらはらに、私のこころには、真冬の冷たい風が吹き抜けていた。(金)

人館街や、三宮・元町などの、中心街のことは逐一報道するけれど……。春の陽気とはうらはらに、私のこころには、真冬の冷たい風が吹き抜けていた。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（7月号）

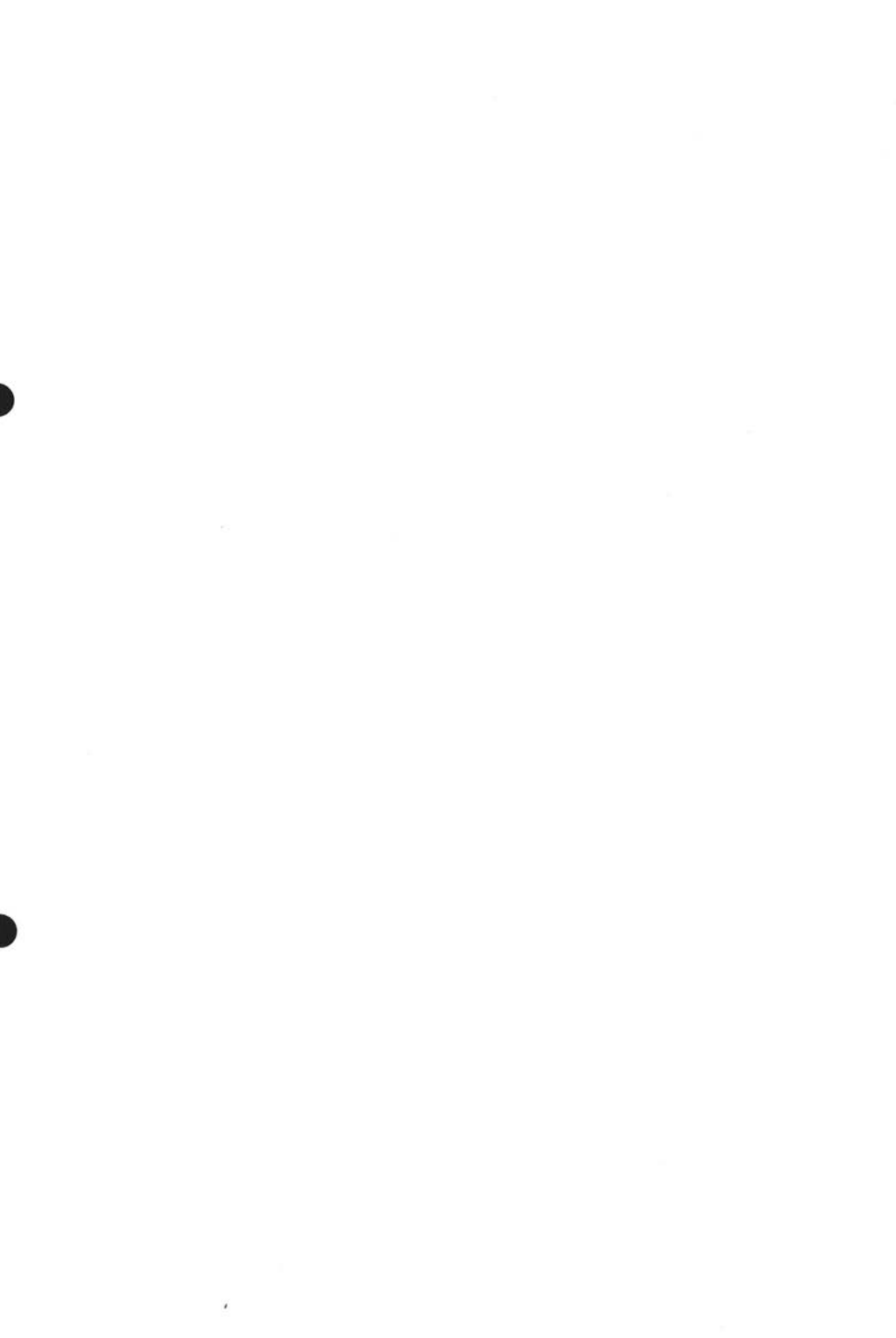
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室
「丸」(3句)
吐田公一担当

課題吟 (3句)
「真似」
山口高明選

「宿」
榎原玲子選

茴香の花 (3句)
西出楓選

渺湖抄 (3句)
八木千代選

水煙抄 (8句)
高杉鬼遊選

川柳塔 (8句)
橋高薫風選

7月号発表 (5月15日締切)

本社5月句会

会席 兼
費題 題
500円 1題 当日発表 (各題2句以内)
投句料 400円

「腰」 安藤寿美子選
「ピカピカ」 玉置重人選
「誘う」 小池しげお選
「まさか」 高杉鬼遊選
「協力」 橋高薫風選

とき
5月7日(水)午後5時半
ところ
メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

8月号
課題吟 「裏」「かむ」
「あいまい」
初歩教室 「入れる」

本社6月句会 9日(月)予定

兼題 「脳」「スープ」「ほめる」
「やっぱり」「鳥」

夜市川柳募集

第12回 「役」 橋高薫風選
ハガキに3句 5月末締切
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

本社句会の投句について

川柳塔本社句会への投句を、4月句会から復活いたしました。

投句者は句箋(19×4cm)に1葉1句、各葉ごとに裏面に氏名を明記し、投句料(80円切手5枚)を同封、必ず句会の前月末までに到着するように、川柳塔社事務所へお送りください。

NHK川柳作品募集

課題 「肩」 河内天笑選
ハガキに3句 5月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 5月24日(土)午前11時5分
からラジオ第1放送(予定)

〒545

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成九年五月一日発行

編集兼 発行人 橋高薫

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番
電話 〇六六元一六九一四番

第21回 全日本川柳三重大会

とき 6月8日(日) 午前10時開場
ところ 三重県総合文化センター・中ホール
(津市一身田上津部田1234)

宿題 第1部(事前投句・5月10日締切)

「バレード」 成田 孤舟選

「波」 保地 桂水選

「民話」 長谷川 美美女選

◎各題2句・無記名・封筒に住所・氏名
を明記し、投句料1000円(定額小
為替・現金書留)を同封して左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
ステップイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第2部(当日出句・午前11時半締切)

「太陽」 早川 双鳥選

「流れ」 奥田 みつ子選

「音」 田中 新一選

「港」 加藤 翠谷選

会費 3000円(昼食・記念品代共)

観光 6月7日(土)・4000円

前夜祭 同日午後6時半・8000円

宿泊 ホテル・サンルート(津駅前)

申込先 〒518-04 名張市桔梗が丘4-1-10 木野方

全日本川柳三重大会事務局



本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928